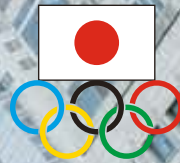


OLYMPIC X ATHLETE

OLYMPIAN

2009



日本だから、できる。
あたらしいオリンピック!

2016年東京オリンピック・パラリンピック招致活動

OLYMPIC X ATHLETE
OLYMPIAN
2009

CONTENTS

04 特集

日本だから、できる。
あたらしいオリンピック!

- 06 スペシャル対談
石原慎太郎×室伏広治
- 11 2016年東京大会
立候補ファイルを読み解く
- 19 オリンピック・パラリンピック招致活動から生まれるもの
東京レガシー

23 目指せ、2016年!

ニッポンのスポーツタレントたち

—JOCエリートアカデミー—

- 24 明日の金メダルと未来へ
- 30 JOCのジュニア強化
- 31 ジュニア育成の鍵
—競泳コーチ・久世由美子—

- 34 嘉納治五郎IOC委員就任100周年特別企画
今こそ求められる嘉納治五郎の精神

38 バンクーバー冬季オリンピック
チームジャパンの挑戦

- 40 競技別注目選手
- 52 チームジャパンを支える者たち

55 JOC 活動報告

Cover photo : PHOTO KISHIMOTO





特集

日本だから、できる。 あたらしいオリンピック!



はじまりは、1940年のことだった。

アジア初のIOC委員となった嘉納治五郎は、日本でオリンピックを開催することの意義を訴え、その榮譽を勝ち取った。

しかし、それは「幻のオリンピック」となった。

戦後――。

復興した日本は、国際社会への復帰を

「平和の祭典 オリンピック」に求めた。

1964年10月10日。

澄み切った東京の青空に

五輪の雲が浮かび上がった。

93の国と地域から集結したアスリートの競演に

日本中が熱狂した。

あの時の歓喜を、再び日本に。

3度目のオリンピック招致活動は、

いま、決戦のときを迎えている。

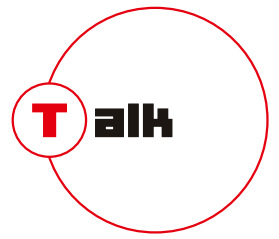
有形無形の遺産を次世代につなげるために

半世紀を経た2016年の夏、

日本だからできるオリンピックが、ある。

PHOTO KISHIMOTO (7)





日本だから、できる。
あたらしいオリンピック!
Uniting Our Worlds

スペシャル対談

石原慎太郎 × 室伏広治

東京が開催を目指している2016年オリンピック・パラリンピック。開催が実現したら、7年後の東京には、どんな感動があるのか。64年大会を知る石原慎太郎会長と、アスリートとして3度のオリンピック出場を果たした室伏広治理事が、オリンピックの感動体験を語り合った。

——知事は、1964年東京オリンピック

クについて、立候補ファイルに「国家は違えても世界は世界としてあり、民族を違えても人間は人間としてあることを痛感した」とお書きになってます。そのような感想を抱かれたオリンピックのシーンや言葉を、まずはご紹介ください。

石原 記憶にあるのは、まず開会式や閉会式で、世界の選手が渾然として参加する姿ですね。競技では、日本の女子バレーが優勝した瞬間。本当に涙を流して喜んだからね。それとマラソン。アベベ選手（エチオピア）がダントツで入ってきて、2番目は誰かと会場のモニターを見ていたら、田谷幸吉選手が映った。みんな喜んでいたけど、走り方が頼りないんだ。3番目は誰かと思ったら、すぐ後ろにヒートリー選手（イギリス）がしっかりと足取りで追いかけて来た。それで思わず「ダメだ、抜か

れるぞ」と言ったら、後ろからボカリと殴られたんだ。「よけいなことを言うな！」って。結局、田谷選手はバックスタンドで抜かれて、4番目も迫っていたけどかろうじて3位でゴール。陸上競技では、最後の最後になんとか彼が3位で日章旗を揚げてくれたんだ。それにしても長距離ランナーっていうのは、孤独だね。42kmのなかでどういふふう

に自分を騙したり励ましたりするの。単調なようでそうでない。今でもマラソンのテレビ中継が大好きですよ。——室伏さんは、父・重信氏が、東京オリンピックでは代表選考に臨まれていましたか……。

室伏 ハンマー投は技術を習得するのに時間がかかる競技で、当時18歳だった父は、代表になれませんでした。結局、オリンピック初出場は72年ミュンヘン大会でした。東京オリンピックについては、地元の街で聖火ランナーが走っ

たという話は聞いたことがあります。

石原 僕はね、子どものころに、36年ベルリンオリンピックを撮影したレニ・リーフェンシュタール監督の記録映画『民族の祭典』を見て、とても感動しました。しかし、オリンピックは遠い世界のもので、日本に来る実感がなかった。それが実際、64年にオリンピックに係わってみると、ああ本当に素晴らしいものだと思いますね。

室伏 僕は、自身で3回オリンピックに出場しましたが、父が出場した84年ロサンゼルスオリンピックを観戦したのが、初めてのオリンピック体験で、9歳でした。非常に和やかな雰囲気。印象に残っていますが、ただ不思議に思ったのは、競技場の中と外とのギャップです。競技場ではあれだけ熱い戦いをしていのに、外ではポップコーンを食べたり、家族でにぎやかにやっていたりで、まさに平和の祭典のイメー

ジ。どのオリンピックに行っても同じ印象があります。自分が競技者となっても、ただ単に中に入っただけ。

石原 それはね、室伏さんが普通の観客とは違って競技者だからでしょう。やはり競技場へ入るときの緊張感を知っている人と、オリンピックを見物する一般の市民とは、それは歴然と違うと思いますよ。

室伏 そうですね。
石原 競技場で、オリンピックが繰り広げられる競技はロゴスではなしにエロスなんだな。オリンピックの肉体や身のこなしは素晴らしい。見ている私たちがすれば、同じ人間がこれだけのことをできるのかという驚嘆もあります。オリンピック以外にも大きなスポーツの世界大会はありますが、イベントとしての華やかさでは、やはりオリンピックです。
——室伏さんは、古代ギリシャの円盤



石原慎太郎

東京オリンピック・パラリンピック招致
委員会会長 / 東京都知事

1932年生まれ。56年、橋大学在学中に「太陽の季節」で第34回芥川賞受賞。68年参議院議員初当選。72年衆議院議員初当選。環境庁長官、運輸大臣を歴任。99年、「東京から日本を変える」をスローガンに東京都知事選挙に出馬し、当選。現在三期目。中学校よりヨットを始め、太平洋横断レースなど多くのヨットレースに参加。80〜93年(社)日本外洋航海協会(NORC)会長、94〜99年同名譽会長。ほかにサッカー、テニス、スキューバダイビングなどさまざまなスポーツ歴を持つ。

進行役 結城和香子

(読売新聞編集局運動部次長)

室伏広治

東京オリンピック・パラリンピック招致
委員会理事 / 陸上競技ハンマー投メダリスト

1974年生まれ。00年シドニー大会より3大会連続オリンピック出場。04年アテネ大会金メダル、08年北京大会銅メダルを獲得。成田高校、中京大学を経て2008年、中京大学大学院体育学研究科博士過程修了。現在、中京大学大学院体育学研究科研究員。父・重信氏と二人三脚で、長きにわたって日本投てき界をリード。現在はロンドン大会出場を目指し、研究とスポーツの両立による相乗効果を実感する中、スポーツ界や社会に向けてフィールドワークすることを目標としている。

PHOTO KISHIMOTO (4)





東京オリンピックバレーボール女子決勝戦
3セット目にロシアと白熱した戦いの末、日本が勝利



投の像を、競技者の理想像だとおっしゃっていますね。

室伏 古代アテネの彫刻家、ミュロンの円盤投の像ですね。これから投げるという瞬間をとらえた像にもかかわらず、非常に顔が穏やかなんです。ということは、勝敗だけではなくて、何か違うものも投げていると思わせませう。自分との戦いなのかもしれない。古代のオリンピックは、どういう理想を持って競技をしていたか、ということが凝縮されている姿です。

石原 僕もそう思いますね。

室伏 そうですか！

石原 最高の試合に出る選手たちは、ある意味、全く緊張感を感じさせないし無表情にも見えるんだね。あそこで表情が出てしまうと、逆に意識がこわばって、競技で完全に自分の力が出せないんじゃないかな。

室伏 競技に入る前の一瞬の静けさですかね。

石原 なるほど。

室伏 いろいろと考えさせられることがあって、ミュロンの円盤投は非常に印象的です。

石原 いや、室伏さんもそうだよな。試合に臨む選手たちは、集中し切っていて、むしろ表情がないように見えますね。例えば、陸上競技の100mでスタートする瞬間の選手の顔もそう。決して気負っていないですね。あの表情は何と表現すればいいんだろう。うまく表現できないなあ。

——その瞬間に、選手は何を考えているのですか？

室伏 いや、もう何も…。

石原 考えていちやダメだ。何かを考えて競技に集中できるわけないよ。

室伏 集中力ですね。

石原 でも、声はやはり自然に出るんでしょう？

室伏 出ますね(笑)。気持ちが入って、もう自然に。北京オリンピック後にも言いましたが、わずか2時間足らずの競技で、僕の4年間が終わってしまうんです。でも、そこに懸けるのがアスリートであり、そこが面白いところです。4年間のすべてが凝縮された2時間足らずとも言えますね。

石原 なるほどね。オリンピックはやはり選手が主役なんですよ。そうなる、よけいに室伏さんがお気の毒に思えるのは、ドーピング問題です。大会終了後に金メダル、銅メダルでは、不本意だろうし…。

室伏 そうですね。それはもうすっきり、メダルをいただきたいですよ。

石原 もう一度アテネに行って、無人生でもいからスタジアムで国歌を流し

ちゃえばいい(笑)。

室伏 アテネはオリンピック発祥の地ということで、印象的なオリンピックでしたな。

石原 それにしても、ハンマー投のあんなに重い鉄の球を、しかも間口の狭いカゴの中から投げるときに、いい角度に乗せられたかどうかの微妙な違いは、わかるものですか？

室伏 わかります。もう本当に一瞬のことですから、何かちょっと気持ちに迷いがあり、それで角度が2度でも違えば、結果は大きな違いになります。

石原 やはり気持ちで違ってくる？

室伏 気持ちのブレが、結果に顕著に表れる競技だと思います。コマと一緒に、軸がブレてしまうと記録には結びつきません。

——知事にとって、2016年東京オリンピック招致を決定させるものは何

AFLO SPORT



父・重信氏が出場した1984年ロサンゼルスオリンピックが初めてのオリンピック体験



だったのでしょうか?

石原 このごろの日本では、あまりジーンとくることがないじゃない。この前のWBC(ワールドベースボールクラシック)では、久し振りにみんなが「やったー!」という感じになりましたが、まあ、感性を揺さぶられるドラマは少ないですね。それがオリンピックにはあります。

室伏 そうですね。4年に一度というサイクルで、たった1日のある時間に調子を合わせなければなりません。それは大変難しい作業ですね。もし違う時間に競技を行なったら、また違う結果になったかもしれません。だからドラマを呼ぶんですね。

石原 先ほど室伏さんが言ったように、4年間の人生が、競技のわずか1、2時間に込められているわけですね。——だからこそ、国民がひとつになる

ような感動の一瞬が生まれるのかも知れませんね。

石原 最初に話した東京オリンピック、東洋の魔女(バレーボール女子日本代表)が勝利しましたね。最後は相手選手がオーバーネットして勝つわけですが、息をつめて見ていたのに、あつけないと言えばあつけない幕切れでした。でも、あれもまたひとつのドラマだよな。

室伏 結局、立派なプレーをしてね、勝ったり活躍したりすれば、みんなは感動します。愛国心とかいったものではないけれど、国家や民族、同じ言語が人を結びつける力がありますよ。不思議なことに。——2016年オリンピックには、何を求めたいですか?

石原 それはもう感動ですよ、感動。勝っても負けてもギリギリの試合をしてもらいたい。それでいうと、どのオリンピックだったかな、当時、東洋の

鉄人と言われた台湾の楊伝広選手が出場したのは?

室伏 60年のローマオリンピックですかね。

石原 彼は十種競技で、アメリカのレイファー・ジョンソン選手と金メダルを争うんだ。その競技の途中で、ジョンソン選手と楊伝広選手が毛布にくるまって、じっと休んでいるところを撮影した写真があつて、それが実にいいんだ。最高の競技、最高の結果を目指す選手というのは孤独なんだとわかる写真でした。

——そんな魅力もあるオリンピックが東京で開催されたら、日本人にどのような影響があると思われませんか?

室伏 世界が日本を、東京を注目するということとは、僕たちもホスト国の人間として、日本の良さをどんどんアピールしなければなりませんし、日本の良さが色濃く浮かび上がるような行事も

必要でしょう。世界で注目されるいい機会だと僕は思います。

石原 これはイギリスの大使から聞いた話ですが、2002年にサッカーのワールドカップを開催したときに、初めて日本にやってきた人が多数いて、そういう人が日本では何を食べてもうまいと感心したそうです。そういうことは、やはり来てみないとわからないよね。また、イギリスの雑誌が「世界で一番住みやすい町」という特集をしたら、東京はコペンハーゲン、ミュンヘンに次いで3位でした。ただね、コペンハーゲン、ミュンヘンもいい街だけど、人口が違います。東京のように大きな街で、治安も良ければ、飯もうまいという所は、そうはありませんよ。

室伏 食文化も含めて、日本には本当に誇れるものが多いですからね。

石原 来日して1年くらいになる外国



PHOTO KISHIMOTO

トップアスリートが小学校を訪れるプロジェクトで
児童と触れ合う室伏理事



人たちに、日本の何がいいと尋ねたら、ボディランゲージという答えでした。「お先にどうぞ」とか「失礼」とか、動作を伴う〈言葉〉がありますね。これが素晴らしいと言っていましたよ。

室伏 そうですね。

石原 それを海外から来る人にわかってもらいたいね。

——立候補ファイルでは環境や平和など、いろいろなものがビジョンの中に挙がっています。その中で何をわかってほしいですか？

石原 全部わかってもらいたい。

室伏 東京、日本のすべてですね。

石原 そうそう。

室伏 スポーツの関係者ではない人に、スポーツの良さを知ってもらうのは、僕らの役目なのかなと思います。東京マラソンをはじめ、すでにスポーツに関する

いろいろなイベントがありますが、例えば、首都高速道路を1日、自転車だけに開放するといったような、スポーツに親しむ大規模なイベントはもつとあっていいと思います。そういうイベントには、僕もどんどん参加して、スポーツに親しむ人を応援したい。通常、スポーツは都心を離れた郊外や、スペースのある所ですが、それが都心でできるというところが、2016年東京大会の計画のすごさだと思います。

石原 ただ日本人は、意外にスポーツをしないんだよね。まあ、海外でもそういう傾向らしいけど、子どもたちも部屋の中で、テレビゲームをしていたりするからね。

室伏 まったくそうですね。

石原 少しでもスポーツをした経験のある人は、ほかのスポーツを見ても、

感心したり共感できたりします。

室伏 子どものころから、そういう機会を与えられるような環境を、ぜひ東京につくってほしいですね。

石原 スポーツとは、結果がどうであらうと、トレーニングして頑張ることだよ、本当はね。

室伏 絶対やってやろうとか、成し遂げようとか、そういう気持ちで、スポーツは培うことができます。

石原 向上心を持ってスポーツすることと、体を鍛え、精神的にも鍛えられるということなんですよ。

室伏 2016年に東京でもう一度オリンピックを開催するために、僕たち現役のスポーツ選手にできることには、どんなことがあるでしょうか？

石原 昨年、丸の内でもトップアスリートに棒高跳や走幅跳、短距離走などを

やってもらいました。東京の真ん中で棒高跳は迫力があって、圧倒されたね。本当のことを言うと、室伏さんにもあそこで……。

室伏 ハンマーを投げますか？

石原 ぶん投げてもらいたかったけど、それをやると建物が……。

室伏 ハハハ。

石原 ただ、室伏さんは日本のオリンピックの中でも、スタイルも何もかもカッコいいんだから、東京では車に乗らずに歩いてほしいな。

室伏 わかりました。

石原 「あつ、室伏だ」と、みんながわかるからね。そして、サインしているときに「オリンピックやるうな」と、声をかけるだけで、誰もが奮い立ちますよ。トップアスリートが働きかけることで、もつと普遍するはずなんだ。



オリンピック・パラリンピックを 開催するとうとうのこと

オリンピックが 開催都市にもたらすもの

1964年の東京オリンピックを迎えた日本は、新幹線や高速道路が走る近代的で、平和な姿を世界に披露する

ことができた。それは第二次世界大戦の惨禍から立ち直り、社会・経済が復興したことを示すものであり、同時に、国民に自信と活力を与え、その後のさらなる経済発展にもつながった。64年大会を契機に、日本は国際社会の重要

な一員として、平和国家としての地位を築くことができたのである。また、東京オリンピックに参加した国内外の選手の活躍は、多くの国民に感動を与え、スポーツの持つ素晴らしさを伝えることになった。現在の日本でさまざまなスポーツがトップアスリートから市民レベルに至るまで幅広く行なわれているのも、この体験がベースになつているといえる。近年のオリンピックは、開催都市に

大きな経済波及効果をもたらす。立候補ファイルには、2016年東京大会での経済波及効果を、東京だけで1兆5500億円、日本全体では2兆9400億円と見込んでいる。このようにオリンピックは、開催都市や国、そこに暮らす人々に実に多くのものをもたらす、社会を変える大きな力がある。これほど影響力のあるイベントは他にはないことから、多くの都市が開催を希望するといえるだろう。

2016年東京大会 立候補ファイルを読み解く

東京が目指す「あたらしいオリンピック」とは

大会理念

平和に貢献する
世界を結ぶオリンピック・パラリンピック

大会コンセプト

世界最高の環境 ヒーローたちの檜舞台

AFLO



現地時間の2009年2月12日、ローザンヌ(スイス)でIOCへと手渡された立候補ファイル。詳細な開催計画を記したこのファイルは、和紙を使って和綴じで製本し、風呂敷に包まれた日本独自のスタイルとおもてなし精神が強調されている。大会理念に「平和」、大会コンセプトに「アスリートファースト」を掲げる東京の開催計画を読み解く。



4月に来日したIOC評価委員会による事前調査では、東京の街を再現したジオラマでコンパクトな会場をアピール

再びオリンピックの意味 東京で開催する意味

64年大会の開催から約半世紀、東京は都市として繁栄し、日本の社会は成熟度を増している。その東京で再びオリンピック・パラリンピックを開催する意味や動機は、当然のことながら64年当時とは大きく異なる。

今や世界最大規模の都市となった東京は、さまざまな課題に直面するようになり、変革の時期を迎えている。

立候補ファイルに掲げているオリンピック開催の動機は、オリンピックを通じて都市と人間を再生し、新しい連帯を生むことによって、こうした課題を解決するというものだ。

具体的な課題のひとつは、東京を自然環境と調和した持続可能な都市にするということ。高齢化が進んだ社会を、再び活力と自信にあふれた価値ある社会に変革するということも、課題として挙がっている。

東京が必要としているのは、まさにオリンピックが目指す国際平和、調和、持続可能性、社会正義なのである。

「10年後の東京」計画と 合致した招致ビジョン

東京都は2006年に、より機能的で魅力的な東京の未来に向けて、長期的な戦略である「10年後の東京」計画を策定した。この戦略では、東京を世界で最も環境負荷の少ない、低カーボンで緑あふれる持続可能な都市に再生

すること、スポーツの振興を通じた子どもたちの健全育成、生涯を健康的に過ごせる社会の創造などを目指している。2016年東京オリンピック・パラリンピックのビジョンと内容も時期も重なる。

両者は密接に関連し、相互に補完する関係にあり、2016年東京オリンピック・パラリンピックは、「10年後の東京」計画の取り組みを加速させ、東京を変革させる大きな力となる。

すでに、東京湾の埋立地に植林し森をつくる「海の森」プロジェクトのように、開始されている事業もある。

IOCは、立候補都市の長期計画とオリンピックのビジョンとの合致を求めているが、東京はその求めに十分に応えている。



ムータワキルIOC評価委員会委員長は、「海の森」視察で出迎えた子供たちと植樹活動を行なった



スローガン 「日本だから、できる。あたらしい オリンピック・パラリンピック!」

64年大会のレガシーを
さらに50年後のレガシーに

2016年東京大会では「日本だから、できる。あたらしいオリンピック・パラリンピック」をうたっている。「日本だから、できる」とはどういう点か、具体的に計画を見ていこう。

まず大きな特徴のひとつが、競技会場は、既存施設を最大限活用することだ。競技会場の約7割は、1964年大会のレガシー(遺産)など既存のもので、その中には、国立霞ヶ丘競技場や国立代々木競技場など、64年大会の会場が含まれている。

1964年東京オリンピックの開会式は国立霞ヶ丘競技場で行なわれた



Getty/AFLO

サッカー会場であり、マラソンのスタート地点ともなる国立霞ヶ丘競技場、ハンドボール会場になる国立代々木競技場は、すでに建設から50年を経ているが、現在もさまざまなスポーツの大会などに活用されており、生きたレガシーとなっている。これらの会場が2016年東京大会の水準に達するよう日本の技術力で改修されることによって、さらに50年、合わせて100年ものレガシーを持つことになる。

既存の施設を有効に利用することは、環境負荷の少ない持続可能な都市の再生という、東京都の長期戦略にも合致するものだ。



東京湾を望むオリンピックスタジアム

**半径8 km圏内に
ほぼすべての競技会場を集約
世界一コンパクトな会場配置**

既存施設の利用と並んで、大きな特徴になっているのは、世界一コンパクトな会場配置だ。射撃会場とさいたま市や横浜市などで行われるサッカー会場を除いて、すべての会場が晴海に新設されるオリンピックスタジアムから半径8 km以内に位置する。

競技会場は、国立霞ヶ丘競技場や国立代々木競技場など、64年大会の会場が集まる「ヘリテッジゾーン」と、東京湾沿いの「東京ベイゾーン」に大別される。そして、両ゾーンが交わる場所に「結びクラスタ」があり、オリンピックスタジアム、選手村、IBC（国際放送センター）／MPC（メインプレスセンター）の主要3施設が含まれる。

主要3施設は3 km圏内に設けられるので、選手たちは選手村を出発後、わずか5分でオリンピックスタジアムに着くことができる。また、70%の選手が、10分以内にそれぞれの競技会場に行くことができ、その他の選手も、ほぼ20分以内に会場に行くことができる。短時間での移動は選手に無用のストレスを与えず、よりよいコンディションを提供するものだ。

このように東京の中心部そのものが、ひとつの巨大な競技フィールドになり、その中で、オリンピックという世界最大のスポーツ・文化の祭典が展開される。



代々木公園アリーナは、バレーボール会場として新設される。建物の屋上が広場となっており、屋上緑化や壁面緑化が施され、その形や高さが公園の木々と融合するように設計されている

る。競技会場へ最低限の時間で移動できるので、コンパクトな会場配置は利便性が高いだけでなく、環境負荷も少なくなる。

**世界初の試み
カーボンマイナス・
オリンピックへの取り組み**

東京都は「10年後の東京」計画に基づいて、2020年までにカーボン（CO₂）排出を2000年に比べて25%削減する取り組みを始めている。そこで2016年東京大会では、世界初の試みとしてカーボンマイナス・オリンピックに挑戦する。

具体的には大会の計画段階から準備・運営・撤去段階に至るまでのCO₂排出量を算定し、それを上回るCO₂削減を実現することになっている。

そのために、東京湾の埋立地に48万



結びクラスターは、東京の過去を象徴するヘリテッジゾーンと新たに開発された東京ベイゾーンとを結ぶ場所に位置する



パレス・クラスターは、ヘリテッジゾーンの中に位置し、皇居を中心としている。このクラスターには、日本武道館が含まれている



ヘリテッジゾーンの代々木クラスターには、極めて良好に管理された1964年東京大会のレガシーが数多く存在する



東京ベイゾーンに位置し、埋立地からなる海の森クラスターは、東京の新しい「海の森」として生まれ変わる



夢の島クラスターは、東京ベイゾーンに位置し、20世紀半ばに埋め立てられた人工の島からなる

本の木を植えて88haの森をつくる「海の森」プロジェクトをはじめ、公立小中学校などの校庭の芝生化、街路樹の倍増、河川や運河の護岸緑化、公共交通機関の沿線緑化などを実施し、新たに1000haの緑を生み出す予定だ。また、日本が持つ最先端の省エネ技術なども活用して、CO₂を削減する。

さらに、太陽光や風など自然エネルギーの活用、環境負荷の少ない交通・運輸システムの構築、電気自動車や燃料電池自動車など無公害車の大会関係車両への導入、廃棄物ゼロ施策の推進、大気・騒音・水質などの環境負荷の最

小化も計画されている。オリンピックによって、環境は破壊されるどころか、大きく改善されることになる。

スムーズな大会運営に日本ならではの先進技術を活かした取り組み

カーボンマイナス・オリンピックの実現に向けて最新の環境技術を駆使すると同様に、情報通信の分野などでも日本ならではの新しい技術が導入されることになっている。

多機能ICカードは、身分証明書、競技観戦チケット、公共交通機関の乗車券、買い物機能などを1枚のICカードに集約したもので、大会関係者や観客にとって便利な存在になることが期待されている。情報掲示板は競技会場への道案内、競技結果などの情報をリアルタイムで掲示するもので、ユビキタス・コミュニケーションは、会場案内や選手のプロフィールなどの情報を提供するもの。ともに観客の利便性を大きく高めるだろう。

また、光ファイバーを用いた大容量・高速の電気通信サービスの提供、これ

までにないクリアな画像を配信する超高精細映像機器の設置、円滑な輸送を確保する高度道路交通システム（ITS）の導入なども予定されている。

首都東京の魅力を十分に味わえる大会に

東京の中心で行なわれるオリンピックは、観客にとって、首都東京の魅力も安心して楽しめる大会になる。というのも、IOCの要求基準をはるかに超える約8万室（10km圏内）の高品質かつ豊富なホテルインフラをはじめ、公共交通機関やセキュリティも世界に誇り得る高い信頼と実績があるからだ。ちなみに、IOC作業部会による申請ファイルの評価報告でも、東京の「宿泊施設」「安全」「環境」「選手村」については、最高の評価が与えられた。今後は2016年に向けて、公共交通機関にはユニバーサルデザインの導入やホームドアの設置など、ハード、ソフト両面での充実が図られるほか、セキュリティも関係機関の連携のもと、万全な体制が用意される予定だ。

東京には世界的に名高いグルメ、ファッション、ショッピングのスポットが数多くあり、伝統芸能からポップカルチャーまで豊かな文化もある。東京で開催されるオリンピックは、都市生活とオリンピックを完全に融合させることにより、すべての人々が参加を実感できる新しいモデルになるだろう。

大会理念

「平和に貢献する 世界を結ぶ オリンピック・パラリンピック」

**東京が掲げている
大会の理念としての
世界平和への貢献とは…**

2016年大会の理念として掲げている「平和に貢献する 世界を結ぶ オリンピック・パラリンピック」。東京はどのように平和に貢献するのか、また、世界をどのように「結ぶ」のだろうか？

オリンピックは、改めていうまでもなく「世界平和の祭典」である。64年の東京大会は、平和国家としての日本



1896年のIOC委員。右端がクーベルタン

Getty / AFLO

Kodokan Judo Institute



IOCカイロ会議の後、東京開催を支持した米国のIOC委員を表敬訪問した嘉納治五郎。バンクーバーから氷川丸に乗って日本へ出発（出発直後に病気のため倒れた）

Kodokan Judo Institute



日本が初めてオリンピックに参加した1912年ストックホルム大会開会式

の再生を祝うものであった。それから40年以上が過ぎ、また、1909年に近代柔道の創始者である嘉納治五郎が、日本人として初めてIOC委員に就任し、オリンピック・ムーブメントに参加し、今年で100年になるが、依然として世界各地で紛争があり、戦火のやむ気配はない。

第二次世界大戦後の60年間、一貫して平和を守り、64年の東京オリンピックによって平和国家としての地位を確固たるものとした日本が、オリンピッ

**嘉納治五郎の名のもとに
世界平和への貢献を
積極的に推進**

クを開催し世界平和を訴えるのは、もはや責務といえるだろう。

世界平和への貢献のために、また、オリンピック・ムーブメントへの貢献のために、日本、アジア、そして世界へ、「近代オリンピックの父」であるクーベルタン男爵が提唱したオリンピックイズム、言い換えればオリンピックの理想を、2016年東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて、継続的に発信することが、立候補ファイルでは計画されている。

クーベルタン男爵のオリンピックイズムとは「スポーツを通して心身を向上させ、さらには文化・国籍などさまざまな差

異を超え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって理解し合うことで、平和でよりよい世界の実現に貢献する」というもの。それを、国際競技大会やイベントの開催、ドーピング防止活動、オリンピック教育プログラムやオリンピック研究への支援といった一連のプログラムを通じて発信することになっている。

クーベルタン男爵のオリンピックイズムと日本発祥の武道精神との融合を目指したこのプログラムは、嘉納がIOC委員に就任し、ちょうど100年目にあたる今年5月、JOC、日本体育協会、日本アンチ・ドーピング機構、東京都スポーツ文化事業団が連携して設立した「嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター」で展開していくことになる。2016年東京大会後には、オリンピックスタジアム内への設置も構

一方、「Unite」、つまり「結び」とは、東京におけるさまざまな地域社会、スポーツに対する日本人としての誇りと情熱、そして、世界中のオリンピックやパラリンピックに携わる人々といったいろいろな要素をひとつに結びつけることである。

水引をモチーフにした招致ロゴを制作したインタダストリアルデザイナーの榮久庵憲司氏は「日本人の中にある『結び』の心を、水引を使って表現しました。しかし結ぶのは大陸と大陸、国と国だけではありません。人と人、日本と世界、子どもたちと未来と、あらゆるものを

あらゆるものを「結ぶ」こと その願いを 招致エンブレムに込めて

想されている。



PHOTO KISHIMOTO ©

1964年大会から2016年大会へ。オリンピックは感動体験を子どもたちへと「結ぶ」架け橋

結び合い、ひとつにしたいとの願いが込められています」と語っている。

その言葉通り「結ぶ」とは、オリンピックと都市の日常生活、伝統と変革、都市化と持続可能な発展、テクノロジーとスポーツ、若い世代と高齢世代といった、すべてのつながりも表している。それはオリンピックズの考えそのものであり、21世紀に必要とされる多文化間の価値をつなげることもつながるものだ。

クーベルタン男爵 嘉納治五郎、それぞれの 思いを実現へ

クーベルタン男爵は晩年の手記に、第二次世界大戦の激化で東京が返上することになった1940年のオリンピックについて、次のように書いてい

る。東京でオリンピックが開催されることで、ヨーロッパ文化の基礎であるヘレニズムが、アジアの洗練された文化・芸術と混じり合うことが大切だと、クーベルタン男爵はまた、オリンピックの理念は時代とともに変化しなければならぬとも主張していて、東京でのオリンピックはその契機になると考えていたのかもしれない。

それに対して、嘉納治五郎はオリンピックを世界的な文化にするために、オリンピックに武道精神を組み入れることを考えていた。

それは、心身の調和的な発達を求めたヘレニズム思想の展開であるオリンピックズに、「精力善用・自他共栄」の武道精神を加味するという考えだった。「精力善用・自他共栄」とは、目的を果たすために最も効力のある方法を用い、つづ、それを実生活に活かすことによ



て、人間と社会の進歩・発展に貢献することである。この考えは、オリンピックと矛盾するものではなく、むしろ、より発展的な考えだったといえるだろう。

このように、オリンピックの偉大な先達が、すでにさまざまな価値の融合と統合を目指していたのである。「平和に貢献する 世界を結ぶオリンピック・パラリンピック」という大会理念は、最高水準のスポーツを軸として、あらゆる価値をひとつの都市の中心で融合し、統合するということである。それは、かつてクーベルタン男爵や嘉納治五郎が理想とした姿ともいえるだろう。

2016年東京オリンピック・パラリンピックは、世界中の人々を結んだ祝祭となり、オリンピックの本質である美しい夢と大きな感動を与えてくれるものになるに違いない。



大会コンセプト

「世界最高の環境 ヒーローたちの檜舞台」

アスリートのニーズに応え アスリートに捧げられる大会

2016年東京オリンピック・パラリンピックは、何よりもアスリートのニーズに応え、アスリートに捧げられる大会になる。そのためにIOCやIPC（国際パラリンピック委員会）、IF（国際競技連盟）などの各組織と緊密に連携し、アスリートの最高のパフォーマンスを引き出す「最高の檜舞台」を用意することになっている。

たとえば、選手村を競技会場の中心に用意し、どの会場へもきわめて短時間で移動できるように計画したのも、アスリート最優先の考えによるものだ。

快適な空間を目指して アスリートの意見も入れて 計画されている選手村

すべてのアスリートにとって、選手村は大会の中心であり、さまざまなニーズを満たす必要がある。「ベイスайдビレッジ」と呼ぶウォーターフロントに設けられる選手村は、選手が競技に向けて集中力を高める場所であり、また、リラックスする場所でもあることから、最高水準の利便性、安全性、快適性を提供する。



東京湾岸にただちに建設が着手することが可能な都営地に、「ベイスайдビレッジ」と呼ばれる選手村を建設する。低層建築の居住空間であり、持続可能性に最大限配慮して建設され、選手村から10分以内で、70%のオリンピックが各自の競技会場へ移動できる

選手村の設計では、コンパクトな施設に各施設を効果的に集積して利便性を高めることや、村内の施設を歩行者デッキで結んで移動の効率性を確保することなどが特徴になっている。寝室についても選手村に要求される広さを上回る面積が確保されている。

また、選手村の設計や運営の計画作成に当たっては、選手村で暮らした経験のあるアスリートの意見が反映されている。東京オリンピック・パラリンピック招致委員会アスリート委員会の要望を取り入れて、メインダイニング以外にカジュアルダイニングを宿泊施設の近くに設けたり、くつろげる環境を確保するために各所に中庭やオープンデッキを設置したりしている。食事のメニューを増やしてほしいなど運営面での要望についても、実現に向けて検討を続けることになっている。

選手村の運営は、大会開催期間中の最優先事項のひとつで、なかでも食事、

輸送、体調管理、レクリエーション、NOC（国内オリンピック委員会）への支援などに重点を置くことになっている。

万全のコンディションで 力を発揮できる 環境を確保するために

「10年後の東京」計画に基づき、東京都では都立病院の再編整備など医療体制の一層の充実を進めている。2016年東京オリンピック・パラリンピックでは、アスリートや関係者、さらには海外からの観客は十分な医療の提供が受けられるに違いない。

現在の計画では、アスリート、IOCやIFなどの関係者が利用できるオリンピック病院は、6カ所用意されることになっている。オリンピック病院には内科、外科、救急医療をはじめ、あらゆる分野の診療科目と最新の医療機器が備わり、優れた医療サービスが提供される。また、選手村にも総合診療所を設置し、24時間体制で医療サービスを提供する。

アスリートの健康を守り、スポーツの価値を守るために、ドーピング防止活動にも注力することになっている。日本にはアジアで最初のWADA（世界アンチ・ドーピング機構）認定の分析機関があるなど、ドーピング防止に向けた長い経験の蓄積があり、優れた分析能力もある。

こうしたノウハウを活かし、アスリートがクリーンな環境の中で最大のパフォーマンスを発揮できる大会運営を行う。



河野一郎

東京オリンピック・パラリンピック招致委員会事務総長

東京レガシー

オリンピック・パラリンピック招致活動から生まれるもの

2016年東京オリンピック・パラリンピック招致活動の目指すゴールは、オリンピックの開催にほかならない。しかし、その活動は日本のオリンピック・ムーブメントに確かな影響をもたらしている。河野一郎招致委員会事務総長に、招致活動のレガシーをうかがった。

Photo by PHOTO KISHIMOTO

何が遺せるかを考えながら 当初から活動を続ける

オリンピックの招致活動は、当然、オリンピックの開催を獲得することを第一の目的に進めるのですが、ただそれだけでは、活動のあとに何も残りません。私たちは、オリンピック・ムーブメントのために何が遺せるのかを、当初から考えながら活動してきました。その結果、今の時点でも有形無形のレガシーを残すことができたと思っています。

まず有形のものでは、オリンピック教育のテキストの制作が挙げられます。オリンピック・ムーブメントの目的のひとつは、心と体のバランスのとれた人間を育てることです。そもそも教育と密接に結びついているのです。教育にはやはり適切なテキストが欠かせないことから、東京都教育庁監修のもと、日本体育協会、日本オリンピック・アカデミー、

日本オリンピックアソシエーション、日本パラリンピック委員会や教育者など専門家の皆さんと一緒に制作しました。

この取り組みには実はお手本があつて、世界で初めての試みとしてオリンピックの読本を制作したのは、64年の東京オリンピックでした。今回は小・中・高校それぞれのテキストを制作。東京都で使用しています。

北京オリンピック後は、フェンシングの太田雄貴選手などの協力を得て、テキストの活用を進めました。こうした協力も、オリンピック招致活動がなければ得られなかったのではないかと思います。

JOCゴールドプランの推進 味の素トレセンの実現も成果

現在進めているJOCゴールドプランでは、2016年のオリンピックで金メダル獲得数が世界の3位以内になる



都内の小学校ではオリンピック学習読本を教材として、オリンピック学習の授業が行われ、北京オリンピック銀メダリストの太田雄貴選手(フェンシング)が特別講師を務めた

ことを目標にしています。この明確な目標の設定も、招致を前提としており、スポーツの現場にモチベーションを与えてくれています。

そのJOCゴールドプラン進展の力となる味の素ナショナルトレーニングセンター(味の素トレセン)ができたこと、その味の素トレセンを舞台にしたJOCスポーツアカデミー事業の3事業を推進できたことも、目に見える招致活動のレガシーです。指導者を育てるナショナルコーチアカデミー、有望なジュニア選手を寄宿させながら育成するエリートアカデミー、トップアスリートのセカンドキャリアを支援するキャリアアカデミーの3つがそれに当たりますが、まさにトップアスリートの競技力向上や、将来の人材の育成につながる大きな力を得ることができたといえます。

また、昨年文部科学省に新設された「ナショナルコーチ制度」により、指導者への国の税制的な支援を受けられることになったのは、これまでにない決定で、招致活動の影響によるものといえるでしょう。ナショナルコーチは、各競技の技術的な指導にとどまらず、選手育成や海外情勢の分析など総合的な戦略を練る責任者で、今後の国際競技力向上の要となる人材なのです。

国の理解・支援の獲得 大きなレガシーに

ナショナルコーチ制度の新設に見られるように、この招致活動でのレガシーの特徴のひとつには、政治、行政の理解

や支援を得られたことが挙げられます。IOCは、2016年大会の開催国政府による財政保証を求めています。日本にはそういった法的根拠がなかったにもかかわらず、初めて受けることが決まりました。今年4月のIOC評価委員会による東京の視察の際には、麻生首相が出席し、国賓並みに迎賓館で公式ディナーが開催され、今までにない支援となりました。いずれも今後につながる大きな足跡になります。

また、国や東京都、日本体育協会、JOCが連携して設立した「嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター」も、招致活動の一環で誕生した計画です。柔道の創始者で、アジア初のIOC委員でもある嘉納治五郎先生の名を冠したセンターは、スポーツを通じた人間教育、国際交流、平和への貢献などを、アジア各国や世界の人々とともに研究する施設で、オリンピックの理想を、広く世界へ発信することになっています。

スポーツの位置づけを巡る 議論も活発になってきた

こうした形に残るもの以外に、新スポーツ振興法について、超党派の議員の間で制定に向けて検討する動きが生まれているのも、レガシーといえるでしょう。スポーツはこれほど親しまれていながら、社会や法律の中での位置づけは必ずしも明確というわけではありませんでした。オリンピックが与野党各会派の政策課題になったり、法的

招致委員会と東京都が制作したオリンピック学習読本。小学校、中学校、高等学校の各年代別に作成している



澤穂希選手(サッカー)は都内小学校を訪問。「オリンピック」をテーマにトークショーを行い、約700人の子どもたちと触れ合ったほか、子どもたちとリフティング対決やドリブル対決も行った



今年4月のIOC評価委員会による東京視察。国賓並みに迎賓館で公式ディナーが開催された

自らの意思で自ら意見 アスリートたちも変化

新しい動きが目立つ今回の招致活動

整備が議論されたりするのは、その見直しが進んできた証といえます。

スポーツに正面から向き合う機運は、政治や行政だけでなく、教育界や経済界などにも生まれています。スポーツ省(庁)の設置の必要性について教育界から声が上がっているのも、その一例です。

経済界からは、招致活動は成否以外に何を目指しているのか、立候補から開催までの7年間、そしてその後と長いタイムスパンの中でどのような計画を立てているのかなど、さまざまな意見や質問が寄せられています。

これまでオリンピックの招致活動については、招致の成否にのみ関心が集まったといっていました。また、オリンピックへの関心も開催期間中だけのものといっても過言ではありませんでした。ところが招致活動をきっかけに、スポーツを国の中にどう位置づけるか、国家戦略としてオリンピックをどう考えるかといったように、大局観を持ってスポーツや招致活動を見ている人が増えているといえそうです。

招致活動を進める中で、選手や指導者、各競技団体をはじめ、実に幅広い分野の人の協力や理解を得ることができました。これこそが最大のレガシーといえるわけで、皆さんに感謝しています。

で、活動の前面にアスリートが立っているのも、これまでにない特徴です。今回の招致活動を始める前から、アスリートがいろいろな場面で発言したり、競技以外の活動をしたりするようになっていきましたが、そうした動きを招致活動の中に取り入れました。そのひとつが「東京オリンピック・パラリンピック招致ふるさと特使」です。日本体育協会との連携により、47都道府県に1人ずつオリンピックをふるさと特使に任命し、「オリンピック母校訪問キャンペーン」などを展開しました。

ふるさと特使は、それぞれの母校である小・中・高校を訪問。子どもたちに自身のアスリートを見てもらい、触れ合うとともに、特使はスポーツの素晴らしさやオリンピックの意義を、自らの言葉で語りかけたのです。

今まではどちらかという競技に専念することが求められてきたトップアスリートが、自らの意思で自らの意見を伝えることで、アスリートには自らの役割を考えるきっかけになり、子どもたちには感動や貴重なメッセージを届けることができたのです。トップアスリートとの出会いは、子どもたちにとって素晴らしい体験。学校訪問は招致活動にかかわらず続けたいと考えています。

これまでの活動を通じて、招致活動はスポーツ界だけで行うものではなく、多くの国民の皆さんと一緒に進めるものと実感しています。招致活動はこれからも続きますから、今後も有形無形の数多くのレガシーが生まれると信じています。



末續慎吾 (ミズノ)



北島康介 (日本コカ・コーラ)



松井秀喜 (New York Yankees)



中村憲剛 (川崎フロンターレ)



室伏広治 (ミズノ)



福原愛 (ANA)



飯島 茜 (TOTO)



野村忠宏 (ミキハウス)



越川 優 (サントリーサンパース)

全力を引き出す
機能
を生まみ出すために、ミズノは長
年にわたりトップアスリートの
進化とともに技術力を磨いて
きました。勝利への果てなき挑
戦を確かな技術で支えるため
に、ミズノは「最先端テクノロジ
ーの追求」という挑戦にこだわ
り続けています。勝利、記録、
そしてスポーツを愛するすべて
の人々の想いを支えるミズノの
挑戦は終わらない。



Major League Baseball trademarks and copyrights are used with permission of Major League Baseball Properties, Inc.

J.LEAGUE PHOTOS





**JOC
ELITE
ACADEMY**



ニッポンの
スポーツ
タレントたち

目指せ、
2016年!

スポーツにおけるタレント（才能・素質）を活かし、将来に向けた継続的な選手強化・育成を目的に、JOCは、シニア選手を対象に「JOCエリートアカデミー事業」を2008年にスタートした。レスリング、卓球に加え、今年4月からはフェンシングも加わり、アカデミー生は総勢18名。2016年オリンピックを目指し、彼らの姿をレポートした。

才能と素質のある若い選手「スポーツ・タレント」の長期育成事業「JOCエリートアカデミー」が始まり、1年が過ぎた。「2016年のオリンピックでのメダル獲得」を目指し、2008年4月に入校したのは、当時小学6年から中学2年までのレスリングと卓球の選手たち。彼ら第一期生は、味の素ナショナルトレーニングセンター（味の素トレセン）で寄宿舎生活を送りながら練習に励んできた。現在は、レスリング6名、卓球9名、そして新たにフエンシングの3名を加え総勢18名がともに練習に励んでいる。「この生活は楽しいですよ」

きつぱりと語るのレスリング女子の宮原優選手だ。彼女は今年3月のクリッパン国際大会カデットの部に出場。前年の38kg級に引き続き46kg級で優勝した。指導する吉村祥子コーチは、「一人で考えているいろいろなタイプと戦える選手です。彼女の年齢より上のカテゴリーに出場しての結果ですし、この1年で相当実力がつきました」と評する。レスリングの選手たちは、平日は午前6時半から30分ほど練習のあと、徒歩4、5分の北区立稲付中学校に登校。授業を終えると、夕方から午後7時頃まで練習する。階級のあるレスリングの場合、体格が同じ相手とでなければ練習にはならないため、強豪として知られる高校などで積極的に出稽古を行なってきた。年齢も実力も上の相手との練習を積んできたのだ。一期生唯一の男子、白井勝太選手の場合、埼玉まで出稽古に行くとは帰りは午後10時近く

のこともあるという。

朝食と夕食は味の素トレセン内の食堂で摂る。平日は栄養士の組み立てたメニューを、土日はバイキング形式で用意されているさまざまな料理から自由に選べる。

選手たちには、生活面の相談やサポートをしてくれる寮母がついている。とはいえ、洗濯や掃除などは自分たちの仕事だ。学校と練習に加え、とてもハードなようだが、白井選手は笑って答える。

「最初はきつかったです。でも慣れてきたので余裕が出てきました」

宮原選手もこう付け加えた。「掃除、洗濯もやっています」

他の選手たちが「ええっ」とまぜっかえす。

宮原選手は、「やっていると苦笑する。」

選手たちの生活の場はアスリートヴィレッジの一角。男子はホテルのように廊下からドアを入るとすぐ居住する部屋となっている。テレビや冷蔵庫、机、ベッドの備わった室内に2人ひと組で生活している。女子の場合はマンションタイプの部屋に居住。廊下からドアを開けるとキッチンとテレビの置かれたリビングがあり、1人部屋から3人部屋まで、選手たちの部屋が並ぶ。のぞいてみると、洗濯物がカゴ内に畳まれ、意外に整頓されている。

「昨年度は2人部屋だったんですけど

明日の 金メダルと未来へ

2016年にメダル獲得数を世界3位以内に。

オリンピックの
スポーツ・タレントたち
目指せ、
2016年!





ど、今年から1人部屋になったんですよ」

と、少し嬉しそうなのは卓球一期生の鈴木李茄選手。

卓球は、練習時間が長い。学校から戻って夕方から始まる練習は、午後10時頃まで続くのが日常だ。男子選手の中からは、「洗濯はボタン一つだからいいけど畳むのが大変」「ときどきしんどい」という声もぼつりぼつりと聞こえる。

練習に熱心に取り組んだ結果、卓球も成果を残した1年となった。特筆すべきは、1月の全日本選手権女子ダブルスで、鈴木李茄選手と谷岡あゆか選手組がベスト4進出を果たしたことだ。準決勝では平野早矢香選手、石川佳純選手組に敗れたものの、中学2年生（当時）コンビの快進撃は周囲を驚かせるに十分だった。鈴木選手は大会を振り返ってこう語る。

「嬉しかったけどびっくりしました。運がよかっただけです。でもよかったです」
すでに二期生を迎えたレスリング、卓球と違い、フェンシングはこの春か

らスタートした。入校したのは、高校1年生の久良知美帆選手、馬場絢子選手、中学3年生の柳岡はるか選手の3人。うち高校生の2人には、本格的な競技経験はない。フェンシングへのタレント性を見出されての入校である。

JOCエリートアカデミーに入っ
ての感想を、彼女たちはこんなふうに表示する。

「みんな負けず嫌いですね。部屋にいるとき遊びで卓球をやるんですが、相手が背中向けているときに打ち込んで喜んでいくくらい（笑）。でもみんなの存在は励みになります」

**メダルを
一生輝かせ続けられる
競技力、知的能力、
生活力を育てる**

選手たちは味の素トレセンで練習ばかりして過ごすわけではない。例えば、毎週土曜日には家庭教師がついての学習会があり、日曜日には英会話にも取り組んでいる。社会見学などのJOC





ス ポ ー ツ の
タ レ ン ト たち
ニッポンの
目指せ、
2016年!





①



②



③



④



⑤

① JOCプログラム。メダリストである榎崎教子アシスタントディレクターをはじめ、現役アナウンサーや著名人によるプログラムも行なわれる
② 社会見学で浅草に行くことも ③ 毎日の食事の場サクラダイニングでは、さまざまな競技のトップアスリートと一緒にいる機会も多く絶好の環境 ④ レスリングの男子2人部屋。同じ競技どうして一緒に部屋になる ⑤ マンションタイプの子部屋のリビング。ここで卓球をすることもある

プログラムも行なわれてきた。そこには、JOCエリートアカデミーの方針が反映されている。

JOCエリートアカデミーを統括する平野一成ディレクターはこのように説明する。

「スポーツは何でもそうですが、競技だけを一生懸命やっても強くなるものじゃない。競技力、知的能力、生活力、3つの柱が備わってこそです。メダルを一生輝かせ続けられる選手を育てたいという思いもあります。引退しても人生は続いていくわけです。社会の中でも活躍していく子を育てないと意味はないと考えています」

だからこそ、選手たちが通う学校との連携にも気を配ってきた。月に一度は学校と合同会議を開き、そこではコーチと担任の教師が直接会話する機会がある。また、平野ディレクターは、学校の行事や保護者会、PTAの会合にも顔を出している。

「先生方は、学校でよくないことがあるればきちんと伝えてくれる。ありがたいですね。そういえば、こんなことがあります。保護者の方から、エリートアカデミーの子にモデルになってほしいという言葉があったんです。非常に嬉しかったですね」

JOCエリートアカデミー生であることで、浮くことはないのだろうか。「全然。学校に行けば普通の子どもと一緒にですよ。例えば、もちつき大会の行事があったのですが、クラスメートに溶け込んでいて、なんら変わるどころはなかったですね」

実際、味の素トレセンでの練習や生活、例えば食堂で、食事中に見ているテレビ番組にはしゃいだり、悪態まじりの会話をしたり。ふつうの中学生となんら変わりはない。

なによりも強く印象づけられるのは、練習中の真剣な眼差しと明るさだ。辛いことも決してないわけではない。

い。こんな言葉がもれることもある。

「ハンバーガーが食べられたらな」

「授業中眠いときがあります」

「もつと外に行けたらいいけど」

しかし迷いは感じられない。

平野ディレクターの言葉もそれを裏付ける。

「彼らに一切戸惑いはないですね。自分で決心してここに来ているから意識は高い。コーチに言われなくても自分の課題はこれなんだと、自分自身が何をしなければいけないかを理解していることが嬉しいですね。そういうえば、家庭教師の先生が、『今まで教えたと集中力が違う』と言っていたのが印象に残っています。学校の先生方が練習を見に来たこともあったのですが、『オーラがある。学校の中とは違う』と驚いていました。やはり目標を高くもっているからでしょうね」

こんなことがあった。ある日曜の午後8時半すぎ、夕食を終えた卓球の松

田尚樹選手とアスリートヴィレッジ内ですれ違ふと、「これから自主練習です」と頭を下げて通り過ぎた。午後11時近くまで行なうのだという。それが当然のことであるかのような自然な表情だった。

選手は、選んだ進路の厳しさも自覚している。

「オリンピックのメダルは全然遠すぎます。もつとやらないといけないことがたくさんあります」

全日本選手権ベスト4に入った鈴木李茄選手の言葉である。

目指すオリンピック出場、メダル獲得まではまだまだ遠い。だが彼らは、目標とするオリンピックたちと同じ空間で過ごすという得がたい体験をし、充実したサポートと施設の中、自身の明日を信じて、日々練習に打ち込んでいる。

ここでの1年間の成長は目覚ましいもの

日本レスリング協会コーチ

吉村祥子



一期生は味の素トレセンで1年を過ごしたわけですが、親御さんのもとを離れて寮生活を送りながらの勉強と練習の日々は、決して楽ではなかったと思います。

スタート当初は選手も戸惑いがありましたから、練習ばかりでなく学校やメンタル面など幅広くサポートするように意識しました。例えば、練習ノートを設け、練習のことに限らず、思いや葛藤、面と向かって言えないことも書いてもらい、そこに必ずコメントを書いて返すようにしました。

選手たちは「寂しい」「辛い」と言うことはありましたが、「帰りたい」とは一切言いませんでした。そこに彼らの覚悟を感じます。これまでも多くの選手を指導してきましたが、比較してもオリンピックに出るという大きな目標への意識の高さが一期生にはありました。

レスリングは対人競技ですから、味の素トレセンでの練習はむろんのこと、同じ体格でレベルが高い選手との練習の場を求めて出稽古を積極的に行ないました。練習メニューは全日本チームと同じ内容ですから、練習の量も質

もトップクラスだと思います。選手たちもそのメニューをこなしていることに対して自信をもっています。

昨年は北京オリンピックがあったので多くの競技の日本代表選手が味の素トレセンで合宿をしました。一期生はテレビでしか観られないトップアスリートと食事もお風呂も同じ空間で過ごしたのですが、皆さんがよく声をかけてくれました。今も試合を観に来てと言ってくれる選手もいるし、お手紙をもらうこともあります。トップの選手たちが緊張してナーバスになっている場面も目にしています。オリンピックという夢を身近なところで感じられたこと、トップの選手のありかたに接することができたのはプラスになったはずですよ。エリートアカデミーの特権ではないでしょうか。

1年が過ぎて二期生を迎えてみて、競技に対する姿勢、体力や技術、それぞれの面で一期生の成長を改めて感じました。二期生の面倒も積極的にみてくれます。二期生も一期生のような成長を遂げるように指導していきたいと考えています。

ス。ポ。の タレントたち

目指せ、
2016年!



トップアスリートへの階段を上り始めている二期生

日本卓球協会コーチ

渡辺理貴



選手は中・高・大学と、それぞれのカテゴリーの大会で好成績を残し、ジュニアやシニアのナショナルチームメンバーに選出され、国際大会への出場権を獲得しながら段階的に世界を目標にしていくのが普通です。しかしエリートアカデミーでは、全国中学校大会やインターハイなどには出場せずに、世界でメダルを狙える選手の育成を掲げ、ジュニアサーキットなどの国際大会に出場して「常に世界レベルを意識した強化」が基本的な考えです。

体力、技術はもちろんですが、打球練習以外にもトップアスリートになる為に必要なトレーニングとして、マナーや立ち居振る舞いなど、すべての面でグローバルスタンダードを意識して指導しています。選手自身で考える力（自己管理能力）を高めていくことで、世界と戦う状況になった時にきちんと力が発揮できるよう

に、知的能力開発プログラムや英会話なども実施しています。味の素トレセンでは、他競技の選手達との交流もあり、トップアスリートやコーチから学べる機会が多いことも大きなメリットです。

一期生たちは、「オリンピックでのメダル獲得」という目標を掲げて入校してきました。最初は、憧れで言っていた部分が大きかったものの、雲の上の存在だと思っていた日本代表選手が北京オリンピックで負ける場面を見て、世界で戦うことの厳しさを実感したのです。以来、練習への取り組み姿勢や会話に変化を見せるようになりました。今年1月の全日本選手権で3位に入賞した鈴木と谷岡のペアは、試合後のインタビューでの受け答えでも成長を感じさせました。「憧れの選手は誰ですか」という質問に対し、「国内では誰々が好きです。なぜなら私も誰々選手のようなプレーがしたいからです」と、とっさの質問に対して論理的に返答していたのです。

4月から二期生を迎えて卓球は9名になりました。コーチングスタッフとしては、選手達が卓球に打ち込める環境作りを常に心がけ、卓球をすることが嬉しい、毎日練習場に行くことにワクワクする、という気持ちを失わせたいように明るく指導していきたいと思っています。

JOCがエリートアカデミー事業を進めるなか、各地でもスポーツ・タレントをみつけて育成しようとする動きが活発だ。

先鞭をつけたのが2004年に始まった福岡県のタレント発掘事業である。JOCおよび国立スポーツ科学センター（JISS）

で、今後の日本のスポーツ界を考えた人材の発掘を志向していたころ、福岡県もまた、新しい人材を育てる方法を模索中だった。地域との連携を模索していたJISSが仲立ちとなり、JOC・JISS

Sとの提携のもとに福岡県のタレント発掘事業はスタートしたのである。

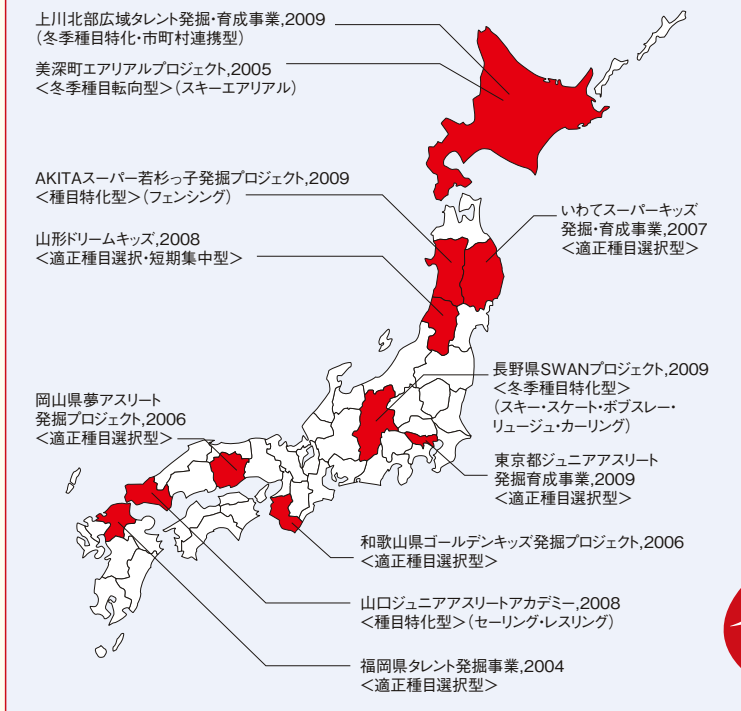
福岡県では、年に一度選考会を開き、小学5年を下限に選抜。以降、中学3年まで週1回、授業を実施し、運動能力の向上を図る。同時にどの競技に適性があるかを見極めながら、修了時に本人の意志をもって取り組む競技を選択。プログラム作りにはすでに発掘事業に実績のあるオーストラリア

のスタッフも協力した。第一期生は、2009年3月に修了。その中からJOCエリートアカデミーのフェンシングに2名の選手を送り込んだ。久良知美帆選手、馬場

絢子選手である。

福岡県には全国、さらに来年ユースオリンピックを開催するシンガポールからも視察が訪れた。和歌山県、山口県などでも発掘事業は始まり、お互いのプログラムに参加したり、雪のない福岡でスキーを体験する機会として北海道との相互交流も進んでいる。

地域タレント発掘・育成事業一覧



各地に広がる スポーツ・タレント発掘

福岡県スポーツ振興公社前スポーツ振興課長
(現在は福岡県福津市立福岡中学校教頭)

中平稔人



「タレント発掘」。今では多くのスポーツ関係者の会話の中にある言葉ですが、当初は一般的ではなく、優秀な人材のみを育成するというイメージが強く、否定的な状況がありました。しかし、実際にスター

の可能性を高めるといふ思いが共有されてきました。スタートから5年間で参加者数は10倍に膨らみました。これは学校やスポーツ関係者の皆さんの声かけがあつてのもとの理解しています。

トしてみると、選考・育成過程で得られる情報や取り組みの具体が教育現場等にも応用でき、すべての子どもたちに便益をもたらすとの理解が得られるようになりました。併せてトップアスリート輩出

中学卒業と同時に本事業を修了した受講生は、自ら決定した競技で世界を目指すことになりました。その活動についても競技団体と連携しながら追跡調査やサポートを続けていきたいと考えています。

和田武真 日本フェンシング協会 コーチ



フェンシング経験のない高校生の馬場、久良知、中学生の柳岡の3人でスタートしました。親御さんのもとを離れて、高校生の2人は3年間、柳岡は4年間ここで生活しながら練習するわけですから、練習練習で詰り込み過ぎてはいけませんし、メンタル的なサポートも大事にしたいと思つています。他の競技団体のアカデミー生とも仲良くなっていますし、寮母さんにもサポートしていただいているので安心していきます。

それぞれに現在の目標は異なります。全国大会での優勝経験をもつ柳岡には結果を求めていきたい。高校生の2人は競技経験はないとはいえ、身体能力の高さや教わつたことの呑み込みの速さには目を見張るものがあるので、まず競技を理解し、フェンサーとしての自覚をもつようになつてほしい。目標である2016年のオリンピックへ向けて、長期的な視点で育てていきたいです。

「JOCのジュニア強化」

JOCでは、JOCエリートアカデミーのほか、ジュニア強化の一環として、

「JOCジュニアオリンピックカップ大会事業」を実施している。



平成20年度の支援事業の様子。クレー射撃の中山由起枝選手など、オリンピックが開閉会式で講話を実施した

JOCジュニアオリンピックカップ大会の認定と支援事業

JOCでは、ジュニア競技大会の充実と、将来オリンピックや世界選手権大会等において活躍が期待できるジュニア選手の発掘と育成を図るため、各競技団体が実施しているジュニアを対象とした最高権威を持つ国内大会を「JOCジュニアオリンピックカップ大会」として認定し、その大会の最優秀選手に「JOCジュニアオリンピックカップ」を授与している。また、認定した一部の大会には、オリンピックを派遣し、参加選手、その保護者及び指導者等を対象に、オリンピックの素晴らしさとオリンピック出場への夢を与える講話等を行なう支援事業も実施している。

平成21年度は、47競技団体67大会を「JOCジュニアオリンピックカップ大会」として認定し、15会場程度で支援事業を実施する。

オリンピック有望選手研修会

JOCでは、JOCジュニアオリンピックカップ受賞者及びジュニアオリンピック大会において優秀な成績を収め、かつ将来オリンピックや世界選手権等での活躍が期待されるとして競技団体から推薦された選手を、「オリンピック有望選手」として認定し、年1回「オリンピック有望選手研修会」を実施している。

平成20年度は、11月29日、30日の2日間にわたり、味の素ナショナルトレーニングセンターにて、有望選手62名とその指導者のほか、和歌山県及び福岡県のタレント発掘・育成事業の受講生45名も一部のプログラムに加わり、総勢172名が参加した。オープンングメッセージでは、上

村春樹JOC理事・選手強化副本部長（当時）が、北京オリンピックでは日本のメダル獲得数が世界で8番目であり、2012年ロンドンオリンピックでは世界で5位以内、東京が立候補している2016年では3位以内を目標に掲げていることを説明するとともに、「皆さんはこの世代を代表する選手達です。自分の武器は何かを考え、知って欲しい。勝ちにはラッキーはあるが、負けにはアンラッキーではなく理由がある。その理由を追求し、解決して欲しい。目標を持ち、1日1日の練習を課題として取り組み、継続し、量をこなす、身につけることが大切。そして



AFLO SPORT (2)

当たり前のことをきちんとこなせるアスリートになって欲しい」と挨拶。また、前年19年度の有望選手研修会に参加し北京オリンピック男子体操個人総合で銀メダルを獲得した内村航平選手が練習の合間をぬって激励に訪れ、「昨年度のこの研修では、いろいろな競技のオリンピックから話を聞いて、とても参考になった。オリンピックで勝つには、他の人と同じことをやっているだけではダメ。自分にはできないことを見つけて研究し、いろいろな情報を集めていくことで、オリンピックへの道が見えてくると思う」とエールを送った。

その後、有望選手達は、ほとんどの選手達が初めて体験するタグラグビーを通してスポーツの楽しさと競技の枠を超えたチームワーク作りに参加。また、タレント発掘・育成事業の参加者とともに、「メンタル・ト

レーニング」や「ケガへの対処と予防」等から、各自が興味のある2テーマを選び受講するJISSによる「自己解決プログラム」、「セルフマネジメントプログラム」、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）による「ドーピング・コントロール」等の講義を受講した。毎年好評のオリンピックを交えてのグループワークでは、北京オリンピックのフェンシングで銀メダルを獲得した太田雄貴選手や同じくシンクロロナイズドスイミングデュエット銅メダリストの鈴木絵美子選手、クレー射撃4位の中山由起枝選手等15名のオリンピックを迎え、オリンピックの体験談を聞き取り、アスリートとしての心構え、日常のトレーニングでの悩みなどについて、具体的なアドバイスを受けた。平成21年度は、11月に開催を予定している。

スポンサーの
タレントたち
目指せ、
2016年!

ジュニア育成の鍵

久世由美子＝くぜ・ゆみこ＝
熊本県八代市生まれ。筑紫女学園高校を卒業
後、旭化成入社。競泳・自由形で国体などで活躍。
その後ジュニアの指導を開始。2001年よりJOC
オリンピック強化指定コーチに。北京オリンピック
には全日本コーチとして参加。

Special Interview

競泳コーチ

久世由美子

アスリートをめダリストに育て上げる――。

指導者が思い描く夢は、アスリート自身の夢に他ならない。

20年にわたって指導してきた松田丈志選手を、北京オリンピックで銅メダルに導いた

久世由美子コーチに、ジュニア育成の鍵を聞いた。

松田丈志の指導を始めて20年、昨年の北京オリンピックの200mバタフライで銅メダルを獲らせることができました。

長年の指導を振り返って思うのは、ジュニアの時期に、人間教育と長期間活躍できる体作りをすることがいかに重要かということです。

私は宮崎県延岡市にある東海スイミングクラブで水泳のコーチをしていました。学校の屋外プールを借りて、私も含め水泳が好きな仲間がボランティアで運営していたクラブです。屋外であるばかりか、温水設備がありません

でしたから、冬場はビニールで周囲を覆って寒さに耐えつつ練習するような環境でした。

松田がクラブに入会してきたのは4歳のときです。指導を始めての印象は、同年代の子よりも立派な体格と、速くなりたいという意識の高さです。いつの間にか隣にいて、「速くなるにはどうしたらいいですか」と聞いてくるくらいでした。

松田が小学2年の1992年には、バルセロナオリンピックがありました。この大会で、中学2年の岩崎恭子選手が200m平泳ぎで金メダルを



PHOTO KISHIMOTO

Special Interview

久世由美子

獲得しました。すると松田は、「中学生でメダル獲って話題になるんだっから、自分が小学生のうちに出てメダル獲ったらもっと話題になるなあ」と言ったのです。それを聞いたとき、この子は速くなりたいといつも言っているし、体も大きいし、きちんと育てていけば将来が楽しみな選手だな、そう感じたのを覚えています。

人間教育と体作りに 主眼を置いた理由

ではどうやって育てていこうかと考えたときに浮かんだのが、礼儀や感謝の心を忘れない、しっかりとした人間に育てようということと、息の長い選手にしたいということでした。

もともとクラブでは、挨拶や礼儀をしっかりと教えようという方針で取り組んでいました。人として未熟であるため、問題を起こす選手が実際にいるからです。しかし、ジュニアの時期にそれができていれば、将来、もっと上のレベルや日本代表に入るようになったとき、いちいちそういう面から指導を始めなくても済みます。

人間の部分がしっかりしていれば、きちんと競技に打ち込むことができます。ですから松田には、感謝の心を持つこと、挨拶ができることをしっかり指導しました。

もう一つ心がけていたのは、体作りです。地方のクラブですから、最新の情報が入ってくるわけでもない。いざこれ、ここから羽ばたいていくことにな

るかもしれない。先々を見据え、息の長い選手になってほしいという思いから、体操やストレッチにしっかりと取り組んで、ウォーミングアップやクールダウンも手抜きしない選手であってほしいと日々指導しました。

息の長い選手であってほしいという思いと関連しますが、無理をせず段階を踏まえた練習をしました。小学生では小学生として、中学生では中学生としての練習をさせ、決して一足飛びに上の年代の練習をさせることはありませんでした。その段階ならではの成長をすればいいと考えていたからです。

結果を求め過ぎるあまり、過剰な練習をさせるオーバーコーチングがときに問題となりますが、松田が今日まで怪我することなく泳ぎ続けてこられたのは、目先の結果を求めず、長く活躍できる選手にしたいとじっくり取り組んできた成果だと思っています。

夢は指導者が 与えるものではない

選手が育つかどうか、重要なのは、選手自身が夢を抱いているかどうかという点ではないでしょうか。

好きな言葉があります。
「夢なき者理想なし 理想なき者目標なし 目標なき者実行なし 実行なき者成果なし 成果なき者喜びなし」

マラソンの谷口浩美さんの『雑草のごとく』という本の中の言葉です。この言葉を、松田には子どもの頃から聞かせ、今も黒板に書いてあります。

PHOTO KISHIMOTO



東海スイミングクラブにて。松田選手高校2年の頃、国体出場を記念した横断幕の前で



松田選手小学4年の頃。左端の紫のウエアが久世コーチ。前から2列目の右端が松田選手





スポーツの タレントたち

目指せ、
2016年!

AFLO SPORT

だらけているように感じられるときは、「目標も夢もないような人生を送つたらつまらないよ、喜びにつなげるには夢をもって目標につなげて実行して頑張るんだよ」と伝えたのです。

出発点となる夢は、指導者から選手に与えることができるものではありません。もし与えても、それはただ掲げるものでしかありません。選手自身が描いたものだからこそ、選手は頑張れるのです。指導者の役割は、夢を形にするために、力を引き出すために手を差し伸べたり、引っ張り上げたりする

ことだと思います。

例えば、こんな工夫をしました。松田も含めて、小学生のときに中学生や高校生の大会にしばしば連れて行ったのです。速くなりたいという気持ちに刺激を与えたいという意図からでした。すると、「こんな大会に出てみたい」「強くなれば九州大会にも出られるんだ」「自分よりまだまだ速い選手がいるんだ」、そう実感し、もつと頑張ろうとしていました。

松田は中学1年でナショナルチームに入り、その後も標準記録をクリアして、一つひとつ上のカテゴリーの代表へと上がっていききました。

伸び悩んだ時期もあります。1500m自由形の記録は、高校時代には伸びていませんし、2000年のシドニーオリンピックは選考会で3位となり代表を逃し、2001、2003年の世界選手権の代表にもなれませんでした。

指導方法で悩みもしました。その時期に、自由形長距離の第一人者だったオーストラリアのグラント・ハケット選手を2002、2003年と2度訪ねたのです。はじめに行つたときは一緒に泳いでもたちうちできず、ハケット選手には気にも留めてもらえていない感じでした。悔しいから「もう一度戦おうじゃないか」と、翌年も行ききました。実は「オリンピックの前年だから」と断られていたのですが、アポイントを取らずに押しかけたのです（笑）。行ってみると、コーチから快く受け入れてもらえたのですが、ハケッ



AFLO SPORT

ト選手の練習内容を知って、ああこういうやりかたもあるのだ、と勉強になりました。

翌年、アテネオリンピックに出場し400m自由形で8位入賞となりましたが、メダルがないとなると居心地が悪いのだろうと思ひ、北京オリンピックでのメダル獲得へと本人は目標を切り替えました。それもまた、ジュニアの頃から段階を踏んできたのと同じ考えからかもしれません。

ジュニア指導者の 方々に伝えたいこと

今、改めて思うのは、小さい頃から人間教育、体作りを行なったからこそ、20年怪我もせずやってこられて、教わったことを吸収できたということだ

す。それが北京オリンピックのメダルにつながったのではないのでしょうか。

ジュニアを教える指導者の方々に、お伝えできることがあるとすれば、知識で指導するのではなく、心で指導することがいちばん大事ではないかという事です。私は、自分が一生懸命やれば選手も一生懸命になるんじゃないか、言葉は悪いですけど、マジになったらマジになるんじゃないか、と思つてやってきました。小さい頃から今日に至るまで、日々の練習メニューや記録、注意したところなどを必ずノートにつけてきました。今では何冊あるか数え切れないほどですが、50冊は優に超えているはずですよ。それも一つの証といえるかもしれません。

そして競技生活の土台となる体をしっかり作り、怪我なく息の長い選手に育てることが大切ではないでしょうか。

子どもは本当に真っ白ですから、私はいっぱい線路を敷いてあげようと考えてやってきました。線路もないまま、ただ「行け！」ではいけないと思うのです。「もう大学生になったから大丈夫」と聞くことがあります、大学生でも子どもなんだから、線路をいくつも敷いてあげないといけない。そして、長年指導しても、「言わなくても分かる」はありません。「言わないと分からない」のです。コミュニケーションをしっかりととりながら、進む道を選ぶのは子どもに任せればいいのかではないのでしょうか。



山下泰裕

やました・やすひろ

1957年6月1日熊本県生まれ。84年ロサンゼルスオリンピック柔道無差別級金メダリスト。96年アトランタ、2000年シドニーオリンピック柔道日本代表監督を歴任し、現在は東海大学体育学部長、NPO法人柔道教育ソリダリティー理事長、神奈川県体育協会会長、全日本柔道連盟理事、柔道ルネッサンス特別委員会委員長。

嘉納治五郎 IOC委員就任100周年 特別企画



写真提供：講道館

今こそ求められる 嘉納治五郎の精神

武道精神とオリンピズムの融合を目指し、1909年にアジア初のIOC委員に就任した嘉納治五郎。スポーツに教育的価値を見出すオリンピック・ムーブメントが、日本で始まって今年で100年。嘉納治五郎を敬愛し、その教えを現代に生かす取り組みを実践している山下泰裕氏に、その活動について語っていただいた。

柔道の恩恵を受けた者の
ひとりとして

嘉納治五郎師範、柔道人としては、こ
う呼ばないと落ち着きません。嘉納師範
は、ご存じの通り柔道の創始者であり、
アジアで初めてのIOC委員です。日本
古来の柔術を体系化し、体育として価
値のあるものに高めるとともに、人生
に活用することを推し進めました。ま
た、教育者として東京高等師範学校（現
筑波大学）や旧制第五高等学校（現熊
本大学）の校長を歴任した嘉納師範は、
多くの教え子に盛んに柔道をはじめと
したスポーツを奨励しました。

嘉納師範の今に残る功績は、こうした
スポーツに教育的価値があることを認
識し、人間形成に活用することに取り組
んだことです。私は子どものころは暴れ
ん坊で、私がいるために登校拒否に陥っ
た小学校の同級生がいるほどでしたが、
柔道に出会い、指導者から嘉納師範の
教えを授かったことによって、人間と
して大きく成長しました。進学した東
海大学体育学部武道学科で嘉納師範に
ついてしっかり学んだことも、今日の
私を支える基盤となっています。

柔道を通して心身を鍛え、人間的成
長を促す。この嘉納師範の教えの最大
の恩恵を受けた者のひとりですが、私とい
えるでしょう。

今こそ求められる
嘉納治五郎の思想

今日の社会では、目に見えるもの、目
先のが優先されがちです。柔道をは



講道館に掲げられる嘉納師範の写真



1902年7月、宏文学院に清国教育視察団を迎えて。嘉納治五郎は自ら設立したこの学院に数多くの中国人留学生を迎えた



日本が初めてオリンピックに参加した1912年ストックホルム大会開会式。嘉納治五郎は国名を「JAPAN」ではなく「NIPPON」であると主張したというエピソードが残る



1934年6月23日、オリンピアにおけるIOC総会（アテネ）閉会后、オリンピック再興40年記念碑の前での記念撮影



オリンピックを日本に招致すべくベルリンへ出発



2005年、外務省でイラク支援の一環で柔道着の贈呈



AFLO

2005年7月、日露修好150周年記念事業では、ロシア・ウラジオストクで柔道を紹介



2007年11月 中国青島日中友好柔道館 開館式で柔道指導

はじめスポーツの世界でも、ただ勝つことのみを追い求める風潮がありますが、そうした傾向に「どこかおかしい」と私は大きな疑問を持つようになりました。

勝つことを求めて、自らを研鑽することは、もちろん素晴らしいことです。

世界の頂点に立とうとするならば、なおさら、勝利への執念がなければなりません。しかし、アトランタ、シドニーという最も結果を求められる立場にいた私が目指したのは、最強の選手を育てることではなく、最高の人間を育てようということでした。それは、嘉納師範が教える「人間教育の柔道」を忘れず、ただ強いだけではなく、柔道人として日本を代表する最高の選手づくりを進めるべきではないか、と考えたからです。

ひとつの契機として始まったのが、講

道館・全日本柔道連盟の合同プロジェクト「柔道ルネッサンス」です。この活動は「精力善用・自他共栄」という嘉納師範の教えの原点に返り、人間教育を大切にする柔道の本質を国内外に伝えるものです。

「精力善用」とは、心身の力を良い行いのために使うということ。そして「自他共栄」はその力を自らのためだけでなく、世の中のためにも使い、ともに栄えるということです。

私はこの活動の委員長として、選手や、柔道を学ぶ子どもたちに、試合会場を汚さない、ゴミを出さない、挨拶をきちんとするといった、柔道人としての基本的なマナーの改善を呼びかけるとともに、会場の清掃などを実践してきました。さらに、日常生活の中でもマナーを守ることを訴えてきました。

フェアプレーの精神を 社会に広げるために

「柔道ルネッサンス」を進める一方で、2006年に会長に就任した神奈川県体育協会では、「日常生活でもフェアプレーを」という運動を進めることにしました。

道場、あるいはスポーツの競技会場で、試合相手を尊敬し正々堂々と戦うことができても、それだけでは十分ではありません。選手は、スポーツで培ったその精神を、家庭や学校、社会にも活かし、広げることが必要です。

具体的にはフェアプレーに最も遠い行為であるいじめを防ぐこと。各市町村の体育協会や各競技団体などに呼びかけて、いじめ防止を訴えています。また、この運動が神奈川県だけに留まれば意味がないので、要請のあった山形県、

新潟県、愛媛県などでも講演などを行っています。

現役選手時代、私はスポーツの社会的地位が低いことに不満を持っていました。しかし、こうした運動に取り組んでから、それは社会貢献活動などにあまり取り組まず、社会と関わりを持つてこなかった選手の側にも責任があると気づきました。

スポーツでチャンピオンを目指すように、選手は人生でもチャンピオンを目指して積極的に社会参加すべきです。スポーツで学んだことを活かして人間として成長し、充実した人生を送る人こそ、真の勝者、人生のチャンピオンだと思います。スポーツの世界ではチャンピオンはひとりしかありませんが、人生の勝者には誰もがなれるのですから。



今こそ求められる 嘉納治五郎の精神

2005年11月、柔道愛好家であるロシアのウラジーミル・プーチン大統領（当時）訪日の際、嘉納師範直筆の書を進呈



AFLO

国際人・嘉納治五郎にならない
「和の心」を世界に発信する

柔道を通じた人間形成という嘉納師範の考えは、クーベルタン男爵が提唱したオリンピック精神と合致するものです。男爵の考えに共鳴した嘉納師範は、日本にオリンピック・ムーブメントを積極的に導入し、オリンピックに選手を送り込みました。

そして、アジア人として初めてのIOC委員に就任。残念ながら中止にはなりませんが、1940年の東京オリンピック招致に力を尽くすとともに、中国から多数の留学生を受け入れるなど、国際交流も熱心に進めたのです。日記を英語で書くなど、嘉納師範は若いころから世界に目を向けた国際人でもありました。

生涯にわたって国際的な活動を続けた嘉納師範にならない、私も「和の心」を伝え、国際的に柔道の普及を進めるNPO法人柔道教育ソリダリティーを

2006年にスタートさせました。

「和の心」とは、簡単にいえば、自らの考えや違いを認め合い、理解し合うことです。世界には多様な文化、慣習、歴史があり、それゆえに争いが起きています。そうした中で、お互いの違いを認め合う「和の心」は、和解や平和に役立つと考えています。

また、世界には柔道を学びたくても指導者、柔道着、畳などが不足している国や地域も少なくありません。柔道教育ソリダリティーでは、柔道着や畳を海外に贈る活動や、南京における日中友好柔道館の設置を進めているほか、柔道を通じてイスラエルとパレスチナの子どもたちの交流・相互理解を図る計画も検討中です。

こうした活動を通じて日本への親しみや、日本文化への関心が高まることも期待しています。

柔道教育ソリダリティーでの活動も

含めて、私はこれまでニューヨーク、モスクワ、パリ、南京など世界各地で講演を行ってきました。国や宗教によっては、礼に始まり、礼に終わるという柔道の基本についても、理解できなかったり、相容れなかったりします。例えば、イスラムの世界では神以外に頭を下げませんし、欧米では、礼はおわびを意味することがあります。

ですから講演では、礼をするのは、相手に対して尊敬を示す行為であると説明しています。戦う相手がいるからこそ、自らを磨き高めることができます。考え、柔道では試合相手を敵ととらえない、尊敬の対象なのだ。

このように柔道を海外に広めることは、日本の文化・思想を伝えることにもつながります。

いつまでも古びない

「精力善用・自他共栄」

「精力善用・自他共栄」という嘉納師範の精神は、古びるところか、今の時代にこそ必要なものといえます。日常生活の中で、スポーツを楽しみ、体を鍛えて健康に関心を持つことは大切です。そこで培った力を困っている人に差し出したり、相手を思いやりたりすることはもっと大切です。スポーツを通じて前向きに生きることを学び、それを自らの人生と社会に使うことで、日本の雰囲気は大きく変わると信じています。

私は、嘉納師範がそうしたように、今後も大学の教え子をはじめ、多くのスポーツ人や子どもたちにこの精神を伝えていくつもりです。



バンクーバー冬季オリンピック

チームジャパンの

挑戦

2010年2月に開催される第21回オリンピック冬季競技大会（2010/バンクーバー）まで半年余り。すでに会場やコースの建設・改修は終わり、聖火リレーに使用されるトーチや聖火ランナーのユニフォームも発表され、現地ではオリンピックムードが徐々に盛り上がりを見せている。

第21回オリンピック冬季競技大会の各会場では、競技施設の建設及び改修が昨秋に完了。今年1月16日からは、1年前のカウントダウン・セレブレーション期間として、パラリンピック最終日の1年前にあたる3月21日まで多くのプレ大会やイベントが開催された。

その一つとして、2月12日にはジャンプ競技が行われるウイスキーで、IOC（国際オリンピック委員会）のジャック・ロゲ会長ら出席のもと、聖火リレーのトーチと聖火ランナーのユニフォームがお披露目された。聖火リレーは一国での総走行距離としては最長となる4万5000キロを走り、1000を越えるコミュニティを巡る。

オリンピックの開催にあたって

は、オリンピック憲章で複数の文化イベントの実施が求められている。そのカルチュラル・オリンピックは、2008年の第1弾に続き、今年2月1日からは7週間にわたって第2弾が開催された。

今回のようにオリンピック開催の前々年から文化プログラムが実施されるのは、冬季大会としては初めてのこと。第3弾は2010年1月22日から3月21日までの60日間に、50の会場で600以上の音楽、ダンス、演劇など多彩な芸術イベントが開催される予定だ。

また、先住民が公式パートナーとして認められているバンクーバー冬季大会らしく、カナダの先住民の歴史や文化を紹介する「2010先住民パビリオン」が大会期間中、開閉会式会場近くの

クイーン・エリザベス・シアターに開設される。約750平方メートルのパビリオンでは、さまざまな先住民の現代及び伝統的な芸術に触れたり、音楽演奏を聴いたりできるほか、食も楽しめる。

さらに、今回のオリンピックでは、史上初めて開閉会式が屋内の会場（BCプレイス）で開催される。この式典に出演するダンサーやミュージシャンなどのボランティア募集には、2週間余りで3200人近くが応募。他のボランティア募集に対する関心も高く、カナダ国内では徐々にオリンピックムードが高まってきている。10月30日には聖火リレーもスタート。今後、バンクーバー冬季オリンピックへの期待感は全世界的に高まりを見せていくはずだ。





REUTERS/AFL0

<トーチリレー>

開会式を1年後に控え、ウィスラーで聖火リレーのトーチと聖火ランナーのユニフォームが発表された。白とグレーのトーチは高さ94cm余り、重さ約1.6kgで、ゆったりした曲線のフォルムは雪や氷の上に描かれるラインを思わせ、空気を取り入れ口はメイプルリーフの形をしている。ユニフォームは平和と希望を象徴する白を基調に、息を飲む美しい冬の景色をイメージしたブルーとグリーンがアクセントになっている。また、帽子とメイプルリーフの模様がついた赤いミトンも用意されている。

聖火リレーは10月31日から106日間かけ、12,000人の聖火ランナーによってカナダ国内45,000kmを駆け抜け、開会式にBCプレイスでゴールする



PHOTO KISHIMOTO

オリンピック開催まで1年となった2月12日、カナダ全土で花火やライブコンサートなどのイベントが開催された



AFL0

バンクーバー・アートギャラリーの前庭に1年前イベントで設置されたカウントダウンロック



GATV/AFL0

バンクーバー冬季オリンピックのマスコット、ミーガ(右)とクワッチ(左)が手にしているのは、6月4日に発表された入場券のデザイン4種類

PHOTO KISHIMOTO





バンクーバー冬季オリンピック 競技別注目選手

バンクーバー冬季大会に向け世界に挑むチームジャパン。
2008 - 2009 シーズンの戦績から、各競技の注目選手を紹介!

MINAGAWA Kentaro
ALPINE SKIING

PHOTO KISHIMOTO



スキー
アルペン

滑走順が早いほうが有利となるアルペンは、世界ランキングの上位15名までの第一グループから順にスタートする。現在、日本勢は30番台あたりとなっており、今後、バンクーバー冬季大会までに行なわれるワールドカップ（W杯）などの主要大会で、ポイントを積み重ねることが望まれる。

期待は、男子回転。トリノ冬季大会を経験している皆川賢太郎選手、佐々木明選手、湯浅直樹選手の3選手だろう。皆川選手は男子回転で、100分の3秒差で表彰台を逃し4位、湯浅選手は初出場で7位入賞、佐々木選手は1本目で8位につけながら2本目のスタート直後に旗門を跨いでしまい途中棄権と、トリノ冬季大会では善戦した。しかしながら、昨シーズンの3選手は、2月に行なわれた世界選手権では2本目に進めず、W杯でも上位入賞ゼロと、振るわなかった。

大きな理由は、皆川選手、佐々木選手が故障の影響を抱えていたことにある。皆川選手は、2006年12月に右ひざ前十字じん帯を損傷。そこから治療とリハビリを経て昨シーズン復帰したが、その影響が残っていた。2年を経て復調してきているだけに、バンクーバー冬季大会までには上位15名までの第1シード入り、少なく



スキー
クロスカントリー

とも第2シード入りを果たして臨みたい。

男子では、恩田祐一選手が3月にトロンハイム（ノルウェー）で行なわれたW杯で、スプリント・クラシカル1.6 kmに出場し、4位入賞。2月にリベレッツ（チェコ）で行なわれた世界選手権では、チームスプリントに本田尚平選手と出場し、10位を記録したが、個人戦では苦戦した。

女子の2008-2009年は、最良のシーズンとなった。世界選手権では、夏見円選手と石田正子選手のペアが女子チームスプリントに出場し4位入賞。これはオリンピック、世界選手権を通じて日本のクロスカントリー史上最高の成績であった。石田選手は長距離を得意とする選手であり、両選手で組むことはこれまでなかったが、初めての起用が的中した。

石田選手は世界選手権の10 km クラシカルでも8位になったほか、トロンハイム（ノルウェー）で行なわれたW杯の30 kmでは表彰台となる3位。これは長距離種目では日本初の快挙であり、大きく躍進したシーズンとなった。

長年、クロスカントリーはオリンピックで苦戦が続いてきたが、この流れに乗って飛躍を期待したい。



TOCHIMOTO Shohei, OKABE Takanobu, ITO Daiki, KASAI Noriaki
SKI JUMPING



YUASA Naoki
ALPINE SKIING



ONDA Yuichi
CROSS-COUNTRY SKIING

Getty/AFLO, AFLO SPORT (2), REUTERS/AFLO

スキー
ジャンプ

リベレット（チェコ）の世界選手権では、2007年の札幌大会に続き、ラージヒル団体が銅メダルを獲得した。団体メンバーは、どちらの大会も、栃本翔平選手、岡部孝信選手、伊東大貴選手、葛西紀明選手の4人であった。

昨シーズンのジャンプ陣の中心となったのは、岡部選手、葛西選手の二人のベテラン。長野冬季大会でラージヒル団体金メダルのメンバーだった岡部選手は、昨夏の不振から、シーズン開幕当初は日本代表を外れていた。だが国内大会で圧倒的な強さを見せると、シーズン後半に日本代表に復帰。世界

選手権での活躍をはじめ、3月にクオピオ（フィンランド）で行なわれたW杯でも11シーズンぶりに優勝。このとき38歳4カ月だったが、それまで葛西選手がもっていた史上最年長優勝記録（31歳8カ月）を大幅に更新した。

1992年のアルペールビル冬季大会から5大会連続でオリンピックに出場している葛西選手も、W杯の個人戦で3位で表彰台に一度上ったほか、入賞を5度記録。W杯年間総合成績でも15位と、日本人選手では最上位をマークし、中心選手の一人であることに変わりはない。今年の4月からは、所属の土屋ホームスキー部監督を兼任。プレイングマネージャーとして、バンクーバー冬季大会を目指す。



ISHIDA Masako, NATSUMI Madoka
CROSS-COUNTRY SKIING

AFLO SPORT (2)



KOBAYASHI Norihito, KATO Taihei, MINATO Yusuke, WATABE Akito
NORDIC COMBINED

団体戦のメンバーだった伊東選手は、4月に雪印への所属が決まった。安定した環境のもとで、一層の飛躍できるかどうか、日本団体戦にとっても鍵となる。



スキー
 ノルディック複合

団体では1992年のアルペールビル、1994年のリレハンメルと冬季オリンピックで2連覇。世界選手権でも1993、1995年と優勝し、圧倒的な強さを誇った種目だが、ルール変更の影響などもあってその後苦戦が続いてきた。

しかし昨シーズン、リベレッツ(チエコ)の世界選手権で、14年ぶりとなる団体金メダルを獲得した。出場したのは、湊祐介選手、加藤大平選手、渡部暁斗選手、小林範仁選手の4人。かつて、荻原健司選手や河野孝典現ヘッドコーチらが活躍した頃は、ジャンプでリードし、クロスカントリーで粘って逃げ切るパターンだったが、現在の日本チームは、小林選手をはじめ、クロスカントリーの実力が向上。世界選手権の個人戦でも、グンダーセン・ノーマルヒルで小林選手が5位、湊選手が6位入賞を果たした。

W杯では、小林選手が3度、世界選手権の団体戦メンバーから外れた高橋大斗選手が2度、加藤選手が一度、入賞を果たしている。W杯の総合ランキングでは、小林選手の18位が最上位であり、他の選手たちは20番台、30番台に位置する。さらに個々のレベル向上を図ることが、バンクーバー冬季大会の団体戦にとっても大きな鍵を握る。



スキー
 フリースタイル

バンクーバー冬季大会では、モーグル、エアリアルに加え、スキークロスが新種目として採用される。

モーグルは、昨シーズン、チーム全般に好成績で終えることができた。男子で目立ったのは、今年3月に猪苗代で行なわれた世界選手権モーグルで4位、デュアルモーグル(非オリンピック種目)で銀メダルを獲得した西伸幸選手。長野冬季大会から3大会続けてオリンピックに出場している附田雄剛選手も、2月のバンクーバー・サイプレスでのプレ大会となったW杯で3位に入るなど、健在ぶりを



NISHI Nobuyuki
 FREESTYLE SKIING / MOGULS

示した。

女子の筆頭は、世界選手権でモーグル、デュアルモーグルの2冠に輝いた上村愛子選手。元オリンピック金メダリストのヤンネ・ラハテラコーチの指導のもと、ターン技術が向上し、圧倒的な強さをみせつけた。前々シーズンでもW杯で年間総合優勝を果たしており、いまやまぎれもなく世界一の座に就いたといえる。上村選手は、初出場の長野冬季大会以降、7位、6位、5位とオリンピックで着実に結果を残しており、4度目のオリンピックでの活躍が注目される。

高校生でトリノ冬季大会に出場した伊藤みき選手も成長を示したシーズンとなった。世界選手権モー



UEMURA Aiko
FREESTYLE SKIING / MOGULS



ITO Miki
FREESTYLE SKIING / MOGULS



TAKIZAWA Hiroomi
FREESTYLE SKIING / SKI CROSS

AFLO SPORT (4)

FUKUSHIMA Noriko
FREESTYLE SKIING / SKI CROSS

グル4位、デュアルモーグル銀メダル。W杯でも年間総合6位の好成績を残している。長野冬季大会金メダル、ソルトレックシティー冬季大会では銅メダルの里谷多英選手も世界選手権モーグル9位、デュアルモーグル4位で復調をアピールした。

エアリアルは、W杯や世界選手権での入賞はならなかった。男子では、トリノ冬季大会に出場している水野剣選手を中心に、世界の厚い壁に挑む。また、女子は現在、強化指定選手が不在となっている。

新たに採用されたスキークロス。男子では、バイオニア的存在の瀧澤宏臣選手がW杯で4位、7位と2度入賞を果たし、世界選手権では12位を記録している。女子の第一人者・福島の子選手とともに、新種目での好成績を歴史に刻みたい。





FUJIMORI Yuka
SNOWBOARD / SNOWBOARD CROSS



TAKEUCHI Tomoka
SNOWBOARD / GIANT SLALOM



スキー
スノーボード

オリンピックでは、パラレル大回転、ハーフパイプ、スノーボードクロスと、3つの種目が行なわれる。

パラレル大回転は、女子で竹内智香選手がW杯で2位に4回入るなど、シーズンを通して安定した成績をキープ。パラレル回転（非オリンピック種目）とあわせたパラレルのW杯年間順位で3位、江原（韓国）の世界選手権でも4位となっており、世界のトップクラスに肩を並べるまでになった。

男子ハーフパイプでは、青野令選手が、今年1月に江原（韓国）で行なわれた世界選手権で、日本選手として初の優勝を果たした。青野選手は2006・2007年のシーズンでもW杯年間総合優勝を果たしており、いまや世界でもトップクラスの選手に成長した。

女子ハーフパイプは、世界選手権で山岡聡子選手が4位、中島志保選手が5位入賞。山岡選手はW杯でも、2005年以来となる優勝を果たしている。

2006年のトリノ冬季大会から始まったスノーボードクロス。そのトリノで7位入賞を果たしたのが女子スノーボードクロス藤森由香選手。昨シーズンのW杯では、決勝進出ができず苦しんだが、巻き返しを図りたい。

AFLO SPORT (3)

AONO Ryo
SNOWBOARD / HALF PIPE





スケート
スピードスケート

いまや、男子スピードスケート短距離陣の柱といえるのが、長島圭一郎選手である。2006年のトリノ冬季大会では500m13位、1000mは32位に終わったが、トリノの翌シーズンにW杯初優勝を果たすと、年々着実に成長を遂げてきた。昨シーズンは今年1月にモスクワ（ロシア）で行なわれた世界スプリント選手権で総合2位に輝いた。日本選手の同大会での表彰台は、2001年の清水宏保選手以来8年ぶりのことだった。また、W杯でも500mで3度優勝を果たしている。

トリノ冬季大会500mでは6位に入賞している加藤条治選手は、W杯前半戦の500mで2度優勝。シーズン終盤に苦しんだが、500mの元世界記録保持者であるだけに、復調を待ちたい。

女子スピードスケートの短距離陣は全般に苦戦が続いた。その中で、第一人者の吉井小百合選手は、

W杯の500mで3位、1000mで2位と、2度表彰台に上っている。また、1994年リレハンメル冬季大会から4大会連続オリンピックに出場している岡崎朋美選手は、シーズン終盤のソルトレークシティーでのW杯で自己記録を更新し、3月に行なわれたバンクーバーでの世界距離別選手権500mでも8位に入った。

中・長距離では、田畑真紀選手が、ソルトレークシティーのW杯で7シーズンぶりの表彰台となる2位の結果を残している。また、穂積雅子選手が、今年2月にハーマル（ノルウェー）で行なわれた世界選手権で総合4位となるなど、台頭が目立ったシーズンでもあった。

バンクーバーでの世界距離別選手権では、田畑選手、穂積選手と大津広美選手で出場したチームパシユートで銅メダルを獲得。2006年のトリノ冬季大会の同種目でも準決勝まで進み、メダルまであと一歩の4位だっただけに、来年へ向けて好材料となった。



KATO Joji
SPEED SKATING



YOSHII Sayuri
SPEED SKATING



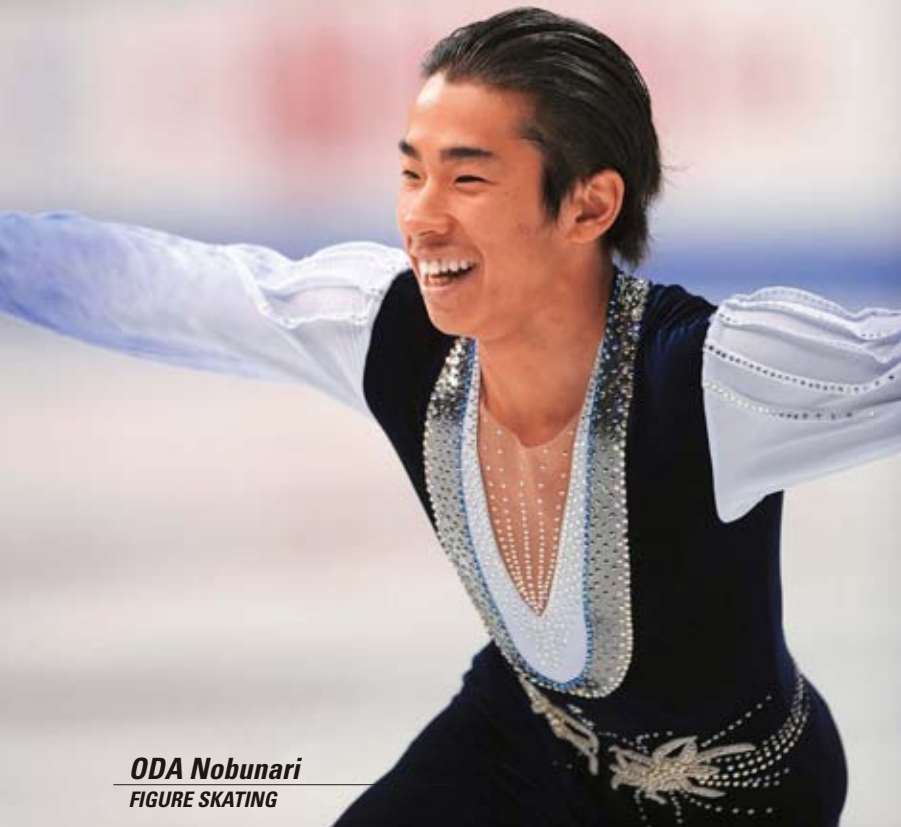
OKAZAKI Tomomi
SPEED SKATING

ただ、そのバンクーバーでの世界距離別選手権の個人種目では、史上初めてメダルを一つも獲ることができずに終わっている。リンクとの相性の悪さも原因とされたが、プレ大会だっただけに不安なところ。来年の本番で、環境にいかに対応するかも重要となる。

NAGASHIMA Keiichiro
SPEED SKATING



AFLO SPORT (2), REUTERS/AFLO (3)



ODA Nobunari
FIGURE SKATING



KOZUKA Takahiko
FIGURE SKATING

AFLO SPORT (3)



ANDO Miki
FIGURE SKATING



スケート
フィギュアスケート

昨シーズンの男子フィギュアスケートは、層の厚さが増したことを実感させる1年となった。飛躍を遂げたのが小塚崇彦選手。グランプリ（GP）・シリーズの開幕戦「スケートアメリカ」でGP初優勝を果たすと、GPの上位6名だけが出場できるGPファイナルに初出場し、2位で表彰台に上る。今年3月にロサンゼルス（アメリカ）で行なわれた世界選手権でも6位と健闘し、手応えを得ることで

きたシーズンとなった。

昨シーズンからニコライ・モロゾフコーチの指導を仰ぐ織田信成選手は、GP復帰戦となったNHK杯で4年ぶりに優勝し、全日本選手権でも初優勝。世界選手権では7位入賞を果たした。

GPファイナルでは2005年から3年連続で表彰台に上り、2007年の世界選手権では2位と、日本のエース格として活躍してきた高橋大輔選手は、昨シーズン、右足膝前十字じん帯と半月板の損傷で欠場を余儀なくされた。だがリハビリを経てすでに練習を



再開している。

日本は最大出場枠3を確保しているが、このほかにも成長を見せている選手もいるだけに、国内での出場枠確保に向けて切磋琢磨し、バンクーバーへと臨むことになる。

女子は、世界選手権で安藤美姫選手が3位となった。2007年の世界選手権初優勝以後、怪我な

どの影響により苦しんできたが、ジャンプ、スケーティングに切れを取り戻して終えたシーズンとなった。

その世界選手権で4位と表彰台を逃した浅田真央選手は、トリプルアクセルを2回取り入れるなど高難度のプログラムに挑戦するシーズンだった。ライバルのキム・

ヨナ選手（韓国）には差をつけられたシーズンだったが、バンクーバーを見据えてのチャレンジだっただけに、今シーズンの新しいプログラムが注目される。

そのほか、3年ぶりに世界選手権に出場し、伊藤みどり選手と並ぶ7度目の入賞となる8位に入った村主章枝選手、2006（

2008年の世界選手権ですべて入賞している中野友加里選手など、日本の女子フィギュアスケートの層の厚さは世界でもトップレベルにある。3つの出場枠をかけて、女子は男子以上の注目を集めることになるだろう。



TERAO Satoru
SHORT TRACK SPEED SKATING



FUJIMOTO Takahiro
SHORT TRACK SPEED SKATING

PHOTO KISHIMOTO (2)



OZAWA Mika
SHORT TRACK SPEED SKATING



ITO Ayuko
SHORT TRACK SPEED SKATING



TAKAMIDO Yuzo
SHORT TRACK SPEED SKATING



スケート
ショートトラック

1998年の長野冬季大会では、男子500mで金、銅2つのメダルを獲得するなど活躍が目立った男子ショートトラックは、近年、苦戦が続いている。その傾向は昨シーズンも変わらなかった。

その中で明るい材料となるのは、今年3月にウィーン（オーストリア）で行なわれた世界選手権の男子5000mリレーでの銅メダルである。これは2000年の世界選手権での2位以来、9年ぶりとなる表彰台だった。2008年2月に、この種目では初の外国人コーチとして韓国から招聘した金善台コーチの指導による結果の現れといえるだろう。

男子ショートトラックの第一人者といえば、これまで4度オリンピックに出場している寺尾悟選手。昨年12月の全日本選手権では総合優勝、史上2人目の5連覇を達成した。しかし、今年2月、練習中に左足首を骨折。世界選手権は欠場を余儀なくされた。若手では、全日本選手権で寺尾選手と優勝を争った藤本貴大選手、W杯で自己最高の4位となった高御堂雄三選手らの成長が目立った。

女子は、リレー種目の強化に力を入れている。リレーメンバーで、過去2度オリンピックに出場している小澤美夏選手、伊藤亜由子選手らの奮起に注目したい。



アイスホッケー

男子は、今年2月に行なわれたバンクーバー冬季オリンピック最終予選で敗れ、出場権を獲得できなかった。女子もまた、昨年11月の最終予選で敗れ、出場権を獲得できなかった。

AFLO SPORT (3)



ISA Hidenori
BIATHLON



バイアスロン

男子は、ソルトレークシティー、トリノと2度冬季オリンピックに出場している井佐英徳選手を中心にしのぎを削ってきた。今年2月に平昌（韓国）で行なわれた世界選手権の代表は、井佐選手をはじめ笠原辰己選手、永井順二選手、阿部悟選手で挑んだ4×7.5kmリレーで18位。個人戦では10kmでの永井選手の50位が最もよい順位だった。

女子で世界選手権代表になったのは、畔上尚子選手、泉めぐみ選手、大和田いつか選手、鈴木美由子選



KOBAYASHI Ryuichi, SUZUKI Hiroshi
BOBSLEIGH



NAGAI Junji
BIATHLON



ボブスレー

手。4×6kmリレーでは16位。個人戦では苦戦が続いた。

男子は、昨年12月の全日本選手権2人乗りで優勝した鈴木寛選手・小林竜一選手組が今年2月にレークプラシッド（アメリカ）で行なわれた世界選手権に出場し、28位だった。

女子は、昨年12月の全日本選手権2人乗りで優勝した松野真奈美選手・熊谷史子選手組が実力で抜きんでていた。熊谷選手は昨年



HINO Manami, KUMAGAI Fumiko
BOBSLEIGH



ボブスレー
スケルトン

6月の日本陸上競技選手権1000mハードルで4位入賞しているように、本来陸上競技の選手だが、昨秋からボブスレーを始めた。松野選手・熊谷選手組は、昨シーズンのW杯での最高成績は13位にとどまったが、経験を積み重ねてバンクーバーに挑む。

男子は、44歳の越和宏選手が今もナショナルチームをリードする。昨シーズンも日本代表として国際大会を転戦し、今年3月にレーク

ブラシッド（アメリカ）で行なわれた世界選手権では15位の結果を残している。
 女子は、世界選手権で12位となった小室希選手の活躍が目立つシーズンとなった。



リュージュ

男子リュージュは、トリノ冬季大会の1人乗りで20位だった小口貴久選手が引く張る。

トリノ冬季大会後は、戸城正貴選手との2人乗りに入力してきた。今年3月にレイクブラシッド（アメリカ）で行なわれた世界選手権の2人乗りでは転倒で途中棄権に終わった。

女子の第一人者は、1人乗りの原田窓香選手。トリノ冬季大会で13位だった原田選手は、昨シーズン12月にイーグルス（オーストリア）で行なわれたW杯の1人乗りで自己最高タイの11位に入ったほか、同年12月の全日本選手権では6連覇、アジアカップでも5連覇を達成している。



カーリング

カーリングは2007、2009年に行なわれた3度の世界選手権の結果によるランキングでバンクーバー冬季大会の出場枠が決まった。その結果、男子は出場を逃した。

一方の女子は、世界ランキングで開催国カナダを除き9位以内に



KOMURO Nozomi
SKELETON



KOSHI Kazuhiro
SKELETON

入ったため、バンクーバー冬季大会への出場権を獲得した。

今年3月の世界選手権こそ出場を逃したものの、2008年3月の世界選手権でチーム青森が日本代表として出場し4位入賞。これは1997年の世界選手権と並ぶ日本の最高成績であったことが証明するように、トリノ冬季大会後、実力をつけてきている。今後、オリンピック出場をかけて、国内での戦いが始まる。

Getty/AFLO, AFLO SPORT (2), REUTERS/AFLO



Team AOMORI
YAMAURA Mayo, MOTOHASHI Mari, ISHIZAKI Kotomi, MEGURO Moe
CURLING



HARADA Madoka
LUGE

第21回オリンピック冬季競技大会(2010/バンクーバー)実施競技種目と日程(現地時間)

男子 ■ 予選 ● 決勝 / 女子 ■ 予選 ● 決勝 / 混・共 ■ 予選 ● 決勝

2月

日本時間では翌日となります

		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
		金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	
スキー																			
(1) アルペン																			
回転	男 女																●	●	
大回転	男 女										●			●					
スーパー G	男 女								●	●				●					
滑降	男 女		●				●												
複合(滑降+回転)	男 女			●			●												
(2) クロスカントリー																			
15km/10km	男 女				●	●													
50km/30km	男 女																●	●	
4×10km/4×5kmリレー	男 女													●	●				
スプリント	男 女						●	●											
チームスプリント	男 女											●	●						
バシュート	男 女								●	●									
(3) ジャンプ																			
ノーマルヒル	男	■	●																
ラージヒル	男								■	●									
ラージヒル団体	男											●							
(4) ノルディック複合																			
個人(ノーマルヒル1本+距離10km)	男			●															
団体(ラージヒル1本+4×5kmリレー)	男											●							
スプリント(ラージヒル1本+距離10km)	男														●				
(5) フリースタイル																			
モーグル	男 女		●	●															
エアリアル	男 女									■		■		●	●				
スキークロス	男 女										●		●						
(6) スノーボード																			
パラレル大回転	男 女																●	●	
ハーフパイプ	男 女						●	●											
スノーボードクロス	男 女				●	●													
スケート		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
(1) スピードスケート																			
500m	男 女				●	●													
1,000m	男 女						●	●											
1,500m	男 女									●	●								
3,000m	男 女			●															
5,000m	男 女		●											●					
10,000m	男 女											●							
チームバシュート	男 女															■	■	●	
(2) フィギュアスケート																			
シングル	男 女					■		●					■		●				
ペア	混			■	●								■		●				
アイスダンス	混								■		■	●							
(3) ショートトラック																			
500m	男 女		■				●						■		●				
1,000m	男 女						■						■		●				
1,500m	男 女		●							●									
リレー3,000m	男 女		■											●					
リレー5,000m	男 女						■										●		
アイスホッケー		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
団体戦	男 女		■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	
バイアスロン		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
スプリント	男 女		●	●															
15km/12.5km	男 女									●	●								
20km/15km	男 女						●	●											
バシュート	男 女					●	●												
4×7.5km/4×6kmリレー	男 女												●			●			
ボブスレー		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
(1) ボブスレー																			
2人乗り	男 女									■	●		■	●					
4人乗り	男															■	●		
(2) スケルトン																			
スケルトン	男 女							■	■	●									
リュージュ		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
1人乗り	男 女		■	●	■	●													
2人乗り	共						●												
カーリング		12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	
団体戦	男 女					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	



シニア冬季オリンピック

チームジャパンを支える者たち

コーチ、トレーナー、技術スタッフなど、ひとりのアスリートは何名ものスタッフ（役員）に支えられている。ここに、夏季競技に比べより用具が重要なポイントとなる冬季競技には専門の技術スタッフが必要な。オリンピックで選手団に帯同できる人数に限りがあるなか、各競技団体はどのようなサポートを行なっているのか。その現状を、鈴木恵 JOCバンクーバー対策プロジェクト副委員長をナビゲーターに、アルペン、ノルディック複合、カーリング女子の強化スタッフならびに、フィギュアスケートの織田信成選手に語ってもらった。

選手に加え、どのようなスタッフが現場にいるのか

鈴木 今日、オリンピックの選手団に数多くのスタッフが含まれているのはなぜか、各競技団体のチームにはどれほどのスタッフがいて、実状を知りたいと思いませんか？

まず、スピードスケートの場合を説明しますと、選手1名に対しコーチ1名がつく体制をとっています。ただ、予算的に厳しいときには、自費で支援コーチという形をお願いすることもあります。また、1チームで複数の代表、例えば3、4名が選ばれた場合、2名のコーチでフォローすることもあります。基本的には1名の選手に1名のコーチ体制です。河野 ノルディック複合チームは大きな所帯ではありません。選手が5名、

スタッフが4名、常に9名でワールドカップを転戦します。世界選手権のよう大きな大会では、強化部長がサポートのために加わります。

鈴木 スタッフは具体的にはどのような人たちですか。

河野 コーチ2名、ワックスマン1名、マッサージ1名です。マッサージがクロスカントリのスキー板のワックス用のサポートをして、僕がジャンプ用のワックスをして、もうひとりのコーチはメディア対応もやるなど、ひとりで何役もこなしています。

古川 アルペンの場合は、技術コーチ、アシスタント、トレーナー、マッサージの4名ですね。そしてサービスマンがいます。サービスマンは選手ひとりずつにつきますが、これは用具メーカーから派遣していただいています。鈴木 その日の気温やコースの状態で



鈴木恵一

JOCバンクーバー対策プロジェクト副委員長 / 日本スケート連盟理事 / スピードスケート



ワックスを塗るのは誰の仕事ですか？

古川 サービスマンの仕事ですね。技術コーチは、大会が始まると、コースの状況をスタート地点へ逐次報告をしていく役割があります。

鈴木 やりとりはトランシーバーですか？

古川 はい。



古川年正

全日本スキー連盟常務理事・競技副本部長/アルペン



阿部晋也

日本カーリング協会強化委員/女子コーチ



河野孝典

全日本スキー連盟ノルデテック複合ヘッドコーチ



織田信成

日本スケート連盟/フィギュアスケート特別強化指定選手



鈴木 周波数は全部それぞれ国によって違うものなのですか。

古川 国ごとに登録してあります。実は、カナダやアメリカなどは英語でやりとりしていますが、情報はほぼ筒抜けですね。そういう点で、日本語は有利ですね(笑)。

鈴木 カーリングの場合はいかがでしょうか。

阿部 カーリングチームの選手は、リザーブも含めて5名。スタッフとしてコーチ2名とトレーナー1名、この3名は最低限必要です。

鈴木 会場のアイスの状態も試合に影響するように思うのですが、情報収集

は事前に行なうのでしょうか。あるいは選手自身が会場で見極めを?

阿部 「アイスメーカー」という、リンクの氷を仕上げる専門家の人たちがいるのですが、彼らといかに仲良くできるか、彼らとコミュニケーションをとって情報を得られるかが大きいですね。

鈴木 それは誰が行なう仕事ですか。

阿部 僕が行なっています。選手からも練習で得たフィッシングをフィードバックしてもらい、こちらからは室内の温度や湿度などの情報を交換するようにしています。

鈴木 選手の立場から、織田信成選手にも出席し

ていただいています。フィギュアスケートはコーチが常に大会について行きますね。それ以外の、例えば靴のメンテナンスなどはどのようにしているのですか。エッジの具合がよくないとか、そういうケースはないのですか?

織田 選手個々によって違うと思いますが、僕の場合、靴のメンテナンスは大会の1カ月前にやっていたと思います。エッジの位置やシャープニングは大会に合わせているので、あとはほとんど変えないんです。

鈴木 なるほど。スピードスケートのエッジは、昔は手で研いでいたのですが、今はマシンで研いでいますね。

スピードスケートでは、先ほどお話ししたコーチとともに、ドクターとトレーナーも外せないスタッフになります。

通常でもぎりぎりのスタッフ数しかない

ところで、オリンピックの場合は、JOCと各競技団体の個別折衝で、出場選手の人数に加え、スタッフの数についても希望を伝えることとなります。でも連れて行きたくても、オリンピックでは出場選手数に応じてスタッフ(役員)数が決められるシステムのため、通らないケースはままありますね。

河野 複合は、今の時点でスタッフ数はこれ以上はもう減らせないと人数です。スキー板の滑りが悪かったら、単純に20km走って1分も2分もタイムが悪くなってしまう。用具を使うスポーツなので、スタッフがすごく重要なんです。スキー板の手入れは、選手

はできないんですよ。というのも、ワックスに入っている成分は、気管支、呼吸器系に悪影響を及ぼすんです。

鈴木 そうなのですか?

河野 はい。その粉が気管支に悪影響を及ぼして、クロスカントリーのパフォーマンスを下げるのです。それによって咳が始まったり、喘息もちの選手は症状がひどくなったりすることがありますから、ワックスもマスクをして作業します。ですから、バンクーバーには、この人数を維持して向かいたいですね。

古川 アルペンでは、最近、日本の企業を取り巻く環境も大変ですから、企業の方々から、選手が何名でもサービスマンを1名にしてくれという申し出があります。でも選手によって、この部分をシャープにしたいとか癖があるんです。するとやっぱり1名のサービスマンじゃ対応しきれないですね。





AFLO SPORTS

PHOTO KISHIMOTO

エッジは今でも、匠が手で仕上げる世界ですから。

阿部 カリーニングは今いるスタッフがすべてを兼務しているといつてよい状態で、本当に今が最低限の人数です。細かなところでは、アイスコンディ

ションによってブラシヘッドを取り替えたりもします。あとは他国・地域のチームの試合を分析するスカウティングスタッフがいないと非常にありがたいのですが……。大会が始まってしまえばかり見ることになります。たまにコーチ2名で次の対戦相手を見て、戦術の研究などもしていますが、手が回りません。ですので他国・地域の試合を、ビデオで撮っておくこともあります。

鈴木 織田選手は、スタッフのサポートの力をどう感じていますか。

織田 今、関西大学のアイスアリーナで日々トレーニングをしています。それに加えて、京都のほうにトレーナーさんがいて、その人のところで陸上トレーニングを毎日させていただいているのですが、陸上トレーニングの大切さを教わりました。その成果は出ていると感じています。大会の現場でお世話になるわけではありませんが、大切なスタッフのひとりです。サポート体制の充実は大きいですし、今は最高の体制ができています。

バンクーバーで

設定している目標

鈴木 スタッフの存在はやはり試合では大きいということ、今現在でも、ぎ

りぎりの、無駄のない人数で活動していることがよく分かりました。そして、それでも選手の人数と変わらないくらいスタッフの数にならざるをえないということも知ることができたと思います。

では、バンクーバーへ向けての強化の方向と大会での目標を教えてください。

河野 複合は、2月の世界選手権でも味方にでき、7大会ぶりに団体で金メダルを獲得しましたが、大会前は日本はメダル候補ではなかったと思うんですね。実際、日本の選手たちの個人の世界ランキングを見ると18位から38位なんです。ほかの国からすればたぶん、団体は6番手とか7番手ぐらいの成績です。ですから、選手個々が力をつけて、世界ランキングを上げていかないと、バンクーバーではチャンスはないと思っています。

古川 トリノでは皆川賢太郎が回転で4位入賞を果たしました。皆川、佐々木と、2名の選手が第1シードに入り、湯浅も第3シードとなり、ひとりのエースに頼らずチームとして戦えたことが結果につながったと思います。

その後、皆川も佐々木も怪我をした影響などで、世界ランキングが大きく下がりが厳しい状況にはあります。やはり第1シードの15名に入れるか入れないかで、成績が変わりますから。ただ、アルペンでは1試合1試合で順位が変わるシステムですし、バンクーバーまでにはW杯などもあります。そこで順位を上げていければと思っています。あ

きらめてはいません。

阿部 トリノ以降、カナダだけではなく、ヨーロッパ遠征も行い、また、海外からチームを招聘して合同トレーニングもやるようになって、成果が出始めています。バンクーバーでは、まずは決勝トーナメントに上がることを目標にしています。

織田 3月に世界選手権に出場させていただいて7位でしたが、1位から7位まで、本当にわずかの差で、1つのミスがあるかないかで順位が変わるほどでした。僕自身、表彰台の一番高いところを目指して頑張りたいのですが、自分の課題を一つひとつクリアして目標に近づくことができればいいなと思っています。

鈴木 スピードスケートは、トリノではメダルなしに終わり、悔しい思いをしました。そこで、強化方針はメダル至上主義でいこうということをやってきました。重点強化として男女計6名の選手を選考したほか、海外合宿の充実を図ってきました。バンクーバーへのサポートとしては、非常にいい結果に結び付いていくような体制をとることができたらんじゃないかと思っています。

最後に、冬季競技は長野以降、芳しい成績を残していませんが、5月にはバンクーバーに向けて、初めて6競技合同の合宿を味の素トレセンで行ないました。チームジャパンとしての団結力もできていますから、力を合わせ「勝ちにこだわる」という思いで、バンクーバーに臨んでいきたいと思っています。

JOC 活動報告

JOC ACTIVITY REPORT

JOCの理念

JOCの使命は、全ての人々にスポーツへの参加を促し、健全な肉体と精神を持つスポーツマンに育て、オリンピック運動を力強く推進することにある。

オリンピックを通じて、人類が共に栄え、文化を高め、世界平和の火を永遠に灯し続けることこそ、JOCの理想である。

JOCの目的

オリンピック憲章に基づく国内オリンピック委員会（NOC）として、オリンピックの理念に則り、オリンピックムーブメントを推進し、スポーツを通じて世界平和の維持と国際友好親善に貢献するとともに、わが国のスポーツ選手の育成・強化を図り、もってスポーツ振興に寄与すること

JOCの活動

JOCでは、オリンピック競技大会及びそれに準ずる国際総合競技大会への選手派遣事業、ならびにオリンピックムーブメント推進を目的とした事業を2本柱として活動を展開している。



日本オリンピック委員会
Japanese Olympic Committee

「オリンピズム」

国際総合競技大会への
選手派遣事業
競技力向上事業

オリンピックムーブメントの
普及・啓発事業

竹田恆和JOC会長に聞く 就任5期目を迎えて

JOCの役割と8つの重点施策

JOCの役割には、ふたつの大きな柱があります。ひとつは、オリンピック・ムーブメントの推進です。オリンピック・ムーブメントとは、スポーツを通じて明るく豊かな社会を形成するとともに、相互理解を深めて国際親善に尽くし、平和の構築に貢献するということ、これを日本国内に広めるという使命があります。そのためには、これまでと同様、オリンピックリーダーやオリンピックコンサート、そしてJOC公式サイトなどを通じ、オリンピックの皆さんに協力いただきながら、スポーツの素晴らしさをひとり

も多くの国民の皆さんに伝え、参加を促す活動を続けなければなりません。もうひとつは、各競技の国際競技力の向上をサポートし、国民の期待にこたえることです。これにより、国際大会で好成績を収めることはもちろんですが、さらには日本代表選手の活躍によって子どもたちに夢と希望、活力を与え、広くスポーツへの参加を促して、青少年の育成・教育につなげることが大切です。

このふたつの役割を確実に果たすために、今期2年間の重点施策として、次の8項目を設定しました。

JOC8つの重点施策

- 1 2016年東京オリンピック・パラリンピック招致成功のため、東京都、招致委員会と連携しNOCとして最大限の努力をする。
- 2 バンクーバー冬季オリンピックで好成績をあげるための効果的な強化を行なう。
- 3 JOCゴールドプランを推進し味の素ナショナルトレーニングセンターの活用を含め強化環境をさらに整備する。
- 4 オリンピック・ムーブメントをさらに推進する。
- 5 競技団体と連携して国際戦略活動を推進する。
- 6 環境保全活動を啓発する。
- 7 財政基盤確立のためのマーケティング活動の充実を図る。
- 8 スポーツ立国を目指し文部科学省、日本体育協会等関係団体との連携をさらに深める。

平成21・22年度 JOC新体制

2016年東京オリンピック・パラリンピック招致と新スポーツ振興法

8つの重点施策の中で、最も重要な目標といえるのが、2016年東京オリンピック・パラリンピックの招致活動を成功させることです。2016年には国民の70%が1964年の東京オリンピックを知らない世代というデータもあります。私たちが64年東京大会で味わった感動を、次世代を担う今の子どもたちにも味わってもらうために、招致活動をぜひ成功させなければなりません。

その64年東京大会の開催が決まったことにより制定されたのが、「スポーツ振興法」（1961年制定）です。以来、半世紀が経ち、当時とは社会の状況も、スポーツへのニーズも大きく変化したため、「スポーツ振興法」には現状にそぐわない点も多々あり、抜本的な見直しが必要とされています。そこで現在、これにかわる「スポーツ基本法」の制定を関係諸団体とともに働きかけています。従来と大きく異なるべき内容は、「選手の強化」と「国際競技力の向上」を国策として取り組むという点です。他のスポーツ大国では、すでに国策として競技力向上に力を注いでいますから、そうした国々と対等に戦うためには、日本代表選手にも法的な国のサポートが必要なのです。

また、近年、オリンピックや世界選手権などの大きな大会の開催に当たっては、財政面をはじめとした国の保証が主催者側から求められるようになって

てきました。この点についてもスポーツ基本法には明記していただきたいと考えています。これまでの日本のスポーツは企業に負う部分が大きかったのですが、最近の金融危機や不況により、企業のサポートが大きく揺らいでいます。スポーツの振興を着実に進めるためにも、国をあげての取り組みが必要です。

『チームジャパン』で戦う
バンクーバー冬季オリンピック

昨年の北京オリンピックでは、味の素トレーニングセンター（味の素トレセン）で多くの競技団体が合宿を行ない、強化拠点としてはもちろんのこと、異なる競技の選手同士が交流するなど『チームジャパン』としての共通意識を醸成するのに大いに役立ったと感じています。

バンクーバー冬季オリンピックまで残り300日を切った5月には、初めての試みとして、バンクーバー冬季オリンピックの有望選手・指導者約160名を一堂に集めた合同合宿を味の素トレセンで実施しました。冬季競技は、その特性からなかなか競技団体が一堂に集まる機会がなかったので、『チームジャパン』の一員として意識と自覚、責任を育て、「勝ちにこだわる」という明確な目標の共有を行なう機会となりました。

トリノ冬季オリンピックの1年前と比較すると、男女のフィギュアスケート、スキー・ノルディック複合、スキークロス、スノーボードなどで好成績を

残している競技が多く、メダルに手の届く選手も少なくありません。いよいよ半年後に迫ったバンクーバーでは、選手達には自己最高のパフォーマンスを発揮し国民の期待に応えてもらいたいと思います。

味の素トレセンの有効活用と
JOCゴールドプランの進展

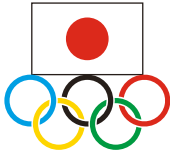
私たちが目下取り組んでいるJOCゴールドプランの推進に、密接にかかわってくるのが味の素トレセンです。トップアスリートのために、いかに有効に活用し結果に結びつけるかは、私たちに与えられた大きな責任と義務だと感じています。味の素トレセンが優れているのは、国立スポーツ科学セン

ター（JISS）に隣接し、情報・医学・科学面でのサポートが受けられるという点で、これをより効果的に利用することも考えなければなりません。

その一方で、味の素トレセンには施設のない屋外競技、海洋・水辺系競技や冬季競技などの強化拠点整備、高地トレーニングの拠点づくりも進めていく必要があります。

また、JOCスポーツアカデミー事業の充実にも引き続き取り組まなければなりません。ナショナルコーチアカデミー、エリートアカデミー、キャリアアカデミーの3事業がこれに当たります。ナショナルコーチアカデミー事業は、真のエリートコーチの養成には欠かせず、これまで119名が受講しました。エリートアカデミー事業には





今年からフェンシングも加わり、レスリング、卓球とともに一貫した指導体制の下で、ジュニア選手の育成に努めています。宿泊施設も2年後には拡充する予定ですから、将来、必ず実を結ぶと信じています。不況下にあつて、キャリアアカデミー事業には、大きな意義を感じています。選手たちが不安なく100%競技に打ち込めてこそ、オリンピックでの好成績も期待できます。選手達が競技を引退した後も、生活が成り立つようサポートするのは私たちの責任でもあるのです。

海外派遣事業などで、各競技団体の国際戦略活動を支援

国際戦略活動は、国際競技力の向上と並んで力を入れなければならないものです。各競技団体にとって、海外の関係機関や選手、関係者とコミュニケーションを図ることは重要であり、各国国際競技連盟（IF）に人材を送り込むことができれば、さまざまなメリットをもたらしめます。また、オリンピックのような大きな国際大会を開催するには各国の機関の協力を仰ぐ必要があります、その際にも海外と信頼関係にある

人脈が欠かせません。

国際戦略活動を進めるには、語学力やコミュニケーションのスキルを備えた優秀な人材を育てる必要があります、JOCでは海外で活躍できる人材育成のための海外研修事業を行なつて、今後各競技団体を支援します。

スポーツ界がリーダーシップをとって環境保全活動を推進

IOCはスポーツ、文化と並んで環境を活動の柱に掲げています。このことから環境問題が、いかに重要な課題かがわかると思います。環境保全活動は、アスリート以前に人として取り組まなければならない分野です。スキーやスケートなどができなくなる事態を避けるために、スポーツ界がリーダーシップをとつて、地球温暖化防止に貢献したいと思います。

多くの賛同が寄せられたJOCパートナーシッププログラム

JOCのプランを円滑に実行するには、当然のことながら財政面での裏付けが必要です。その意味でマーケティング活動は、財政基盤の確保・拡充に欠かせません。

今年度から新たな「JOCパートナーシッププログラム」をスタートさせ、従来の「JOCオフィシャルパートナー」に加え、日本スポーツ界最高位のスポンサーという位置づけの「JOCゴールドパートナー」を新設しま

した。不況下で賛同いただくことができるのか、その成り行きを心配しましたが、ありがたいことに多くの企業に協力していただくことができました。改めてオリンピックの高いブランド力を知るとともに、パートナーになっていただいた企業の期待に応えたいと考えています。

経済大国である日本を「スポーツ立国」に

私たちは今、経済大国である日本を、バランスのとれたスポーツ立国にする活動を始めています。子どもたちや市民がもっと自由に、もっと気軽にスポーツを楽しめる環境をつくり、スポーツを楽しむ人のすそ野を広げつつ、その中から将来のトップアスリートを発掘して、育てるといふ社会のシステムをつくることも、スポーツ立国に向けた活動のひとつです。すでに各地に地域のスポーツクラブが誕生し、各自治体を中心とした優れた素質を有する子供たちの発掘も始まっています。

スポーツ立国化が進めば国民の健康が増進され、結果として医療費の削減につながるなど大きなメリットが予想される一方で、スポーツ産業の振興と



PHOTO KISHIMOTO

いったことも期待できます。スポーツ立国の推進に当たっては、各界の協力を得ることが必要で、ことに文部科学省や日本体育協会などの連携は欠かせません。さらにはスポーツ基本法の制定や、スポーツ省（庁）の設置といった政治や行政とともに進めるべき課題でもあります。

国民の皆さんの期待に応えるために

8項目の重点施策をはじめ、私たちはJOCには取り組むべき課題が数多くあります。私たちには常に国民の期待に応えるという責務があり、結果が求められているということを忘れずに臨みたいと思います。

JOCは各競技団体と総力を結集してベストを尽くし、満足できる成績を残していきたいと思つています。JOCは、そのためのサポートを惜しみません。子どもたちにとって、夢とあこがれの存在であるオリンピックの皆さんには、世界を舞台に活躍した経験を子どもたちに還元し、子どもたちのリーダーとして、いい影響を与え、スポーツのもつチカラを、JOCとともに是非、活かしてもらいたいと思つています。

日本オリンピック委員会役員紹介

平成21・22年度



おかの・しゅんいちろう
1931年8月生まれ。勸日本サッカー協会最高顧問、東アジアサッカー連盟名誉会長、第1回アジア冬季競技大会(1986/札幌)日本代表選手団団長、会社役員。

岡野俊一郎
■ 理事
■ IOC委員



うえむら・はるき
1951年2月生まれ。選手強化本部本部長、ナショナルトレーニングセンター委員会副委員長、(財)全日本柔道連盟会長、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団総監督、第21回オリンピック競技大会(1976/モントリオール)柔道無差別級金メダリスト、団体役員。

上村春樹
■ 常務理事



ふるはし・ひろのしん
1928年9月生まれ。元JOC会長、日本ユニバーシアード委員会(JUSB)名誉委員長、(財)日本水泳連盟名誉会長、国際大学スポーツ連盟(FISU)最高名誉メンバー、国際水泳連盟副会長、アジア水泳連盟名誉会長、第26回オリンピック競技大会(1996/アトランタ)日本代表選手団団長他、第15回オリンピック競技大会(1952/ヘルシンキ)日本代表選手団主将、IOCオリンピックオーダー銀章受章(1995)、アジアオリンピック評議会(OCA)功労章受章(1996)・ゴールドピン受章(2007)、文化勲章受章(2008)。

古橋廣之進
■ 顧問



おざき・まさのり
1945年7月生まれ。総務委員会副委員長、事業・広報専門委員会委員長、(財)日本ソフトボール協会専務理事。

尾崎正則
■ 理事



きむら・こうじ
1940年12月生まれ。総務委員会委員長、国際専門委員会委員長、(財)日本卓球協会副会長、国際卓球連盟執行副会長。

木村興治
■ 常務理事



たけだ・つねかず
1947年11月生まれ。勸日本体育協会理事、日本オリンピック協会会長、(社)日本馬術連盟副会長、IOC第21回オリンピック冬季競技大会(2010/バンクーバー)・第22回オリンピック冬季競技大会(2014/ソチ)調整委員会委員、アジアオリンピック評議会(OCA)理事、国内オリンピック委員会連合(ANOC)理事、(特非)東京オリンピック・パラリンピック招致委員会副会長、国際馬術連盟名誉副会長。

竹田恆和
■ 会長



かさや・ゆきお
1943年8月生まれ。選手強化本部副本部長、強化育成専門委員会副委員長、(財)全日本スキー連盟常務理事、第11回オリンピック冬季競技大会(1972/札幌)スキー・ジャンプ70m級金メダリスト、会社役員。

笠谷幸生
■ 理事



いたばし・いちた
1944年12月生まれ。財務専門委員会副委員長、スポーツ環境専門委員会委員長、ナショナルトレーニングセンター委員会副委員長、団体役員。

板橋一太
■ 常務理事



ふくだ・とみあき
1941年12月生まれ。ナショナルトレーニングセンター委員会委員長、(財)日本レスリング協会会長、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団団長、国際レスリング連盟副会長、第4回東アジア競技大会(2005/マカオ)日本代表選手団団長、第15回アジア競技大会(2006/ドーハ)日本代表選手団副団長他、会社役員。

福田富昭
■ 副会長



こうの・いちろう
1946年11月生まれ。アンチ・ドーピング委員会委員長、(特非)東京オリンピック・パラリンピック招致委員会事務総長、日本アンチ・ドーピング機構理事、(財)日本ラグビーフットボール協会理事、国際ラグビー連盟理事、第28回オリンピック競技大会(2004/アテネ)日本代表選手団本部役員他、大学教授。

河野一郎
■ 理事



あおき・つよし
1947年1月生まれ。総務委員会副委員長、マーケティング委員会委員長、(財)日本水泳連盟副会長、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団本部役員他、スイミングクラブアドバイザー。

青木 剛
■ 理事



みずの・まさと
1943年5月生まれ。IOCスポーツと環境委員会委員、IOCオリンピックオーダー受章(2001)、会社役員。

水野正人
■ 副会長



さとう・ゆきお
1944年6月生まれ。法務専門委員会委員長、(財)全日本剣道連盟常任理事、国際剣道連盟事務総長、大学特任教授。

佐藤征夫
■ 理事



あらかだ・ゆうこ
1954年2月生まれ。アスリート専門委員会委員長、(財)日本バレーボール協会執行役員、OCAアスリート委員会委員長、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団本部役員、第21回オリンピック競技大会(1976/モントリオール)バレーボール女子金メダリスト。

荒木田裕子
■ 理事



いちはら・りのゆき
1941年10月生まれ。勸日本ハンドボール協会副会長、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団副団長、第15回アジア競技大会(2006/ドーハ)日本代表選手団総監督、第3回東アジア競技大会(2001/大阪)日本代表選手団団長、日本トップリーグ連携機構事務理事他、大学特別客員教授。

市原則之
■ 専務理事



さわき・けいすけ
1943年12月生まれ。選手強化本部副本部長、情報・医・科学専門委員会委員長、(財)日本陸上競技連盟専務理事、大学特任教授。

澤木啓祐
■ 理事



いが・ちほる
1931年5月生まれ。日本オリンピックアカデミー会長、(社)日本トライアスロン連合名誉会長、国際トライアスロン連合副会長、第7回オリンピック冬季競技大会(1956/コルチナ・ダンベッツォ)スキー・アルペン銀メダリスト、団体役員。

猪谷千春
■ 理事
■ IOC副会長



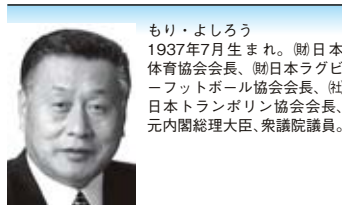
たなか・ひでとし
1946年12月生まれ。日本ユニバーシアード委員会委員長、表彰専門委員会委員長、(財)日本相撲連盟副会長、国際相撲連盟会長、大学役員。

田中英壽
■ 常務理事



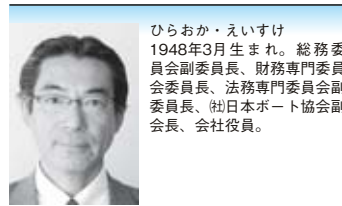
あいざわ たかや
1946年3月生まれ。勸全日本ボウリング協会専務理事、団体役員。

相澤隆也
■ 監事



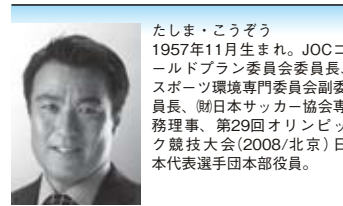
もり よしろう
1937年7月生まれ。勸日本体育協会会長、勸日本ラグビーフットボール協会会長、(社)日本トランポリン協会会長、元内閣総理大臣、衆議院議員。

森 喜朗
■ 理事



ひらおか えいすけ
1948年3月生まれ。総務委員会副委員長、財務専門委員会委員長、法務専門委員会副委員長、(社)日本ボート協会副会長、会社役員。

平岡英介
■ 理事



たしま こうぞう
1957年11月生まれ。JOCゴールドプラン委員会委員長、スポーツ環境専門委員会副委員長、勸日本サッカー協会専務理事、第29回オリンピック競技大会(2008/北京)日本代表選手団本部役員。

田嶋幸三
■ 理事



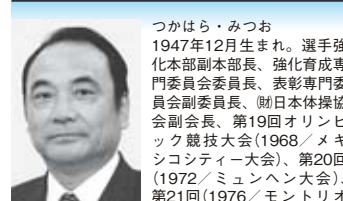
いわがみ やすたか
1948年10月生まれ。勸日本ゴルフ協会専務理事、団体役員。

岩上安孝
■ 監事



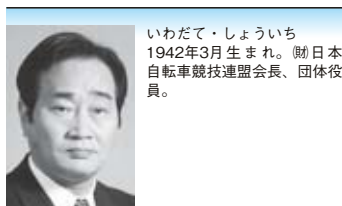
ふくい つよし
1957年6月生まれ。強化育成専門委員会副委員長、JOCゴールドプラン委員会副委員長、(社)日本テニス協会常務理事、プロテニス選手。

福井 烈
■ 理事



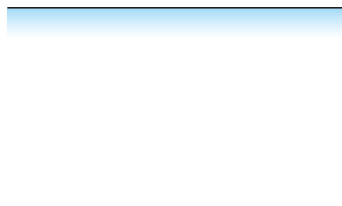
つかはら みつお
1947年12月生まれ。選手強化本部副本部長、強化育成専門委員会委員長、表彰専門委員会副委員長、(社)日本体操協会副会長、第19回オリンピック競技大会(1968/メキシコシティ大会)、第20回(1972/ミュンヘン大会)、第21回(1976/モントリオール大会)体操競技金メダリスト他、会社役員。

塚原光男
■ 理事



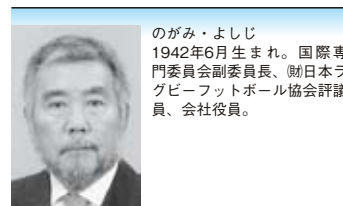
いわだて しゅういち
1942年3月生まれ。勸日本自転車競技連盟会長、団体役員。

岩楯昭一
■ 監事



ふじわら ようすけ
1953年6月生まれ。事業・広報専門委員会副委員長、(特非)東京オリンピック・パラリンピック招致委員会企画・広報担当。

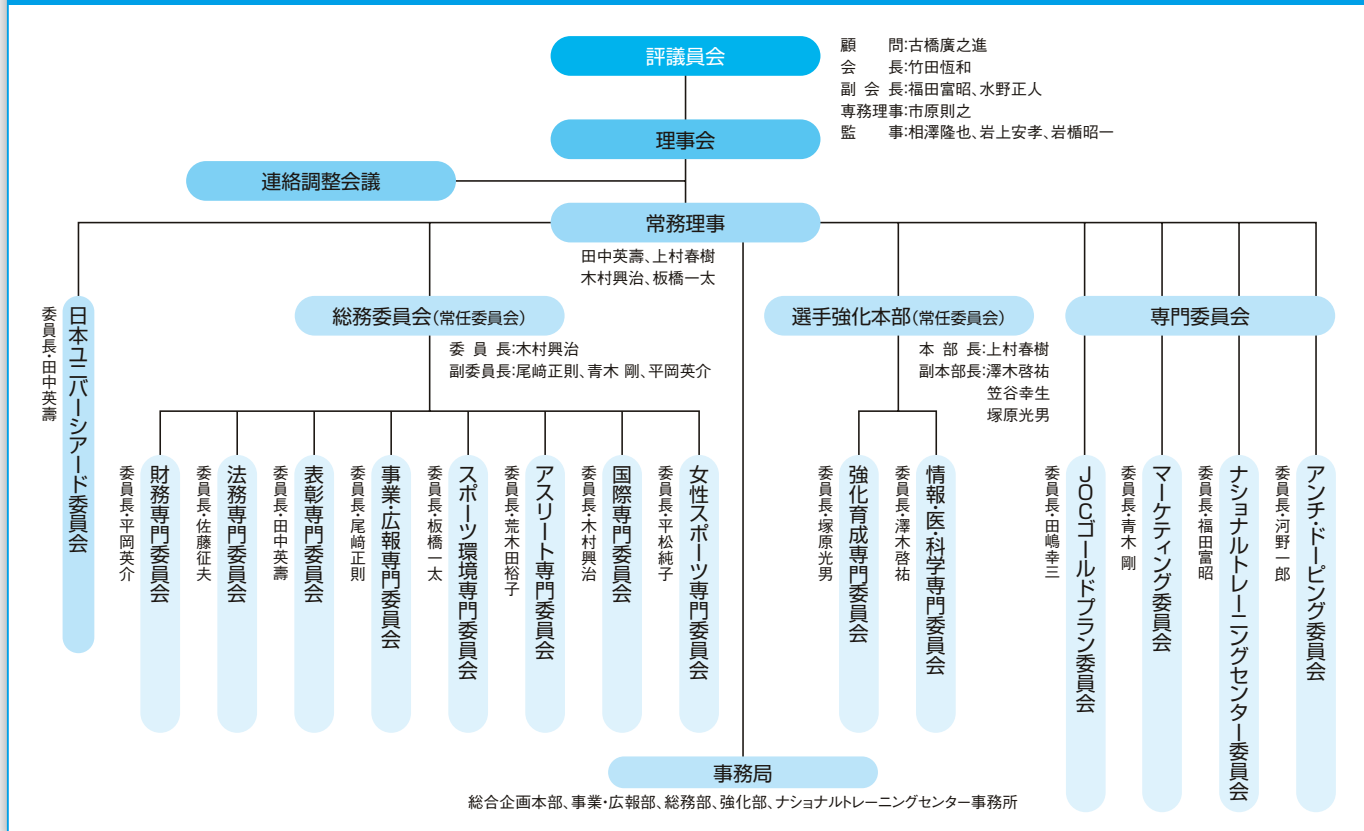
藤原庸介
■ 理事



のがみ よしじ
1942年6月生まれ。国際専門委員会副委員長、(社)日本ラグビーフットボール協会評議員、会社役員。

野上義二
■ 理事

平成21・22年度 勸日本オリンピック委員会 組織機構図



国際総合競技大会への選手派遣事業

第24回ユニバーシアード冬季競技大会 (2009/ハルピン)

http://www.joc.or.jp/int_games/winter_univ/2009/

開催期間：2009年2月18日～28日 11日間

開催地：中華人民共和国 / ハルピン

参加国・地域数：44 (前回大会：48)

参加選手・役員数：2,411名

実施競技・種目：5競技 81種目 (前回大会：5競技 72種目)

日本の参加競技種目数：4競技 64種目

日本代表選手団編成数：187名 (選手：男子68名・女子58名 / 役員49名 /
アディショナルオフィシャル12名)

団長：鈴木恵一 (JOC選手強化本部常任委員)

主将：中野友加里 (スケート / フィギュアスケート)

旗手：武田奈也 (スケート / フィギュアスケート)

日本代表選手団成績：金メダル9、銀メダル8、銅メダル3
合計メダル数20 入賞者総数67名フィギュアスケート 女子シングルで、中野友加里選手が金メダル、
武田奈也選手が銀メダルを獲得スピードスケート女子1500mで、金メダルを獲得した小平奈緒選
手

第25回ユニバーシアード競技大会 (2009/ベオグラード)

http://www.joc.or.jp/int_games/univ/2009/

開催期間：2009年7月1日～12日 12日間

開催地：セルビア共和国 / ベオグラード

実施競技・種目：12競技 203種目 (前回大会：15競技 236種目)

日本の参加競技種目数：12競技

日本代表選手団編成数：392名 (選手：男子139名・女子126名 / 役員109名 /
アディショナルオフィシャル18名)

団長：田中英壽 (JOC常務理事、日本ユニバーシアード委員会委員長)

主将：水谷隼 (卓球)

旗手：入江陵介 (水泳 / 競泳)



結団式で挨拶する竹田恒和JOC会長

今後の主な国際総合競技大会への選手派遣

http://www.joc.or.jp/int_games/

2009年

第5回東アジア競技大会
(ホンコン・チャイナ / 香港：12/5～13)

2010年

第21回オリンピック冬季競技大会
(カナダ / バンクーバー：2/12～28)第16回アジア競技大会
(中華人民共和国 / 広州：11/12～27)第1回ユースオリンピック競技大会
(シンガポール：8/14～26)

2011年

第7回アジア冬季競技大会
(カザフスタン / アスタナ, アルマティ：1/30～2/6)第25回ユニバーシアード冬季競技大会
(トルコ共和国 / エルズルム：1/27～2/6)第26回ユニバーシアード競技大会
(中華人民共和国 / 深圳：8/12～23)

2012年

第30回オリンピック競技大会
(英国 / ロンドン：7/27～8/12)第1回ユースオリンピック冬季競技大会
(オーストリア / インスブルック：開催期間未定)

2013年

第6回東アジア競技大会
(中華人民共和国 / 天津：開催期間未定)第26回ユニバーシアード冬季競技大会
(スロベニア / マリボル：開催期間未定)第27回ユニバーシアード競技大会
(ロシア / カザン：開催期間未定)

2014年

第22回オリンピック冬季競技大会
(ロシア / ソチ：2/7～23)第2回ユースオリンピック競技大会
(開催地未定 / 開催期間未定)第17回アジア競技大会
(大韓民国 / インチョン：9/18～10/4)

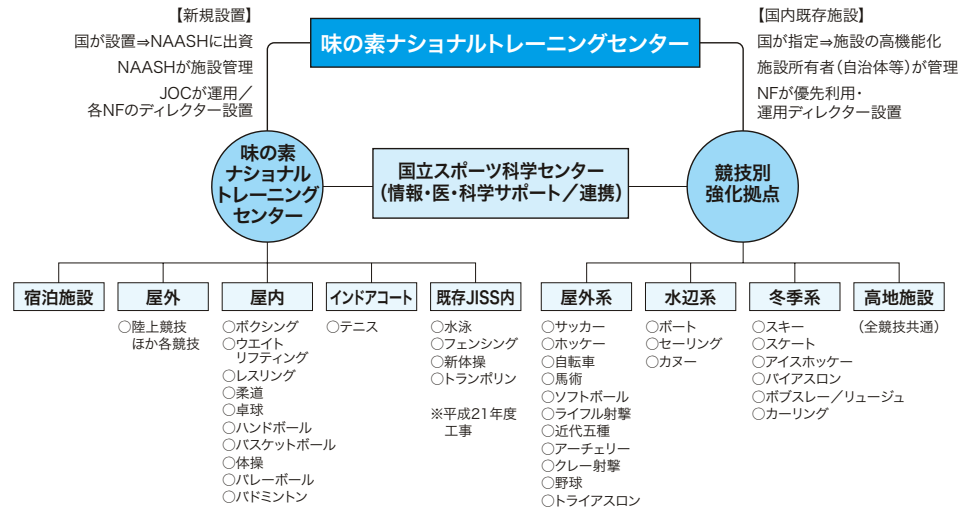
味の素ナショナルトレーニングセンター

<http://www.joc.or.jp/ntc/>

日本初のトップレベル競技者用トレーニング施設として東京都北区に2008年1月21日より供用を開始した味の素ナショナルトレーニングセンター(味の素トレセン)は、JOC及びJOC加盟競技団体に所属する選手・スタッフが専用で利用している。JOC及び各競技団体が味の素トレセンに専門スタッフを配置し、円滑に運用。また隣接した国立スポーツ科学センター(JISS)と「スポーツ情報・医・科学」で連携を図りながら、国際競技力の向上に「チームジャパン」として一丸となり取り組んでいる。

味の素トレセンには、陸上トレーニング場ならびに室内10競技の練習場と屋内テニスコートが整備されている。国際基準で作られた各練習場には、複数の動作解析カメラなど、最新鋭の設備を整え、練習場のほか、施設内にはアスリートヴィレッジと呼ばれる宿泊施設も併設している。

味の素トレセンに含まれない屋外系、水辺系、冬季系の合計17競技19種目及び高地トレーニングについては、国内各地に既存する合計20施設(平成21年6月現在)を競技別強化拠点として国が指定している。各競技別強化拠点では、中核



拠点である味の素トレセンと連携し日本のナショナルトレーニングセンターを形成するため、味の素トレセンと同等のサポートができるよう、施設を高機能化させる事業が国により進められている。

また、味の素トレセンの供用開始にともなって、JOCが2008年から取り組みを開始したのが、JOCスポーツアカデミー事業である。本事業には、オリンピックをはじめとする国際総合競技大会に派遣するコーチ、スタッフやその候補者の研

修と育成を行う「JOC ナショナルコーチアカデミー事業」、ジュニア選手が寄宿しながら将来オリンピックをはじめとする国際総合競技大会で活躍できるよう育成する「JOC エリートアカデミー事業」、トップ選手の将来の生活設計をサポートするとともに、そのキャリアの社会還元を進める「JOC キャリアアカデミー事業」の3事業があり、選手強化ならびに国際競技力向上を図っている。

エリートアカデミー事業：本誌 23 ページを参照

オリンピック強化指定選手制度(アスリートプログラム)

<http://www.joc.or.jp/goldplan/>

JOC では、オリンピック競技大会で実施される正式競技の日本代表として参加可能な者をオリンピック強化指定選手として認定し、その自覚を促すとともに、効果的な強化活動の展開を図ることを目的にオリンピック強化指定選手制度(アスリートプログラム)を制定している。

実施している事業内容は下記の通り。

- 1) 定期的な健康診断や体力測定
- 2) 当該競技団体への強化スタッフの配置
- 3) 上記強化スタッフ連絡会議の開催
- 4) 国内外の強化合宿、海外遠征
- 5) その他、強化に必要な諸事業

強化指定選手は、当該競技団体から推薦された者の中から、次の3つの条件のひとつ以上を満たした選手が認定される。

- 1) 当該競技団体がオリンピック競技大会の候補選手として決定した者
- 2) オリンピック競技大会参加標準記録の突破、及び地域予選会、世界ランキング等により参加資格を獲得した者
- 3) 当該競技団体が将来特に有望であると認定した者

なお各競技・種目ごとの人数は、原則としてオリンピック競技大会参加可能数の2倍以内とする。

また強化指定選手のうちオリンピック競技大会でメダルの獲得など入賞が期待される者は、エリート、ユースエリートとして認定され、エリートに対しては専任の強化スタッフが配置される。

強化指定選手、強化スタッフは、ともに本会会長名により認定、委嘱を行い、その期間は原則としていずれも当該年の4月1日から翌年3月31日までの1年間とする。但し、この期間中であっても、事情に応じて4半期毎に新たに追加、あるいは解除することができる。

選手強化事業

コーチ会議

コーチ会議では、オリンピックに向けての強化策や取り組みについて、JOC 加盟競技団体強化担当者、JOC 強化スタッフらが参加して情報交換を行っている。

今年度は、

- ①選手強化本部基本方針を周知徹底し、第21回オリンピック冬季競技大会（2010／バンクーバー）ならびに第30回オリンピック競技大会（2012／ロンドン）に向けて「チームジャパン」として一丸となって戦う体制の構築、
 - ②スポーツ立国化に向けた現在の情勢を把握し、スポーツ界が一体となってトップアスリートの育成強化を推進、
- の2つについて、6月15日、235名が参加して開催された。

最初に、上村春樹選手強化本部長が平成21・22年度選手強化本部基本方針「現場主義」を示し、生きた情報の収集とその分析・評価に基づき、現場に役立つ支援策の実行が確認された。

そのほか、ロンドン大会、バンクーバー冬季大会の対策プロジェクト内容の発表、JOC スポーツアカデミー事業の現状報告、情報・医・科学、NTC、JOC ゴールドプラン、アンチ・ドーピング等について、最新情報を共有。スポーツ立国に向けた文部科学省（国）の動向、2016年オリンピック・パラリンピック招致等について現状報告が行われた。

スポーツ指導者海外研修

http://www.joc.or.jp/foreign_trainee/

JOC は、加盟競技団体に所属の若手指導者をスポーツ指導者海外研修員として海外に派遣し、その専門とする競技水準の向上に関する具体的な方法等について研修させるとともに、海外の選手強化対策、指導者養成の実態等について調査・研究に当たらせ、将来我が国のスポーツ界を担う指導者として育成する事業を行なっている。

海外研修員は、次の条件すべてを満たす者の中から選考される。

- 1) 帰国後すぐに、本会の強化スタッフとして推薦でき、競技団体における指導者として活躍できること

- 2) 渡航先の研修施設の受け入れの保証があること
- 3) 勤務先等の所属長より渡航の承諾を受けていること
- 4) 外国での研修に堪えうる語学力を有すること
- 5) 当該年度の8月末日までには渡航先に出発できる見込みがあること

海外研修員には長期派遣者（研修期間2年以内）と短期派遣者（同1年以内）があり、原則として1カ所において集中的に研修する。

平成20年には、長期派遣者2名と短期派遣者3名の合わせて5名を派遣し、国際舞台で活躍できる人材の育成を図っている。

平成21年度 スポーツ指導者海外研修員

【長期派遣（2年）】

中垣内 祐一（なかが いち ゆういち）／

バレーボール（男子）

世界トップレベルの指導法習得。研修地：アメリカ（アナハイム）

佐原 礼香（さはら あやか）／体操（女子）

アメリカ体操界のジュニア選手育成システム及びその指導方法を学ぶ。研修地：アメリカ（サクラメント）

沖 美穂（おき みほ）／自転車（ロード）

自転車コーチング技術・語学研修及びイタリアサイクリングコーチングライセンスの習得。研修地：イタリア（ベルガモ）

【短期派遣（1年）】

中村 さなえ（なかむら さなえ）／ボート

ナショナルチームのマネジメント・コーチング・選手育成システム・コーチ育成プログラムを学ぶ。研修地：ドイツ（ハノーバー）

小林 敦（こばやし あつし）／バレーボール（男子）

アメリカにおけるバレーボールの指導法、強化システムを学ぶ。研修地：アメリカ（アナハイム）

上村 美揮（うえむら みき）／体操（女子）

アメリカ体操界のジュニア育成システム及びその指導方法について。研修地：アメリカ（テキサス）

神野 由佳（かみの ゆか）／

スケート（ショートトラック）

カナダにおけるショートトラックの指導方法及び選手強化、選手育成システムについて。研修地：カナダ（カルガリー）

中村 健一（なかむら けんいち）／セーリング

イギリスにおけるセーリングユース世代の育成・強化を学ぶ。研修地：イギリス（サザンプトン）

上原 茉莉（うえはら まり）／カヌー

オンシーズン・オフシーズンのトレーニング方法及び練習内容、技術を学ぶ。研修地：ドイツ（デュースブルク）

アンチ・ドーピング

http://www.joc.or.jp/anti_doping/

JOC は、日本アンチ・ドーピング機構（JADA）とともに、世界ドーピング防止規定（WADA 規定）の署名当事者として、積極的にアンチ・ドーピングの普及・啓発活動に取り組んできた。

ドーピングは、選手の健康を害するばかりか、スポーツの理念や価値を損ない、青少年に悪影響を与える行為であり、国

際的にも、2005年10月、第33回国際連合教育科学文化機構（ユネスコ）総会において採択された「スポーツにおけるドーピング防止に関する国際規約（規約）」が世界190カ国以上で締結され、ドーピング防止活動に取り組まれている。

JOC では、2007年5月、国内ドーピング防止機関として国の指定を受けた JADA

と協力し以下の活動を実施している。

- 競技団体及び選手への居場所情報に関する啓発活動
- 国際総合競技大会への選手派遣にあわせたドーピング検査の実施
- WADA 関連会議への出席及び情報収集
- その他、JADA の諸活動に関わる協力

JOCスポーツ賞

<http://www.joc.or.jp/aboutjoc/prize/sportsaward/>

JOCでは、オリンピック・ムーブメントの推進とスポーツの各分野で優れた成果を挙げた選手や指導者の栄誉、功績を讃えるため、JOCスポーツ賞を制定している。同賞には「JOCオーダー」、「年度賞」、「特別貢献賞」及び「トップアスリートサポート賞」の4種別がある。このうち「年度賞」は、当該年度において優れた成果を挙げたJOC加盟団体の選手や指導者等に贈られ、「最優秀賞」、「優秀賞」、「新人賞」、「特別功労賞」、「特別栄誉賞」の5種類がある。

JOCでは、IOCが定める6月23日のオリンピックデーを記念して毎年開催しているオリンピックデー記念式典において、JOCスポーツ賞の表彰を行っており、平成20年度表彰は6月14日に開催した。最優秀賞受賞の北京オリンピック大会ソフトボール日本代表チームを始めとした受賞者に、福田富昭 JOC 副会長から賞状とメダル、トロフィー、報奨金が授与された。

平成20年度 JOC スポーツ賞

◇年度賞◇

【最優秀賞】

北京オリンピック大会日本代表チーム／ソフトボール

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）ソフトボール女子 第1位
＜オリンピックのチーム競技では32年ぶりの金メダル獲得＞

【優秀賞】

内柴 正人（うちしば まさと）／柔道

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）柔道男子 66kg級 第1位
＜オリンピック2連覇＞

谷本 歩実（たにもと あゆみ）／柔道

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）柔道女子 63kg級 第1位
＜オリンピック2連覇＞

上野 雅恵（うえの まさえ）／柔道

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）柔道女子 70kg級 第1位
＜オリンピック2連覇＞

【新人賞】

圖師 未希絵（ずし みきえ）／アーチェリー

世界アーチェリーユース選手権大会 アーチェリー ジュニア女子個人 第1位
＜日本初の世界ユース優勝＞

【特別功労賞】

北京オリンピック大会女子チーム

伊調 千春（いちょう ちはる）

吉田 沙保里（よしだ さおり）

伊調 馨（いちょう かおり）

浜口 京子（はまぐち きょうこ）

／レスリング

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）レスリング女子 出場種目全てでメダル獲得

太田 雄貴（おおた ゆうき）／フェンシング

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）フェンシング男子フルレー 第2位
＜オリンピック、世界選手権を通じて、史上最高位となる銀メダル獲得＞

北京オリンピック大会男子

4×100mリレーチーム

塚原 直貴（つかはら なおき）

末續 慎吾（すえつぐん じんご）

高平 慎士（たかひら しんじ）

朝原 宣治（あさはら のぶはる）

／陸上競技

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）陸上競技男子 4×100mリレー 第3位
＜トラック種目で80年ぶり、男子初となるメダル獲得＞

【特別栄誉賞】

北島 康介（きたじま こうすけ）／水泳

第29回オリンピック競技大会（2008/北京）競泳男子 100m平泳ぎ 第1位
男子 200m平泳ぎ 第1位
＜2大会連続の2冠達成、100m平泳ぎは世界新記録＞

◇特別貢献賞◇

（財）日本水泳連盟／水泳

JOCマーケティングプログラムへの積極的な貢献（団体）



「平成20年度JOCスポーツ賞」受賞の皆さん。6月14日のオリンピックデー記念式典にて

PHOTO KISHIMOTO

オリンピック・ムーブメント普及・啓発事業

AFLO SPORT



Olympic Day Run

走り続けることで 多くの人に感動や走る楽しさを伝える

1949年の国体で初マラソンを経験して以来、ヘルシンキオリンピック、ボストンマラソンを含め、
数々のレースに出場されてきた山田敬蔵さん。

オリンピックの思い出や金栗四三氏をはじめとする恩師とのエピソード、
オリンピックデーランの魅力を語っていただいた。

第二次世界大戦後、日本のオリンピック復帰が認められた1952年ヘルシンキ大会のマラソンでオリンピックに出場した山田敬蔵さん。当時24歳だった山田さんも現在は81歳だが、その健脚ぶりはいまだ衰えることはない。多摩川沿いを毎日30km走ること、健康を維持しているという。

「毎日走っているとね。犬の散歩をする人、ウォーキングをする人、自転車で買い物に行く人、同じ人と同じ時間に会う。顔見知りになって、挨拶したりするんですよ」

山田さんと言えば、ヘルシンキ大会の翌年のボストンマラソン優勝が有名だ。「心臓破りの丘」のタイトルで映画化もされた思い出深いレースであり、その後57年、75年、76年と出場。さらに95年から今年まで、フルマラソンに連続出場し、完走している。

山田さんがオリンピックデーランに初めて参加したのは、1992年5月の「92オリンピックデーラン野沢温泉大会」だ。以来、体育の日に駒沢オリンピック公園総合運動場で開催する「オリンピックフェスティバル」を中心に、何度もデーランに参加している。「走っていると『わざわざ大阪から来たんですよ』とか『山田さん、また一緒にになりましたね』と声をかけられることがあります。また、走り終わると、オリンピックが並んでサインしたりする。デーランは参加者と走りながら交流できるし、みんな楽しく汗をかけるのがいいですね」

ゲストランナーのオフアールがあれ

オリンピックデーランとは

オリンピックデーランは、6月23日のオリンピックデーを記念して国際オリンピック委員会（IOC）と各国・地域のオリンピック委員会により開催されているスポーツイベント。日本では1987年にスタートし、今年で23日目となる。一般参加者がオリンピックと交流しながら一緒に走ることで、スポーツの楽しさやオリンピックの基本精神を肌で感じ、理解していただくことを目的としている。延べ参加者数は49万人を超え、平成21年度もオリンピックとの“ふれあい”をテーマに6月7日大阪で幕開けし、全国8会場で開催する。毎年10月に東京・駒沢オリンピック公園総合運動場で開催してきた「オリンピックフェスティバル」は、本年度より会場を味の素ナショナルトレーニングセンターのある東京都北区の西が丘地区に移し、「『体育の日』中央記念行事」として、文部科学省、(財)日本体育協会、(独)日本スポーツ振興センター、(財)日本レクリエーション協会等とともに、新たな事業として実施する。

参加者募集は、開催地域およびJOC公式サイト(JOCニュース)にて告知される。



2009 オリンピックデーラン

2009オリンピックデーラン・アンバサダー

荻原 健司 / スキー・ノルディック複合
 荻原 次晴 / スキー・ノルディック複合
 千葉 真子 / 陸上競技・長距離
 中村 真衣 / 水泳・競泳
 大林 素子 / バレーボール
 黒木 知宏 / 野球

2009オリンピックデーラン開催地一覧

開催予定日	大会名	開催地
6月7日(日)	大阪大会	大阪府
6月28日(日)	青森大会	青森県
7月5日(日)	喜多方大会	福島県
8月23日(日)	土別大会	北海道
10月12日(月/祝)	「体育の日」中央記念行事	東京都
10月25日(日)	神戸大会	兵庫県
11月1日(日)	長野大会	長野県
11月22日(日)	ひたちなか大会	茨城県
2010年1月10日(日)	和歌山大会	和歌山県

オリンピックデーラン

<http://www.joc.or.jp/event/dayrun/>

PHOTO KISHIMOTO



山田敬蔵

YAMADA Keizo

1927年11月30日、秋田県大館市生まれ。1952年のヘルシンキオリンピックにマラソン日本代表として出場し、26位。1953年、ボストンマラソン優勝。2時間18分51秒は当時の世界最高記録とされたが、のちに距離不足が判明。ボストンマラソンには1995年から連続出場しており、1998年から2001年まで70歳以上の部で4連覇。2007年に走行35万kmを達成。現在もさまざまなマラソン大会に、ゲストランナーとして参加している。写真は、韓国の市民マラソンにゲストランナーとして参加した際、孫氏と撮った記念の一枚。

「先生は『とにかく走れるだけ走ってくれ。走れなくなったら受けなさい。君のように体が小さくても、努力することによって日本で一番にもなることができるのだよ』と言ってくださいました。先生がそう言われたのは、本来なら4回オリンピックに行けたのに、1回は戦争で出場できなかった経験をしているからでしょうね」

「恩師の言葉を忠実に守り続けている山田さん。オリンピックへの憧れは、偉大なオリンピックアンの姿を見たからだった。」

「1936年、ベルリンオリンピックのマラソンで、朝鮮の出身ながら、日本代表として出場された孫基禎先生が金メダル、南昇竜先生が銅メダルを獲得されました。その時の記録映画がきっかけで、オリンピックというのは日本で3番までに入れば出場できるんだと思います、走り続けました」

しかし選考レースでは、よもやの4位。悔し涙を流した山田さんだったが、それまでの実績が考慮され、ヘルシンキ大会代表に選出された。選考員には、陸上競技三段跳で、1928年アムステルダムオリンピックで日本人初の金メダリストとなった織田幹雄氏、同じく1932年ロサンゼルスオ

リンピック金メダリストの南部忠平氏がいた。

「お二人が私を推してくれたと聞いています。金栗先生も、孫先生も、織田先生も、南部先生も、本当に皆さん人格者で、いつもニコニコしていらした」

山田さんにとって憧れのオリンピック。その出会いが、山田さんを現在まで活き活きとさせている。

オリンピックデーランは、憧れのオリンピックと並んで走れるのが魅力であり、他では味わえない良さでもある。山田さんの恩師・金栗さんは「走り続けることで人々に感動を伝えてほしい」とも言われたそう。デーランは、山田さんがその言葉を実践する機会にもなっている。

オリンピック・ムーブメント普及・啓発事業

AFLO SPORT



OLYMPIC CONCERT

ライブだからこそ得られる感動がある。
それは、音楽にもオリンピックにも言える共通点です

ピアニストの小山実稚恵さんは、大のスポーツファン。

アトランタオリンピックでは、マラソンの有森裕子さんを現地で応援した経験を持つ。

昨年、オリンピックコンサート2008に出演された小山さんに、
音楽とスポーツの共通点やオリンピックコンサートの魅力を伺った。

「普段のクラシックの演奏会と違って、会場にいられている方々は、オリンピックが好きで、音楽も好きという方です。スポーツと音楽は時に密接な係わり合いを持ちますが、こういう両方の魅力を楽しく紹介するコンサートは、素晴らしいですね。プログラムも華のある作品ばかりでしたし、演奏の合間にはトークも入り、モニターにはオリンピックの名場面が映し出されていましたので、それぞれを楽しんでいるうちに、あっという間に時間が経ってしまいました。舞台も会場もそこに集まっているみんながひとつになって楽しめるコンサートでした」

昨年のオリンピックコンサート2008に出演された時の印象をこのように語るピアニストの小山実稚恵さん。オリンピックが大好きで、オリンピックコンサートへの出演依頼があった際には、二つ返事でOKしたとか。

一般的なクラシックコンサートと違い、オリンピックコンサートには、音楽に合わせてオリンピック映像が流れるとともに、曲間にはトークコーナーが設けられている。そこでは、司会者がオリンピックにまつわるエピソードを語ったり、ゲストオリンピックアンが登場して思い出を語ったりする。小山さんは昨年、そのコーナーで有森裕子さんと感激の対面をした。アトランタオリンピック時には、沿道とスタジアムで有森さんに声援を送ったエピソードにちなんでの対面だった。

「どうしてもオリンピックが見たくて、現地の友人に頼んで、あれもこれ

オリンピックコンサートとは

オリンピックコンサートは、近代オリンピックの復興と、国際オリンピック委員会 (IOC) の創設が決議された1894年6月23日のオリンピックデーを記念して、JOCが1997年から開催している文化イベント。クラシック音楽とオリンピック映像を融合させ、2009年度は「あの感動をもう一度、挑戦ニッポン!—2016年東京へ!—」をテーマに、過去のオリンピックの名場面映像をバックに、全13曲が演奏された。オリンピアンもゲストとして参加し、曲の合間に楽しいトークを披露。また、さまざまな演出によりオリンピックを身近に感じていただきながらオリンピック・ムーブメントの普及・啓発を行なっている。

PHOTO KISHIMOTO



オリンピックコンサート2009は円光寺雅彦氏の指揮、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の演奏にて開催され、約3000人が来場した

PHOTO KISHIMOTO



ゲストオリンピアンとして来場した宮下純一さん(中央)。司会はアテネ大会競泳女子800m自由形金メダリストの柴田亜衣さんと石澤典夫NHKアナウンサー

オリンピックコンサート

<http://www.joc.or.jp/event/concert/>

A.F.L.O. SPORT



有森さんと感激の対面を果たした小山さん

PHOTO KISHIMOTO



小山実稚恵

KOYAMA Michie

東京藝術大学、同大学院修了。1982年チャイコフスキー国際コンクール第3位、1985年ショパン国際ピアノコンクール第4位と、二大国際コンクールに日本人として初めて入賞。2006年からはBunkamuraオーチャードホールにて年2回ずつ2017年まで「12年間・24回リサイタルシリーズ『小山実稚恵の世界』」〜ピアノで綴るロマンの旅〜に取り組む。ソニーよりCDを多数リリース、レコード芸術誌特選盤に選ばれるなどいずれも高い評価を得ている。2005年度文化庁芸術祭音楽部門の大賞、2005年第7回ホテルオークラ音楽賞を受賞。

もと取れるだけのチケットを手配してもらってアトラクタに行きました。連日、複数の競技を観戦しました。その中で特に感激したのは陸上競技。メインの夜のレースでは、みんながカメラのフラッシュを焚くから、客席中がピカピカして本当にきれいでした。レースが近づくと、徐々にスタジアム中が緊張の渦に包まれていく感じが凄かったです。また、現場で見ていると、選手が追いついている時とそうでない時では、例えば同じ10mでも距離が短く感じられたり、長く感じられたり、心情が入ると感じ方が変わってきます。カメラで切り取られた映像でなく、自分の目で自分の見たいところを見られ、雰囲気と一緒に、気持ちや緊張感も体感できました」

ライブだからこそ、スタジアムだからこそ味わえる臨場感。小山さんは、

4年に1度の大会で結果を残すために本番に臨むオリンピアンたちの集中力に大いに感動するとともに、アスリートが天候や会場の違いに対応してコンディショニングを行なう点に、演奏家との共通点を感じたそうだ。

「例えば、アスリートにとってはグラウンドコンディションがほんの少し違うだけでも、相当走りが違ってくると思いますが、それはピアノも同じだと思います。コンサートのリハーサルはもちろんしませんが、リハーサルと本番とは全く違う。会場に人が入れば、音の響きだって全く変わってしまいます。厚手の洋服は吸音材と同じことで、梅雨時の湿気は楽器を湿らせ、音の響きも鈍くなります。だから、いつも同じように弾いていてはダメで、自分で調整が必要なのはスポーツと同じです」

さらに小山さんは、スポーツと音楽に共通するものとして、生の臨場感から得られる「感動」がある、と語る。

「オリンピックコンサートの会場では、オリンピアン生の声を聞けるんです。後日、テレビ放送もありますが、そこではインタビュの一部しか聞けません。それにとえノーカットであろうと、結果がわかっているものを見たり聞いたりするのは、現在進行形で、1秒先の運命がわからない状況で、その瞬間に立ち会えるのは、ドキドキ感が全然違います」

ライブだから得られる感動。オリンピックコンサートは、まさにオリンピックと音楽の共通点を融合させたぜいたくな機会、だといえる。

オリンピック・ムーブメント普及・啓発事業

環境活動

<http://www.joc.or.jp/eco/>

オリンピックの開催にあたり環境保護団体からのさまざまな抵抗運動に遭い、IOCは、オリンピック・ムーブメントに、これまでの「スポーツ」「文化」に加え、1990年代、「環境」という3本目の柱を加えた。以来、IOCのスポーツと環境委員会をリーダーとして、NOC（国内・地域オリンピック委員会）は、環境保全・啓発運動を推進している。

JOCでは、2001年より「スポーツ環境専門委員会」を設置し、JOC加盟競技団体とともに環境活動の啓発・実践活動を推進。2003年には、全NOCの中で、初めて環境マネジメントシステムの国際規格ISO14001に認証登録し、2009年には2度目の更新登録をしている。

JOCは環境啓発のために、毎年ポスター

とパンフレットを作成し、年度の活動をまとめた報告書を各競技団体に配布しているほか、JOC公式サイトに「スポーツと環境」のページを制作。また2004年に加盟団体の担当者を対象として「第1回スポーツと環境・担当者会議」を、2005年には各地域のスポーツ指導者を対象として「第1回スポーツと環境・地域セミナー」を開催し、スポーツ現場での環境保全・啓発活動の取り組みについての講演、事例発表等のほか、情報交換などを行なっている。

2005年2月16日の京都議定書発効にあわせて開始した、環境省が推進する温室効果ガス6%削減のアクションプラン「チーム・マイナス6%」運動にも参加。また2008年には、競技毎に実際的な取り組み

を提示したIOC発行の『IOCスポーツと環境・競技別ガイドブック』を翻訳したほか、このガイドブックの概要をまとめたマニュアルを独自に制作するとともに、「Think Globally Act Locally（地球規模で考え、足もとから行動する）」というスローガンを制定。環境保全のために、スポーツ界がどのような役割を果たしているのか、専門家とオリンピックが集い、ディスカッションとトークで考える「「スポーツと環境」グリーンアクションフォーラム」をチーム・マイナス6%との共催により開催するなど、環境省との連携による環境保全・啓発活動にも加盟団体とともに協力している。



AFLO SPORT

「スポーツと環境」グリーンアクションフォーラムでは、山本浩NHK解説委員(左)が司会するなか、北島康介選手(競泳)、太田雄貴選手(フェンシング)、谷本歩実選手(柔道)がパネルディスカッションし、低炭素社会を目指す「スポーツと環境 アクション決議」を読み上げた。



2009年度「スポーツと環境」ポスター



IOC発行の『IOCスポーツと環境・競技別ガイドブック』日本語版。マニュアルとともに、JOC公式サイトからダウンロードできる

JOC公式サイト／JOCメールマガジン／広報誌「OLYMPIAN」

<http://www.joc.or.jp/>

JOCでは、オリンピック・ムーブメント推進を目的に、オリンピック競技大会およびオリンピックに関連する情報の提供・発信元として、JOC公式サイト(<http://www.joc.or.jp/>)とJOCメールマガジン、広報誌『OLYMPIAN』を制作している。

JOC公式サイトは、「オリンピック」「競技情報」「選手インタビュー」「オリンピズム」「選手強化」の各カテゴリに沿って、オリンピックの歴史や大会情報、味の素トレセンでのチームジャパン情報、JOCの活動や選手強化情報等を随時公開している。また2008年度からは、毎月下旬に

配信の「JOC公式メールマガジン」もスタート。オリンピックおよびアスリート情報を配信し、オリンピック・ムーブメントの推進に努めている。

また広報誌『OLYMPIAN』は、JOC発行のオフィシャルマガジンで、2008年度より年1回発行。冊子はJOC加盟団体、全国の高校のほか、各都道府県体育協会、教育委員会と中央図書館、スポーツに関連のある学部を持つ大学などに配布している。

[JOCメールマガジンの登録（無料）](#)

<http://www.joc.or.jp/magazine/>



加盟競技団体等

〔財〕日本オリンピック委員会加盟団体一覧

(財)日本陸上競技連盟	(財)日本卓球協会	(財)全日本なぎなた連盟
(財)日本水泳連盟	(財)全日本軟式野球連盟	(財)全日本ボウリング協会
(財)日本サッカー協会	(財)日本相撲連盟	日本ボブスレー・リュージュ連盟
(財)全日本スキー連盟	(社)日本馬術連盟	全日本アマチュア野球連盟
(財)日本テニス協会	(社)日本フェンシング協会	(特非)日本スポーツ芸術協会
(社)日本ボート協会	(財)全日本柔道連盟	(社)日本武術太極拳連盟
(社)日本ホッケー協会	(財)日本ソフトボール協会	(社)日本カーリング協会
(社)日本アマチュアボクシング連盟	(財)日本バドミントン協会	(社)日本トリアスロン連合
(財)日本バレーボール協会	(財)全日本弓道連盟	(財)日本ゴルフ協会
(財)日本体操協会	(社)日本ライフル射撃協会	(社)日本スカッシュ協会
(財)日本バスケットボール協会	(財)全日本剣道連盟	(社)日本ビリヤード協会
(財)日本スケート連盟	(社)日本近代五種・バイアスロン連合	(社)日本ボディビル連盟
(財)日本アイスホッケー連盟	(財)日本ラグビーフットボール協会	(社)全日本テコンドー協会
(財)日本レスリング協会	(社)日本山岳協会	(社)日本ダンススポーツ連盟
(財)日本セーリング連盟	(社)日本カヌー連盟	△日本カバディ協会
(社)日本ウエイトリフティング協会	(社)全日本アーチェリー連盟	△日本セパタクロー協会
(財)日本ハンドボール協会	(財)全日本空手道連盟	△日本チェス協会
(財)日本自転車競技連盟	(社)全日本銃剣道連盟	
(財)日本ソフトテニス連盟	(社)日本クレ射撃協会	△は承認団体

〔JOCパートナー都市協定〕締結都市

大阪市	熊本県	横浜市
長野市	熊本市	広島県
福岡県	東京都	兵庫県
福岡市	北海道	神戸市
広島市	札幌市	

〔JOC二国間パートナーシップ協定〕締結NOCs

Comité Olímpico Cubano/キューバ	National Olympic Committee of Lithuania/リトアニア	Canadian Olympic Committee/カナダ
Österreichisches Olympisches Comité/オーストリア	Korean Olympic Committee/大韓民国	National Olympic Committee of Thailand/タイ
United States Olympic Committee/アメリカ	British Olympic Association/英国	Swedish Olympic Committee/スウェーデン
National Olympic Committee for Germany/ドイツ	Russian Olympic Committee/ロシア	Olympic Council of Ireland/アイルランド
Chinese Olympic Committee/中華人民共和国	Italian National Olympic Committee/イタリア	

関係諸団体

文部科学省	日本体力医学会	(財)ミスノ国際スポーツ交流財団
(独)日本スポーツ振興会	(社)中央青少年団体連絡協議会	(財)石本記念デサントスポーツ科学振興財団
(財)日本体育協会	(社)青少年育成国民会議	駒沢オリンピック公園総合運動場
外務省	(財)日本中学校体育連盟	(財)日本プロスポーツ協会
(財)JKA	全国高等学校体育連盟	秩父宮記念スポーツ博物館
(財)日本宝くじ協会	(財)スポーツ安全協会	(財)日本アンチ・ドーピング機構
(財)車輛競技公益資金記念財団	(財)日本体育施設協会	日本スポーツ仲裁機構
日本中央競馬会	(社)全国体育指導委員連合	(特非)日本オリンピックズ協会
日本馬主協会連合会	(財)日本レクリエーション協会	(特非)日本オリンピック・アカデミー
(社)日本経済団体連合会	(財)笹川スポーツ財団	日本トップリーグ連携機構
(社)経済同友会	(社)スポーツ産業団体連合会	(財)日本障害者スポーツ協会
日本商工会議所	(財)スポーツ振興資金財団	スペシャルオリンピックス日本
国立オリンピック記念青少年総合センター	日本アマチュアスポーツ協会の	(特非)東京オリンピック・パラリンピック招致委員会
(財)健康・体力づくり事業財団	日本イベントスポーツ記念品協会	(財)嘉納治五郎記念国際スポーツ研究・交流センター
日本体育学会	(財)ミスノスポーツ振興会	

JOCのマーケティング

JOCのマーケティング

<http://www.joc.or.jp/aboutjoc/marketing/>

マーケティングの目的

JOCでは、「オリンピックを通じて、人類が共に栄え、文化を高め、世界平和の火を永遠に灯し続ける」というJOCの理念を実現するために、オリンピックをはじめとする国際総合競技大会（※）への日本代表選手団の派遣、オリンピック・ムー

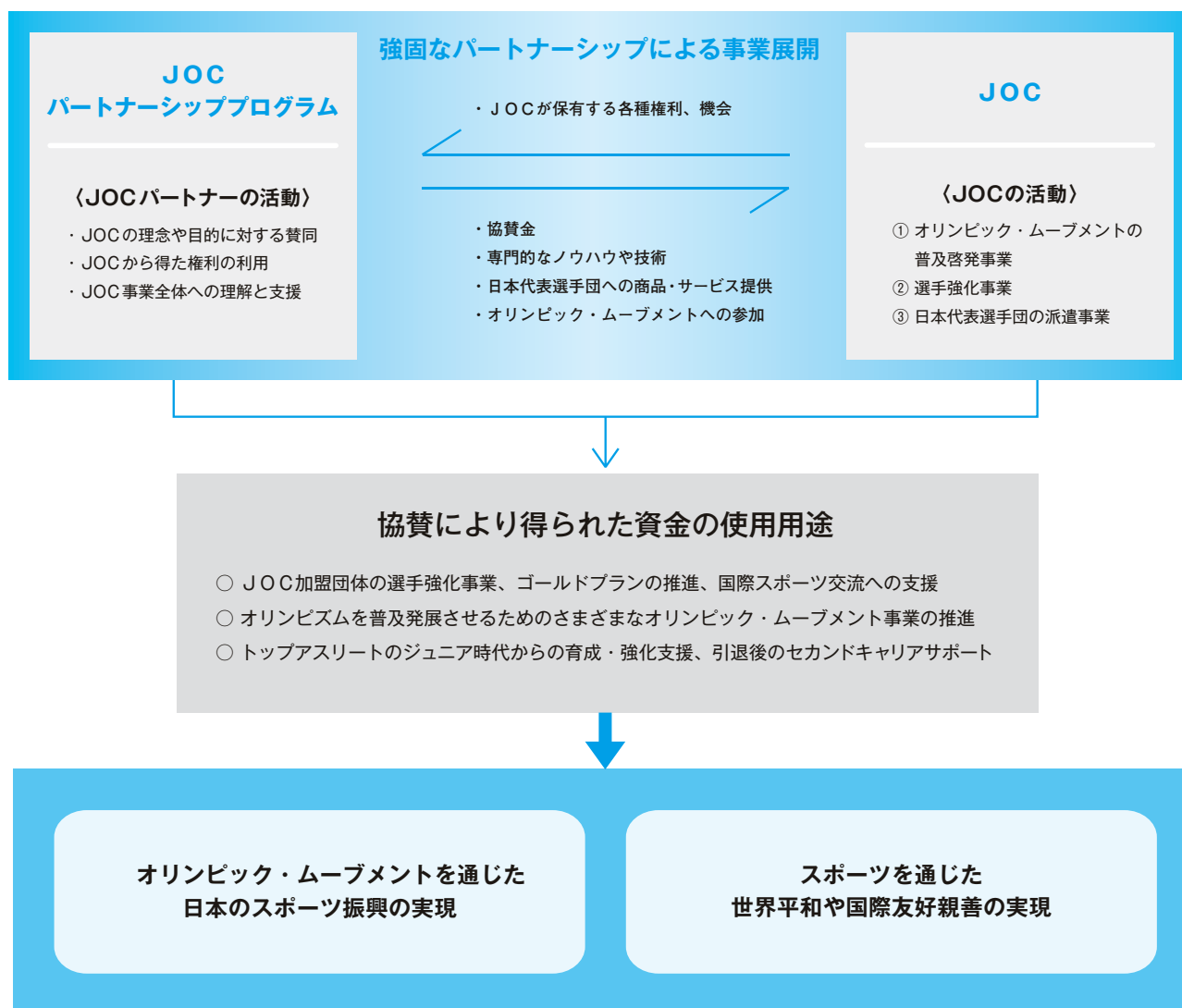
ブメントの推進、そして選手の育成・強化事業に取り組んでいる。

こうした活動に必要な資金、専門的なノウハウ等をご提供いただき、JOC、日本代表選手団及び日本のオリンピック・ムーブメントの推進を支えていただくた

めの仕組みが、JOCのマーケティング活動である。

※ JOCが管轄している国際総合競技大会
オリンピック競技大会、アジア競技大会、ユニバーシアード競技大会、東アジア競技大会 等。

■ JOC マーケティングの構造



マーケティングに使用しているマーク等

マーケティング活動への協賛を通してご支援いただいている企業に対し、JOCマーク、公式呼称、選手の肖像、オリンピック日本代表選手団に関する映像等をはじめとするJOCが所有・管理する以下のような知的財産の使用を承認し、JOC、日本代表選手団及び日本のオリンピック・ムーブメントの推進を支えていただいている。

注：協賛内容によって、使用できる知的財産は異なる。



がんばれ!ニッポン!
スローガン「がんばれ!ニッポン!」



第29回オリンピック競技大会
(2008/北京)
日本代表選手団公式応援マーク

1. JOCのマーク及び公式呼称

- 1. JOCのマーク
 - 第2エンブレム
 - スローガン 「がんばれ!ニッポン!」
 - JOC コミュニケーションマーク
 - オリンピック日本代表選手団公式応援マーク 等
- 2. 公式呼称 (JOC及び日本代表選手団との関係を表す呼称)
 - 例：JOCオフィシャルパートナー
オリンピック日本代表選手団を応援しています
JOC公式ライセンス商品 等

2. シンボルアスリートの肖像

- JOCが管轄するシンボルアスリートの肖像 (容姿、氏名、イラスト、通称、サイン等)
- ◆シンボルアスリート一覧

選手名	競技名
皆川賢太郎	スキー/アルペン
上村愛子	スキー/フリースタイル
長島圭一郎	スケート/スピード
加藤榮治	スケート/スピード
高橋大輔	スケート/フィギュア
浅田真央	スケート/フィギュア
内村航平	体操/体操
吉田沙保里	レスリング
浜口京子	レスリング
福原 愛	卓球
内柴正人	柔道
太田雄貴	フェンシング

(7月1日現在)

3. 日本代表選手団に関する映像

- オリンピックをはじめとする国際総合競技大会
- JOC の所有する動画及び静止画像

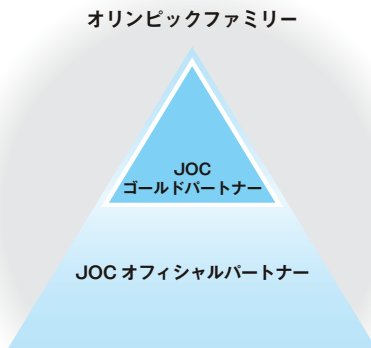
マーケティングプログラムの種類

JOCでは、日本国内において、スポンサーシッププログラム、ライセンスングプログラムをはじめとするさまざまな

マーケティングプログラムを実施している。主なマーケティングプログラムは以下のとおりとなっている。

■ 2009～2012

JOCパートナーシッププログラム構造



1. 主なスポンサーシッププログラム

- 2009～2012 JOC パートナーシッププログラム
2009～2012 JOC パートナーシッププログラムは、複数階層によるスポンサーシップ制を採用し、JOC ゴールドパートナーとJOCオフィシャルパートナーの2つのパートナー制によって構成される。
- JOCゴールドパートナー
JOCパートナーシッププログラムにおける国内最高位のパートナー。
JOC・日本代表選手団に関する権利、パートナーシップに関する権利、パートナーリコグニションに関する権利、ホスピタリパッケージに関する権利、パートナーサービスに関する権利、共同事業開発プログラムに関する権利のスタンダードプログラムに加え、ゴールドパートナー特典権利である、シンボルアスリートの肖像使用権等が付与されている。

- JOCオフィシャルパートナー
JOC・日本代表選手団に関する権利、パートナーシップに関する権利、パートナーリコグニションに関する権利、ホスピタリパッケージに関する権利、パートナーサービスに関する権利、共同事業開発プログラムに関する権利を有する。

- TOP パートナープログラム
国際オリンピック委員会の主導により実施されているオリンピックに関する最高位のスポンサーシッププログラム。
全世界で、オリンピックに関するマーク類及び参加している選手団に関する知的財産等を契約した商品・サービスに関して使用することができるプログラム。
日本国内においては、オフィシャルパートナーと同等の権利を有する。

2. 主なライセンスングプログラム (商品化プログラム)

- JOC オフィシャルライセンスングプログラム
日本国内で、契約した商品にJOCのマークを使用して販売することができる商品化プログラム。

平成20年度 事業報告

オリンピック憲章に基づく国内オリンピック委員会として、寄附行為に掲げる目的を達成するため、以下の諸事業を実施した。

スポーツ選手を育成・強化する事業

〈第29回オリンピック競技大会選手団派遣事業〉

平成20年8月8日～8月24日 中華人民共和国／北京
福田富昭団長以下576名を派遣。実施26競技に参加、金9、銀6、銅10の計25個のメダルを獲得した。

〈第24回ユニバーシアード冬季競技大会選手団派遣事業〉

平成21年2月18日～2月28日 中華人民共和国／ハルビン
鈴木恵一団長以下187名を派遣。実施4競技に参加、金9、銀8、銅3の計20個のメダルを獲得した。

〈選手強化事業〉

1. 強化合宿事業

- 1) 海外強化合宿
30競技 153行事 1,586名
- 2) 国内強化合宿
41競技 530行事 14,611名

2. コーチ力強化事業

- 1) 専任コーチングディレクター等の設置
- 2) 海外優秀コーチ設置
- 3) コーチ研修派遣
- 4) スタッフ会議等の開催

3. スポーツ国際交流事業

世界のトップレベルにある諸外国の選手・チームとの交流を通じて実戦経験を積み、競技力の向上を図った。

- 1) チーム派遣 42競技 337行事 4,298名
- 2) チーム招待 14競技 33行事 1,046名
- 3) 日韓スポーツ交流 14競技 30行事 750名

4. 調査研究事業

JOCゴールドプランに基づく、各種プロジェクト及び医・科学サポート等を実施した。

5. 強化対策事業

オリンピック強化指定選手等を対象に健康管理を実施するとともに、選手強化事業全般の企画・運営及び情報収集等を行なった。

〈ナショナルトレーニングセンター設置事業〉

〈アンチ・ドーピング推進支援事業〉

〈スポーツ指導者海外研修事業〉

オリンピック・ムーブメントを推進する事業

〈オリンピックデー記念事業〉

オリンピックとともに参加するジョギングを中心とした「オリンピックデーラン」を全国10会場において実施、また、オリンピックコンサートを開催した。

〈スポーツ情報の提供事業〉

オリンピック大会をはじめとするスポーツに関する各種情報を広報誌「オリンピック」等の定期刊行物やインターネットホームページ《http://www.joc.or.jp》、各種セミナー等を通じ広く情報提供を行なうとともに、オリンピックの基本理念等を掲載したパンフレット並びにカレンダーを作成し、広く一般に配布した。

〈スポーツ環境保全活動〉

IOCが取り組んでいるスポーツを通じた環境保全行動にもとづき、本会事務所の環境管理システムを構築し、スポーツ関係者に対し環境保全の必要性を広めるための啓発活動を実施した。

その他本会の目的を達成するために必要な事業

〈マーケティング事業〉

マーク等商標権の活用により財政基盤の確立を図るとともに、新プログラムによるマーケティング活動を推し進めた。

〈オリンピック大会招致活動〉

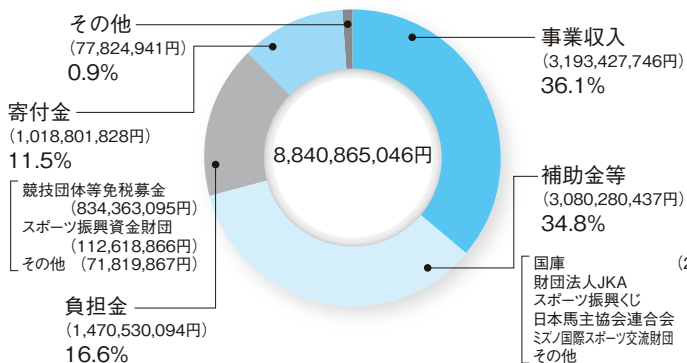
2016年に開催される第31回オリンピック競技大会を日本に招致するため、東京オリンピック・パラリンピック招致委員会と連携し招致活動事業を展開した。

〈国立スポーツ科学センターとの連携〉

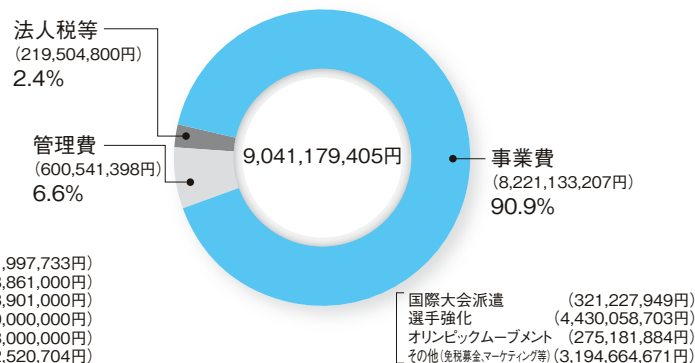
選手強化事業推進のため、調査研究事業、選手の健康診断等を実施した。

平成20年度 決算概要

〈事業活動収入割合〉



〈事業活動支出割合〉



平成21年度 事業計画

スポーツ選手を育成・強化する事業

〈第21回オリンピック冬季競技大会選手団派遣事業〉

平成22年 2月12日～2月28日 カナダ／バンクーバー

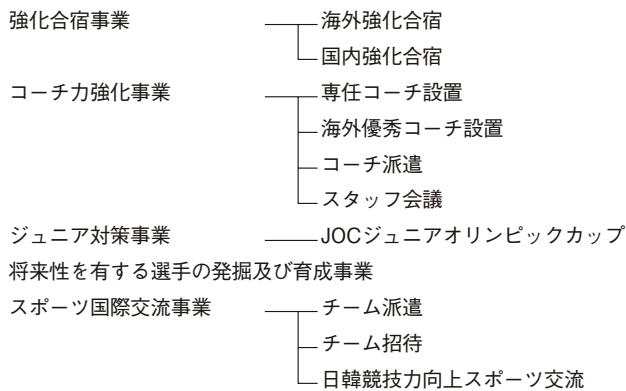
〈第25回ユニバーシアード競技大会選手団派遣事業〉

平成21年 7月1日～7月12日 セルビア／ベオグラード

〈第5回東アジア競技大会選手団派遣事業〉

平成21年12月5日～12月13日 ホンコン・チャイナ／香港

〈選手強化事業〉



調査研究事業

チームジャパンとしての総合力を活かす戦略の調査研究を実施する。

アンチ・ドーピング活動推進事業

強化指定選手及び日本代表候補選手に対して検査を実施するとともに普及・啓発活動を実施する。

スポーツ指導者海外研修事業

海外の選手強化制度、指導者の実態等について調査・研究し将来を担う人材育成を目的に各競技の指導者等を派遣する。

組織基盤強化事業

役員を国際スポーツ組織に派遣し、国際スポーツ社会で活躍が期待できる人材を養成する。

〈ナショナルトレーニングセンター事業〉

〈JOCゴールドプランの推進〉

オリンピック・ムーブメントを推進する事業

〈オリンピックデー記念事業〉

オリンピックデー（6月23日）を記念したジョギング大会を全国各会場において実施するとともに、オリンピックコンサートを開催する。

〈スポーツ情報の提供〉

オリンピック大会、アジア大会、ユニバーシアード大会をはじめとするスポーツに関する各種情報を、ホームページ（<http://www.joc.or.jp/>）、メールマガジン、広報誌「オリンピアン」、パンフレットといった広報ツールに加え、各種セミナー、イベント等も通じ、広く提供する。

〈スポーツ環境保全活動〉

IOCが取り組んでいるスポーツを通じた環境保全行動にもとづき、日本のスポーツ界における環境保全の啓発活動及び競技会を含めた各競技特性に適應する環境保全活動を推進する。また、審査登録しているISO14001を継続すべく事務局の環境管理システムを維持発展させる。

その他本会の目的達成に必要な事業

〈マーケティング事業〉

本会が保有するマーク等商標権の活用による自主財源の確保を図るために、マーケティング活動を推進する。

〈オリンピック大会招致活動〉

2016年に開催される第31回オリンピック競技大会を日本に招致するため、東京都、東京オリンピック・パラリンピック招致委員会とその招致活動事業を展開する。

〈国立スポーツ科学センターとの連携〉

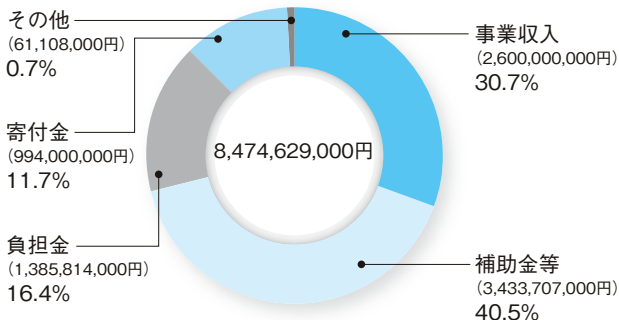
選手強化事業推進のため、国立スポーツ科学センターと連携のもと、医学・科学・情報戦略を中心とした調査研究事業、強化スタッフの質的向上事業及び選手の健康診断等を実施する。

〈その他〉

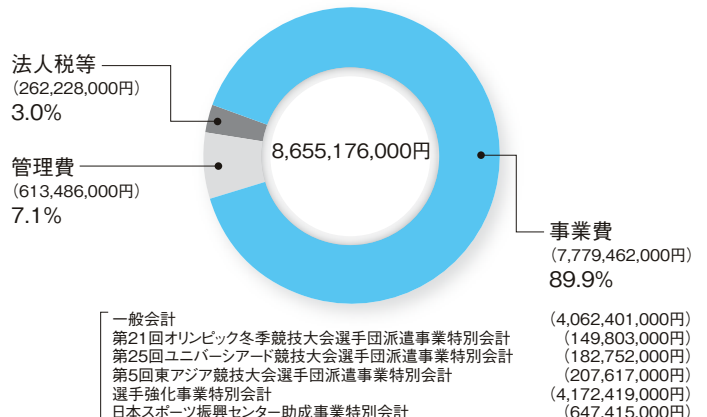
OCAが主催する新総合競技大会に参加、アジア地域の国際交流を図る。

平成21年度 収支予算 平成21年4月1日から平成22年3月31日まで

〈事業活動収入割合〉



〈事業活動支出割合〉



オリンピック 日本の大会参加状況

夏季大会

回 (開催年)	開催地(国)	開催期間	実施 競技数	実施 種目数	参加国 (地域) 数	参加 選手数	日本の参加者数			日本の 参加 競技数	日本のメダル 獲得数			団長	主将	旗手	
							役員	選手	計		G	S	B				
1 (1896)	アテネ(ギリシャ)	4.6~4.15	9	43	14	241	—	—	—	—	—	—	—				
2 (1900)	パリ(フランス)	5.14~10.28	18	95	24	997	—	—	—	—	—	—	—				
3 (1904)	セントルイス(アメリカ)	7.1~11.23	17	91	12	651	—	—	—	—	—	—	—				
4 (1908)	ロンドン(イギリス)	4.27~10.31	22	110	22	2,008	—	—	—	—	—	—	—				
5 (1912)	ストックホルム(スウェーデン)	5.5~7.27	14	102	28	2,407	2	2	0	4	1	0	0	0	嘉納治五郎		
6 (1916)	ベルリン(ドイツ) - 中止																
7 (1920)	アントワープ(ベルギー)	4.20~9.12	22	154	29	2,626	3	15	0	18	3	0	2	0	嘉納治五郎		
8 (1924)	パリ(フランス)	5.4~7.27	17	126	44	3,089	9	19	0	28	4	0	0	1	岸 清一		
9 (1928)	アムステルダム(オランダ)	5.17~8.12	14	109	46	2,883	13	42	1	56	6	2	2	1	山本忠興	高石勝男	中沢米太郎
10 (1932)	ロサンゼルス(アメリカ)	7.30~8.14	14	117	37	1,332	61	115	16	192	9	7	7	4	平沼亮三		織田幹雄
11 (1936)	ベルリン(ドイツ)	8.1~8.16	19	129	49	3,963	70	162	17	249	13	6	4	10	平沼亮三		大島謙吉
12 (1940)	東京(日本) - 返上 ヘルシンキ(フィンランド) - 中止																
13 (1944)	ロンドン(イギリス) - 中止																
14 (1948)	ロンドン(イギリス)	7.29~8.14	17	136	59	4,104	—	—	—	—	—	—	—				
15 (1952)	ヘルシンキ(フィンランド)	7.19~8.3	17	149	69	4,955	31	61	11	103	12	1	6	2	田畑政治	古橋廣之進	沢田文吉
16 (1956)	メルボルン(オーストラリア) ストックホルム(スウェーデン)	11.22~12.8 6.10~6.17	16 1	145 6	67 29	3,155 159	45 3	101 2	16 0	162 5	12 1	4 0	10 0	5 0	田畑政治	竹本正男	笹原正三
17 (1960)	ローマ(イタリア)	8.25~9.11	17	150	83	5,338	52	147	20	219	16	4	7	7	春日 弘	糸山隆司	小野 喬
18 (1964)	東京(日本)	10.10~10.24	19	163	93	5,151	82	294	61	437	20	16	5	8	大島謙吉	小野 喬	福井 誠
19 (1968)	メキシコシティ(メキシコ)	10.12~10.27	20	172	112	5,516	32	153	30	215	17	11	7	7	大庭哲夫	菅原武男	遠藤幸雄
20 (1972)	ミュンヘン(西ドイツ)	8.26~9.11	23	195	121	7,134	37	144	38	219	19	13	8	8	青木半治	中村祐造	篠巻政利
21 (1976)	モントリオール(カナダ)	7.17~8.1	21	198	92	6,084	55	152	61	268	19	9	6	10	河野謙三	加藤沢男	猫田勝敏
22 (1980)	モスクワ(ソビエト)	7.19~8.3	21	203	80	5,179	—	—	—	—	—	—	—	—			
23 (1984)	ロサンゼルス(アメリカ)	7.28~8.12	23	221	140	6,829	77	178	53	308	18	10	8	14	柴田勝治	山下泰裕	室伏重信
24 (1988)	ソウル(韓国)	9.17~10.2	25	237	159	8,391	78	188	71	337	20	4	3	7	柴田勝治	斎藤 仁	小谷実可子
25 (1992)	バルセロナ(スペイン)	7.25~8.9	28	257	169	9,356	114	181	82	377	21	3	8	11	古橋廣之進	古賀稔彦	中田久美
26 (1996)	アトランタ(アメリカ)	7.19~8.4	26	271	197	10,318	189	160	150	499	23	3	6	5	古橋廣之進	谷口浩美	田村亮子
27 (2000)	シドニー(オーストラリア)	9.15~10.1	28	300	199	10,651	171	158	110	439	24	5	8	5	八木祐四郎	杉浦正則	井上康生
28 (2004)	アテネ(ギリシャ)	8.13~8.29	28	301	201	10,625	201	141	171	513	26	16	9	12	竹田恒和	井上康生	浜口京子
29 (2008)	北京(中国)	8.8~8.24	28	302	204		237	170	169	576	26	9	6	10	福田富昭	鈴木桂治	福原 愛

冬季大会

回 (開催年)	開催地(国)	開催期間	実施 競技数	実施 種目数	参加国 (地域) 数	参加 選手数	日本の参加者数			日本の 参加 競技数	日本のメダル 獲得数			団長	主将	旗手	
							役員	選手	計		G	S	B				
1 (1924)	シャモニー・モンブラン(フランス)	1.25~2.5	6	16	16	258	—	—	—	—	—	—	—				
2 (1928)	サン・モリッツ(スイス)	2.11~2.19	4	14	25	464	1	6	0	7	1	0	0	0			
3 (1932)	レークプラシッド(アメリカ)	2.4~2.15	4	14	17	252	5	17	0	22	2	0	0	0			
4 (1936)	ガルミッシュ・パルテンキルヘン(ドイツ)	2.6~2.16	4	17	28	646	14	33	1	48	3	0	0	0			
5 (1948)	サン・モリッツ(スイス)	1.30~2.8	4	22	28	669	—	—	—	—	—	—	—	—			
6 (1952)	オスロ(ノルウェー)	2.14~2.25	4	22	30	694	5	13	0	18	2	0	0	0			
7 (1956)	コルチナ・ダンペッツォ(イタリア)	1.26~2.5	4	24	32	821	7	10	0	17	2	0	1	0	竹田恒徳		
8 (1960)	スコーク・バレー(アメリカ)	2.18~2.28	4	27	30	665	11	36	5	52	3	0	0	0	木原 均	猪谷千春	上野純子
9 (1964)	インスブルック(オーストリア)	1.29~2.9	6	34	36	1,091	13	42	6	61	4	0	0	0	木原 均	長久保文夫	菊地定夫
10 (1968)	グルノーブル(フランス)	2.6~2.18	6	35	37	1,158	16	53	9	78	4	0	0	0	西田信一	佐藤和夫	金入孝明
11 (1972)	札幌(日本)	2.3~2.13	6	35	35	1,006	20	70	20	110	6	1	1	1	柴田勝治	鈴木恵一	益子峰行
12 (1976)	インスブルック(オーストリア)	2.4~2.15	6	37	37	1,123	15	51	6	72	6	0	0	0	山田正彦	笠谷幸生	鈴木正樹
13 (1980)	レークプラシッド(アメリカ)	2.13~2.24	6	38	37	1,072	23	46	4	73	6	0	1	0	伴 素彦	久保田知男	若林 修
14 (1984)	サラエボ(ユーゴスラビア)	2.8~2.19	6	39	49	1,272	30	32	7	69	5	0	1	0	竹田恒徳	出口弘之	高橋忠之
15 (1988)	カルガリー(カナダ)	2.13~2.28	6	46	57	1,423	33	37	11	81	5	0	0	1	堂垣内尚弘	黒岩 彰	橋本聖子
16 (1992)	アルベールビル(フランス)	2.8~2.23	7	57	64	1,801	42	42	21	105	5	1	2	4	堤 義明	佐々木一成	川崎 努
17 (1994)	リレハンメル(ノルウェー)	2.12~2.27	6	61	67	1,737	45	49	16	110	5	1	2	2	南洞邦夫	橋本聖子	三ヶ田礼一
18 (1998)	長野(日本)	2.7~2.22	7	68	72	2,176	147	100	66	313	7	5	1	4	八木祐四郎	荻原健司	清水宏保
19 (2002)	ソルトレークシティ(アメリカ)	2.8~2.24	7	78	77	2,399	109	61	48	218	6	0	1	1	竹田恒和	原田雅彦	三宮恵利子
20 (2006)	トリノ(イタリア)	2.10~2.26	7	84	80	2,508	126	59	53	238	6	1	0	0	暹塚研一	岡崎朋美	加藤条治

OLYMPIAN 2009 平成21年7月17日発行 発行/財団法人日本オリンピック委員会

〒150-8050 東京都渋谷区神南1-1-1 岸記念体育会館内 TEL 03-3481-2313 FAX 03-3481-0977
©JAPANESE OLYMPIC COMMITTEE 無断転載禁止

URL <http://www.joc.or.jp>
e-mail olympian@joc.jp

オリンピックによせられた小さな想いが、 人類の大きな夢をかなえました。

ある少年からよせられた1通の手紙。それにはこう書かれていました。

「世界がひとつの国になって入場してほしい」。

少年の想いは、1956年開催の第16回メルボルン大会にかないます。

閉会式で各国の選手たちが肩を組み、笑い合い、入りまじって入場してきたのです。

そこには国境を越えたひとつの国がありました。

それ以降、感動にあふれた平和と調和を体現するスタイルがいまも続いています。

日本オリンピック委員会(JOC)は、「オリンピックを通じて、人類がともに栄え、

文化を高め、世界平和の火を永遠に灯しつづけること」をめざした

オリンピック・ムーブメントの普及・啓発活動を進めています。



財団法人日本オリンピック委員会

北京オリンピック閉会式 / Photo by PHOTO KISHIMOTO

オリンピック日本代表を応援するパートナー企業のみなさまです。パートナー企業からの協賛金は、オリンピックをはじめ国際競技大会で活躍を期待される日本選手の育成・強化や、オリンピック・ムーブメント推進のために活用されています。

JOC ゴールドパートナー

Asahi

NTT docomo

TOHIO MARINE
東京海上ホールディングス

TOYOTA

日本生命
NISSAY

YAHOO!
JAPAN

AJINOMOTO

JOC オフィシャルパートナー

MIZUNO

OSPREY

asics

KONAMI

Kubota

ExcellHuman

明治乳大食品

JAL

ANA

LOTTE

日清オイリオ

エスチマック
TBC

読売新聞

全農

ワールドワイドパートナー

Coca-Cola

acer

Atos Origin

GE

McDonald's

OMEGA

Panasonic

SAMSUNG

VISA

がんばれーニッポン！[®]



KEIRIN



この事業は、競輪の補助金を受けて実施したものです。

<http://ringring-keirin.jp>